

向日葵の秘密



目次

不倫	1
離婚	6
男児誕生	9
女児誕生	15
殺人事件	20
妊娠	29
勘当	34
捜査	44
ユーチューブ	52
誕生日	56
聞き込み	63
桃農園	73
元妻	81
自首	89
情	101
修復	102
後継	108
キャラ弁	110

不倫

カウベルを鳴らし店内に入ると、カウンターに立つ恰幅のいいマスターが笑みを浮かべながら「いらっしゃい」と声をかける。マスターの前には年配の痩せた男性が座っている。いつもと同じ光景だ。店内には他に客の姿はない。これもいつもと変わらない。いつもと変わるのは今の自分の感情だけだ。

マスターが水の入ったグラスとおしぼりを持って近づいてくる。上着を脱ぎながらホットコーヒーを注文した。

椅子に腰をおろし上着を横に置いて店内を見渡した。年配の男性客と視線が合うと、男性がペコリと照れ臭そうに頭を下げたので、こちらも頭を下げた。笑みを浮かべることはできなかった。

マスターがホットコーヒーを持ってきてくれて、「ごゆっくり」とコーヒーをテーブルに置いた。テーブルは今時、誰もやらないインベーダーゲームだ。ここは若い男女が好んで来るような場所ではないだろうが、人目を避けるにはちょうどよかった。なので、今から会う男はいつもここを待ち合わせ場所にした。

ここで男を待っている時間は、いつも胸に抱えている罪悪感が消え、心をウキウキさせてくれた。しかし、それも今日で終わりになった。佐山孝恵は、数分前まで、この『喫茶すず』である男と会っていた。

これまで、その男と会う時はいつも男の方が孝恵を呼び出した。孝恵が男に会うためには、男の都合に合わせるしかなかったからだ。男から誘いの電話があると、孝恵の心は弾み、他の予定をキャンセルしてでも時間を作った。

孝恵から男に電話したことは、これまで一度もなかったが、今日は孝恵から男にはじめて電話をした。電話する勇気はなかなか持てなかったが、このことを早く男に伝えなければならぬ。男からの誘いの電話を待っている余裕などないと覚悟を決めて携帯電話をバッグから取り出した。

携帯電話に登録してある男の電話番号を呼び出し、通話ボタンを押してから携帯電話を耳に当てた。呼び出し音を聞いている間、胸が苦しくなるくらい鼓動が激しくなったが、男は出そうにない。長い時間呼び出し音を聞いていると覚悟を決めた気持ちが萎えていく。日を改めるべきかな、男からの連絡を待つべきかなと思った瞬間に、「はい」と不機嫌そうな男の声が携帯電話の向こうから聞こえた。

孝恵は慌てて携帯電話を耳に強く当てたが、心臓が潰れそうで、次の言葉が出なかった。

「お前の方から電話してくるなって言ってるだろ」

男は怒鳴りつけるように言った。耳をつんざくような声で、孝恵は携帯電話を耳から少し離れた。

「ご、ごめんなさい。で、でも、大事な話があって」

「大事な話？」

男の声のトーンが低くなった。孝恵はまた携帯電話を耳に近づけた。

「う、うん」

「なんだよ？」

「電話じゃ言いにくいんだけど」

「電話で言いにくいことかよ」

携帯電話の向こうから男の舌打ちする音がした。

「そう。会って話がしたいんだけど」

「今、忙しいんだ。要件聞いてから、会うかどうか決めるから、さっさと要件を言えよ。大した話じゃなかったら承知しねえぞ」

「うん、大事な話。驚かないでよ」

「お前が電話してきた時点で驚いてる」

男は平坦な冷めた口調で言った。

「じ、実は、わたし、お腹にあなたの赤ちゃんができちゃったみたいなの」

電話をかける前は、明るい声で言うべきなのか、神妙な声で言うべきなのか、悩んだが、男の態度のせいで暗い声になってしまった。

孝恵が言い終わると、受話器の向こうから深いため息の音がして、しばらく沈黙した。電話が切れてしまったのかと思うほど、沈黙は長かった。

「もしもし、聞こえてる？」

「ああ、聞こえてる」

無愛想な声をした。

「どうしたらいい？」

「フン、妊娠したってことか」

男は鼻を鳴らし不機嫌そうに言った。

「い、今から会える？」

「忙しいんだけどな」

「ダメ？」

「いや、会うしかねえな。でも少しだけだぞ。今から行くからいつものとこで待ってろ」

男はそう言うとともに電話を切った。孝恵は男の態度から、絶望的だと思ったが、とりあえず、いつもの待ち合わせ場所の『喫茶すず』へと向かった。

いつものことだが、今日も長い時間待たされた。いつもと違うのは今日は暗澹とした気持ちで待っているということだ。これまでは、この待っている時間を幸せに感じた。これから男に会えると思うと自然と心が弾んだ。

カウンターに立つ恰幅のいいマスターと常連客であろう年配の痩せた男性との会話も

これまで、全く耳に届かず気にならなかったが、今日はその会話が耳障りで仕方がなかった。二人の弾む会話が孝恵のざらついた気持ちに一段とやすりをかけた。

「へえ、奏さん、よかったじゃないか。孝ちゃんが後を継いでくれて、孝ちゃんに子どもができるなんてダブルで幸せが来たね。ついに奏さんもおじいちゃんか。俺にもその幸せを分けてくれよ」

マスターの口から出た『孝ちゃんに子供ができる』という言葉聞いて、孝恵の体はピクリと反応した。呼吸するのが苦しくなって、孝恵は耳をふさいだ。

「私たち、別れた方がいいのかな？」

不安と罪悪感が大きくなると、男の腕の中で孝恵はいつも男にそう言った。その時に男から返ってくる言葉はいつも決まって、『妻とは別れるから』だった。

孝恵にとって、その言葉は希望の言葉であり、孝恵の不安や罪悪感を薄める魔法の言葉だった。しかし、その言葉は不安や罪悪感を一瞬だけ薄めることができても、完全に消すことはなかった。そんなことはわかっていたのに、自分がバカだったと孝恵は唇を噛みしめた。

体調の異変に気づいたのは一週間前だった。医者から妊娠していると告げられ、複雑な気持ちになった。病院の帰り道、自分のお腹に手を当て、これであの男は逃げ出すかもしれないという不安と不倫して妊娠したという罪悪感が大きく膨らんだ。一方で、男といっしょになれるチャンスが来たのかもしれない、この子がわたしとあの男を結んでくれるのかもしれないというバカな期待も膨らんだ。さっきの男の電話の態度から遊ばれていたことにやっと気づいた。これで捨てられるんだと覚悟した。

カランカランとカウベルが音を立てたので、孝恵は顔を上げてドアの方を見ると男が立っていた。男は口元を歪めて不機嫌そうな表情を孝恵に向けてきた。男は無言のまま、セカンドバッグをテーブルに投げるように置いて、孝恵の前にドンと座った。

孝恵は男と顔を合わせることができず、広くて厚い胸板に視線を向けていた。この胸に抱かれて幸せだと思っていた時期もあったのと思う。しかし、幸せと思いつつも、不安と罪悪感がいつも影を落としていた。

「俺、忙しいんだけどな」

男が口を開いた。

孝恵は顔を上げて、「お仕事大変そうね」と言ったが、男はそれには答えようとはせず、体を椅子の背もたれに預け、小指で耳穴をほじりながら宙を見ていた。

マスターが水を持って注文を取りにきたが、男はすぐに帰るからと言って注文はしなかった。マスターが席から離れていくのを確認してから、孝恵は背筋を伸ばし、深呼吸をした。

孝恵が覚悟を決めて口を開こうとした瞬間に、またカウベルが鳴った。孝恵がドアの方を見るとサラリーマン風の男性が入ってきた。常連客だろうか、以前にもここで何度か顔を見た記憶がある。男性客は孝恵の後ろの席に腰を下ろした。離れた席に座ってほ

しかったが、そんなことは言えない。男性客はマスターにコーヒーを注文していた。

孝恵は仕切り直して、男の顔を見た。

「急に呼び出してごめんなさい」

孝恵は頭を下げた。

「いいけど、俺、ほんと、今日はあんまり時間ないんだよな」

「まだ工作中なの」

「どうでもいいだろ」

「あ、ご、ごめんなさい」

男はテーブルを人差し指でトントンと叩いていた。

「実はね、わたしのお腹にあなたの赤ちゃんができちゃったみたいなの」

小さくて震える声になった。

「それは、さっき、電話で聞いた」

男はイライラした様子で答えた。

「そ、そうね。さっき電話で話したね」

孝恵は俯いた。

「でも、本当かよ。思い込んでるだけじゃねえのか」

「本当よ。病院に行ってきたんだから」

孝恵はお腹に手を当て、少し声を張った。

「嘘つけ」

男は胸のポケットから煙草の箱を取り出した。

「こんな大事なことで嘘つくわけないでしょ」

さすがの孝恵も声が大きくなった。

「でも、急にそんなこと言われてもなあ」

男は面倒くさそうに言って、箱から煙草を一本抜いて口に咥えた。

「どうしたらいい？」

男はなにも言わず、上着のポケットからジッポアのライターを取り出した。孝恵が男の誕生日にプレゼントしたネーム入りのものだ。男はそのライターで煙草に火をつけて煙を長い時間吸い込んでから、孝恵の顔に向かって思い切り紫煙を吐いた。紫煙が孝恵の顔の前に広がり、孝恵はそれを右手で払った。

「生んでも大丈夫かな？」

「バカなこと言うなよ」

「やっぱり墮ろした方がいい？」

「当たり前だろ。費用は俺の方で何とかしてやる」

「う、うん、わ、わかった」

孝恵は、そう言うしかなかった。

男はしばらく口を開かず、孝恵に目を合わせようともせず、煙草をせわしなく何度も吸っていた。男もさすがに戸惑っている様子だった。男は煙草を灰皿に押し付けてから、孝恵の方に冷めた視線を向けた。

「これを機に、俺たちの関係もそろそろ終わりにしようか。いつまでもこんな関係が続けていても、お互いのためにならないしな」

男はそう言うと、すぐに次の煙草に火を点けた。

「う、うん、わ、わかった」

孝恵は、またそう言うしかできなかった。奥さんと別れるって言ってたじゃない、と今ここでこの男に詰めよったところで無駄だということが、今やっとわかってしまった。

男は煙草の煙を思いきり吸い込んでから、すぐに灰皿に押し付けた。

「じゃあ、今日で終わりだ。子どもを堕ろす費用はメールで請求してくれたら、お前の銀行の口座に振り込んどくから、それでいいな」

男は口に残っていた紫煙を漏らしながら言って立ち上がった。孝恵は何も言えず、立ち上がった男を見上げた。男が冷めた視線で孝恵を見下ろした。

「これ、返すわ。もう使わねえし」

男はジッポーのライターをテーブルの上にコツンと置いた。

「えっ、それは返さなくていい」

孝恵はテーブルの上の銀色に光るライターを見た後、男の顔を見上げた。

「俺もいらねえし、お前がいらねえなら捨てとけよ。じゃあな」

男は孝恵を見下ろし肩をポンと叩いた。叩かれた瞬間に孝恵の肩はガクリと落ちた。男が喫茶店のドアを開けて出ていった。カウベルの音がカランカランと試合終了のゴングのように空しく孝恵の耳に届いた。

カウベルの音が消えて、店内の掛時計に視線をやった。目が潤んで時計の針が見えなかった。ハンカチで涙を拭いてから、もう一度見ると午後六時を少しまわったところだった。

この店の正確な閉店の時間は知らないが、そろそろ閉店の時間のはずだ。二度とこの店に来ることもないだろうと店内を見渡した。テーブルの上に置いたままのジッポーのライターに視線をやった。もう必要ないものだと躊躇いながらも、それをバッグに放り込んだ。

男が結婚していることを最初から知っていれば、誘われた時に断っていたのに、魔法の言葉がなかったらすぐに別れたのに、そう思いながら、孝恵は『喫茶すず』を後にした。

離婚

兄から渡された資料を破って捨ててしまいたい気持ちだったが、取り敢えず、必要になる時が来るかもしれないと、自分の目に触れないところに置いておくことにした。これを渡す時の兄の表情は苦渋に満ちていた。兄を見送ってすぐに資料を見るつもりだったが、その前にハーブティを飲んで心を落ち着かせることにした。

資料を全て読み終わり、怒りと悔しさ、悲しみで涙が止まらなかった。涙を拭う気力さえなく、資料が涙で濡れることも気にせずに泣いた。この先、どうすればいいのかを考える気力もない。兄は妹のためにと、この資料を見せてくれたのだが、資料を見せた兄にも小さな怒りを覚えた。

「良子、ちょっと話がある。今から、お前のマンションに行ってもいいか」

兄の秀一から電話があったのは今から二時間程前だった。良子がここで暮らしはじめて二年以上になるが、秀一が訪れたことは、これまで一度もなかった。なのに、急に今から行くというのは、一体どういうことだろうか。考えたところで答えは出るはずもないが、秀一がわざわざ来て、話そうとする内容は良子にとって、いい話でないことは見当がついた。

電話を切ってから十分ほどで秀一は部屋に現れた。兄はこの近くまで来てから電話してきたようだ。

「急に、押しかけて悪いな」

秀一は、良子が出したハーブティを口にした。

「いいわよ、お兄ちゃんが急に電話してきて、すぐにここに来るくらいだから、すごく大事な話なんでしょ？」

良子は秀一の前に座り、秀一の顔を覗きこんだ。

「まあ、そうだな」

秀一はすっと目を伏せた。秀一は優しい性格で、相手に嫌な話をするのが苦手だ。いづれは父の後を継いで会社を背負わなければならないのに、こんな性格で大丈夫なのかと、良子は心配になる。

「きっと、わたしにとっては、いい話じゃないわね」

良子は秀一に向けて笑みを見せた。

「そういうことになるかな。良子にとっていい話じゃない。もちろん俺や親父にとってもだ」

秀一は指を組んで顔の前で合わせた。良子に向ける視線には苦悶の色が滲んでいた。

「そうですね。お兄ちゃんから電話が来た時点でそんな気がしてた」

秀一は「悪いな」と言って、一口ハーブティを飲んで俯いた。秀一は昔から妹思いの兄だった。今から妹が苦しむであろうことを自分が話さなければならないことが辛いのだろう。

「一体、なんなの、早く話してよ」

話しくそうにする秀一に、良子は少し苛立った。秀一の態度を見る限り、良子にとって、よほど悪い内容なのだろう。その話の中身がわからない。今の状態はまな板の鯉の状態だ。

「良子の旦那のことなんだけど」

「旦那がどうしたの」

旦那のことだということは、良子も最初から見当がついていた。

「良子と結婚して、俺のフォローをしてもらう為に部長に昇格させたんだけど、彼の仕事ぶりを見る限り難しいなと思ってな」

社長の父が将来、長男の秀一と長女良子の夫に会社を任せるために、二人を部長に昇格させたのは一年ほど前だった。気の優しい兄と少し傲慢な夫がいい関係になると父は話していた。秀一も良子もそれに賛成した。

「それは、お兄ちゃんの意見、それともお父さん？」

「悪いけど、両方の意見だ」

「わかった。わたしは会社のことまでわからないから、お父さんとお兄ちゃんが言うなら仕方ないわ。もともとわたしと結婚してなければ、彼にそんなスピード出世はなかったわけだし」

「悪いな」

秀一は申し訳なさそうに目を伏せた。

「あの人、課長に降格ってこと？」

「いや、それが彼の役職はなくなる。それに、それだけで終わりじゃない。まだ続きがあるんだ」

秀一の優しい性格はこういう時は苛立たせる。結論から話してくれと思う。

「じゃあ、部長からいきなり平社員になるってこと。彼の仕事ぶりって、役職が無くなるほど酷かったのかしら。わたしの知ってる限りだけど、仕事はできる方だと思ってたんだけど」

「残念だけど、彼は会社を裏切る行為をしていたんだ。社長は彼を解雇して、訴えることも考えている」

「彼が何をしたって言うのよ。はっきり言ってよ」

良子はテーブルを手のひらで叩いた。ティーカップがガシャッと音を立てた。

「実は、彼は会社の金を横領していたんだ」

秀一は唇を噛みしめた。横領と聞いて、良子もさすがに驚いた。

「まさか、嘘でしょ」

「これから彼に聴取することになるが、調査は済んでるから間違いない。俺は事を大きくしないで、最終的に彼には自首退職してもらおうかと思ってる」

「じゃあ、彼は無職になるってこと。そうなったら、わたしはどうしたらいいのよ」

良子は両手で顔を覆った。さすがにショックは大きかった。

良子は父親が経営する会社で事務職として働いている時に今の夫と知り合った。彼はルックスは良く、仕事もバリバリできた。話も上手くて面白かった。良子はそんな彼に夢中になった。良子から付き合いを申し込み、二年前に結婚した。それから結婚生活は順調だった。彼は仕事も順調なようで、良子と結婚して、いきなり部長に昇格した。二人の生活は順風満帆と思っていたのに、いきなり実の兄が嵐を持ってきた。

「良子も彼とは離婚した方がいいと思っている」

秀一が良子の目をじっと見つめた。良子も目をそらさず秀一の目を見つめ返した。

「わたしは離婚はしない。彼の横領が事実だとしても、わたしは彼を愛してるから。彼がお父さんとお兄ちゃんを裏切って横領していたのが事実なら、それは申し訳ないと思うし、会社を辞めさせられても仕方ないけど、わたしは、彼の妻として彼を支えていくつもりよ」

「良子の気持ちはわかる。けど、あいつは女癖も悪くて、浮気もしてるんだ。俺とお父さんだけでなく、お前のことも裏切ってるんだぞ」

秀一は辛そうな表情を浮かべた。

「わたしは彼に浮気癖があることがわかってて付き合いって結婚したんだから、少々の浮気くらいは我慢できるわ」

良子は無理に笑みを作った。

「良子の考えてる少々の浮気がどこまでのレベルなのかよくわからないけど、俺とお父さんだけでなく良子まで裏切られてると思うと、俺はあいつを許せないんだ」

秀一の瞳の奥に怒りの焔が見えた。秀一は沈着冷静なタイプなのにめずらしいなと良子は思った。

子どもの頃、良子が苛められていると、喧嘩が弱いくせに、いじめっこに立ち向かっていく秀一の姿を思い出した。妹思いの優しい兄は、今でも変わっていない。

「お兄ちゃんの気持ちはありがたいけど、わたしは彼についていくわ。だから離婚はしない」

「最後は良子が決めることだけど、彼の浮気の実実は知っておいた方がいいと思う。俺の口からいいにくいこともあるから、ここに彼についての興信所の調査記録がある。良子がこれを見てからどうするか決めてくれ。良子の意見は尊重するから連絡してくれ」

秀一から資料を手渡された。良子はそれを受け取り資料に視線を落とした。

「わかった。これを読んでからお兄ちゃんに連絡するわ」

男児誕生

そこら中のテーブルから笑い声とともに紫煙が舞い上がり、それらが飴色になった壁や天井に吸い込まれていく。酔いがまわり、目の前がぼやけていたが、今日はまだまだ飲み足りない気分だ。

今後について、父親との話し合いが終わり、あとの残りの時間は父子水入らずでゆっくりと飲みたい気分だ。

小皿の上で潤いを失い、萎んでしまったきゅうりの浅漬けを二切れまとめて指でつまみ上げ、口に放り込んだ。咀嚼すると、歯応えはなくなっていたが、酸味と旨味はまだ残っていて、口の中でジュワっと広がった。続いて目の前のジョッキを持ち上げ、泡が無くなったビールを飲み干した。口の中の酸味と旨味がビールの苦味に流され胃の中へ落ちていった。

煙草を一本取り出して、前に座る父親の三浦奏輔の顔を見た。奏輔は満足そうに笑みを浮かべてこっちを見ていた。

「父さん、ビールは？」

三浦孝士は奏輔の空になったビールジョッキを指に挟んだ煙草でさした。「そうだな。今日は孝士のおかげで気分もいいことだし、もう少し飲もうかな」

奏輔は陽に焼けた細面の顔をしわくちゃにして言った。

孝士は店員を呼んで、吸い殻であふれた灰皿の交換を頼み、生ビール二つと子持ちししゃもと漬け物の盛り合わせを注文した。店員が灰皿を代えてくれると同時に、孝士は煙草に火をつけた。天井の飴色の梁に向けて紫煙を吐いて、これから先のことを思い浮かべた。これから新しい未来が広がる。チャレンジすることに不安は全くない。ワクワクした希望が膨らんでいくばかりだ。

「孝士、お前これから忙しくなるぞ。体が資本だから煙草は少し控えた方がいいんじゃないか」

奏輔がこの日初めて少しだけ渋い表情を浮かべた。眉間に皺が入っていたが、口元は綻んでいた。

「わかってる。これからは健康に注意して、しっかり父さんの後を継ぐよ」

「ありがたいな。わしは嬉しいけど、あの店は客足も落ちてるし、本当にお前やっていけるのか。このままサラリーマンでいた方がいいんじゃないのか。翔子さんに苦労もかけるし、あの店は、わしの代で畳んでもいいんだぞ」

「また、話が戻ってんじゃないか」

孝士はうんざりするように言った。

「でもな、やっぱり心配だ。あの店がお前が言うようにうまくいくもんなのか」

「俺があのお店を継ぐと決めたんた。但し、何度も言うけど、増床して果物屋からスーパーに改装するからな。そうしたらきつとうまくいく」

「最近は大手のスーパーがあちこちにオープンしているし簡単じゃないぞ」

「そんなことわかってるよ。普通のスーパーじゃ勝てないけど、まずは父さんのように味で勝負する店をつくる。自ら産地まで足を運んで美味しいものを仕入れる。それから食の安全だ。食品添加物や農薬を出来るだけ排除していきたいんだ。大手スーパーとは違う、大手スーパーのできないことで勝負する」

「まあ、難しいことは、よくわからんが、お客さんは大事にしろ」

「ああ、わかってる。そこは父さんを見て育ったからな」

「本当にわかってるのか」

奏輔は嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ああ、大丈夫だ」

孝士はそう言ってから新しく届いた冷えたジョッキを口にして、ししゃもを手でつまみ頭からかじった。

「孝士、ありがとうな。お前には親孝行してもらおうと思って孝士と名付けたんだが、最後に、やっと名前通りの親孝行してくれるんだな」

「最後に、やっとだなんて、失礼だな。これまでも親孝行してんだろ」

「そうだったか。お前が親孝行したなんて、これまでのわしの記憶にはないぞ」

奏輔が大きな口を開けて、ワハハと笑った。

「ひでえな、俺はこれまでもいろいろ親孝行したぞ」

孝士が口を尖らせてみせた。

「それにしても、お前が店を継いでくれるなんて、わしは全く思ってもみなかった。わしは……」

さっきまで笑っていた奏輔だったが、熱いものがこみ上げたのか、急に言葉を詰まらせ、潤んだ目を宙に向けた。よく見ると光るものが頬を伝っていた。

奏輔が孝士に向かって、こんなに感情を出すのはめずらしい。孝士が店を継ぐことを本当に喜んでくれていると思うと、孝士まで胸が熱くなった。

果物店を継ぐことを父親の奏輔が涙するほど喜んでくれたことが嬉しくて、孝士の「ただいま」という声は弾んだ。

「お帰りなさい。お義父さんはどうだったの」

玄関で靴を脱いでいると、妻の翔子が玄関まで来て訊いてきた。

「ビックリするくらい喜んでくれてたぞ。果物店からスーパーミウラにするのもいいと言ってくれたしな。あの親父が、大きな口開けて笑ってたと思ったら、急に涙流して嬉し泣きしたんだぞ」

孝士は玄関からリビングへと向かいながら後ろからついてくる翔子に言った。

「へえー、そうなの。あのお義父さんがそんなに喜んでくれてたんだ。わたしもお義父さんの喜んでる顔見たかったわ。あなたよかったわね。でも、疲れたでしょ。すぐにお風呂入ります。それともコーヒーでもいれましょうか」

翔子が後ろからついてきた。

「ありがとう。コーヒーでも飲もうかな。これからいろいろ大変なこともあるけど、とりあえずはオープンに向けての準備だな」

孝士はリビングで胡座をかいて、両膝に手を置いた。

「そう、それはよかったわ」

翔子がキッチンから笑みを浮かべながら言った。

「これから、翔子にもいろいろと手伝ってもらわないといけないから、苦労かけるけどよろしく頼むな」

孝士はキッチンに立つ翔子に向かって言った。

「それがね、あなたに報告しなければならないことがあるの」

翔子がキッチンから出てきてコーヒーカップを孝士の前に置きながら言った。翔子が眉をハの字にしていた。

「報告って？」

孝士はコーヒーカップを口にして、翔子の言葉を待った。

「スーパーミウラのオープンなんだけど、わたしはその時、手伝えないかもしれない」

「手伝えない、それ、どういうことだ？」

孝士は少し苛ついた。翔子はスーパーミウラをオープンさせることに賛成してくれたはずなのに、今になってどういうことだと思った。

「実はね、もしかしてとは思ってたんだけど、やっぱり当たりだったの」

「当たりって？」

孝士は当たりの意味がわからず、表情が厳しくなっているのが自分でもわかった。

「あのね」

翔子は言葉を切って、孝士の顔を見てきた。翔子の表情は孝士とは正反対で笑みが広がっている。

「当たりってなんだ。ちゃんと説明してくれ」

孝士が苛ついているのに、翔子は笑みを浮かべている。孝士は全く意味がわからなかった。

「ごめんなさい。わたしね、妊娠したみたいなの」

「えっ、ニンシン？」

孝士は翔子の言った言葉の意味がわからなかった。

「そうよ。わたし、妊娠したの」

翔子が背筋を伸ばし、自分のお腹に両手を当てた。孝士と翔子は結婚して五年になる。結婚してから、なかなか子室に恵まれなかった。二人とも子どもは欲しかったが、できなければできないで仕方がないと少しあきらめかけてきた時期だった。

孝士は、翔子のニンシンという言葉聞いてから、それが自分の子どもができたということだと理解するまでにしばらく時間がかかってしまった。

「ニンシンって、それは、俺たちの子どもができたってことか」

「そうよ。だけど、このタイミングだから、あなたが大変になるかもしれない」

翔子の表情から笑みが消えた。

「そうか」

孝士は翔子の顔をじっと見つめた。

「あなた、やっぱり困るよね」

「なにが困るんだ」

「これからスーパーミウラをオープンさせる準備に入るわけでしょ。その為に二人とも会社をやめて安定した収入もなくなっちゃったし、その上、わたしがスーパーミウラの手伝いができなくなったら、あなたが大変になるじゃない」

翔子は俯きながら言った。

「そんなの大丈夫だろ」

「大丈夫かな」

「当たり前だろ。よかったじゃないか」

「そう。そのわりには、あなた、嬉しそうじゃないわよ」

「いや、そうじゃなくて、信じられないというか、まだピンとこない。本当に俺たちの子どもができたんだよな」

「そう、わたしたちの子どもがやっとできたの。この中に」

翔子が笑みを浮かべて立ち上がり、お腹に手を当てた。孝士は翔子のお腹に視線を向けた。しばらく翔子のお腹を見て、そして飛び上がるように立ち上がった。

「そ、そうかー。やったなー、やった、やったー。ついに俺たちに子どもができたんだー」

孝士は両手を思いきり突き上げたあと、翔子をギュッと抱きしめた。孝士の目からは涙がボロボロと溢れた。

「でもね、予定日とスーパーミウラのオープン日が近いのよね。わたしがオープンの手伝いが出来なくなるのがちょっと心配なの。あなたに負担がかかるでしょ」

翔子は孝士の胸の中でそう言った。

「そんなの、全然平気だよ。子どもができるとわかってただけで、俺は二倍も三倍も働けるよ。翔子と生まれてくる子どものためなら、俺は少々のは平気だ。よーし、今年はずごい年になるぞ。スーパーミウラのオープンと我が子の誕生だ」

孝士がテーブルの上に本とノートを並べて腕を組んでいる。「うーん」と声を上げて、天井に視線を向けたまま動かない。しばらくすると、また本とノートに視線を落とす。本をパラパラとめくり、ボールペンを握るとノートに漢字を書き込む。そしてまた腕を組んで天井に視線を向ける。孝士はその動作を朝から何度も何度も繰り返していた。真っ白だったページが漢字でびっしりと埋まり、書くスペースが無くなるとページをめくり真っ白な新しいページを開いた。そして、そのページも真っ黒にしてしまう。

「あなた、そろそろ、お昼ご飯にしますか」

翔子の声が背中から聞こえた。

孝士は振りむき、壁に掛かる時計を見た。すでに午後二時を過ぎていた。

「あっ、あー、もうこんな時間か」

そう言って、思いきり伸びをした。集中するとあっという間に時間が経つなと思った。こんなに集中したのはいつ以来だろう。もしかしたら、生まれてはじめてかもしれない。

「あなた、決まりましたか」

翔子がテーブルを挟んで前に座り、孝士の前のノートを覗き込んだ。

「いや、まだ、決めかねてるんだ」

「少し、休憩しましょうよ。お昼はチャーハンにしましたから」

「おー、いいな」

孝士がノートを開いたままテーブルの端に寄せた。翔子がキッチンから湯気のあるチャーハンとスープを孝士の前に置いた。

「いただきます」

孝士は手を合わせてからチャーハンにスプーンを刺した。チャーハンをスプーンで口に運びながらも、ついテーブルの端に置いたノートに目がいった。

「あなた、すごく熱心ね」

翔子の声に孝士は顔を上げた。翔子の口元が綻んでいる。

「そりゃそうだよ」

「あなたがこんなに喜んでくれるとは思わなかったわ」

「えっ、そ、そうか」

「子どものことより、仕事のことしか頭にないのかと思ってたから」

「自分の子どもができたら嬉しいに決まってるだろ」

「確かにそうよね」

「それより、翔子は俺の体のこと心配してくれてるけど、そんなことより自分の体調に注意してくれよな」

「わかってる。もう、わたしだけの体じゃないからね」

「そうだ。俺たちの宝物がその中にあるんだからな」

孝士が翔子の目を見た後、視線を翔子のお腹に落とした。

「そうね、ここにいるのはわたしたちの宝物よね」

翔子はお腹に手を当てニコリと笑みを浮かべた。

チャーハンを食べ終わると、孝士はすぐに本とノートを手元に寄せて、午前中の続きをはじめた。候補はあがるがなかなか決めきれない。

翔子が洗い物を片付けてから孝士の前に腰をおろして、ノートを覗きこんだ。

「どんな感じ？」

「これなんてどうかな」

孝士はノートに書いてあるたくさんの漢字の中から、漢字二文字を丸で囲んだ。

「なんて読むの」

翔子が訊いた。

「ユキヒトだ。どうだ、いい名前だろ」

「うん、いいんじゃない」

「じゃあ、これにするか」

孝士がノートに書いた多くの名前の候補から『幸仁』と書いた二文字を赤のボールペンで四角く囲んだ。名前が決まった充足感を味わいながら、目頭を揉んだ。

「三浦幸仁か、いい名前ね」

「生まれてくる子には、周りの人を幸せにする人間になってほしいんだ。そう思ってこの名前に決めた」

孝士はそう言って、翔子の横に移動した。

「幸仁ね」

翔子が自分のお腹に手を当てた。

「幸仁、これからよろしくな」

孝士も翔子のお腹に手を当てた。

女兒誕生

一人娘から聞いた相談事は、さすがにショックだった。よく聞く話だが、ドラマや映画だけの世界で、まさか、自分の娘がそんなことをしていたとは思ってもみなかった。

娘は真面目で心優しい女性で、決してふしだらな女性ではない。これまで、親に心配をかけたことなど、一度もなかった。佐山節子にとって自慢の娘だ。それが、どうしてこんなことになってしまったのか。経験が乏しく、男を見る目がなかったのだろうか。既婚か未婚かの見分けもつかないし、妻と別れるからといった男の戯言を信じてしまうなんて、本当に情けない。

「ハァー、最近体調が悪そうだと思ってたら。そういうことだったのね。それは困ったわね」

節子は深いため息をついて、唇を噛みしめた。

「軽率な娘でごめんなさい」

孝恵はテーブルに額が当たるくらいに深々と頭を下げた。

「終わったことは仕方ないわね。とりあえず、お母さんは子どもを墮ろすことには絶対反対だからね。せっかくできた命なんだから、お腹の子に罪はないんだし、墮ろすなんて可哀想よ」

「そうになったら、お父さんにも話さないといけないし、お父さんに怒られるよ」

「それくらいは覚悟しなさい。あなたのやったことは怒られて当然のことなんだから。怒られるのが嫌でお腹の子を殺しちゃうの。そんなことしたら、孝恵は一生後悔するわよ」

いつもは孝恵に優しい節子だが、さすがに今の状況ではそういうわけにいかない。

「わ、わかった。わたし、お父さんにちゃんと話して、この子を産むわ」

孝恵はお腹に手を当て、大きく息を吸った。

「そうね、そうしましょう。まず、わたしからお父さんに話すから、その後、孝恵から頭を下げて、ちゃんとお父さんに説明しなさい。お父さんに許してもらって、赤ちゃんは生んであげて三人で育てましょう」

「でも、ちゃんと育てられるかな」

「何とかなるわよ。わたしもお父さんも協力するわよ。さあ、これから忙しくなるわね」

節子は出来るだけ明るい口調で言った。今さら娘を非難して怒ったところで仕方がない。お腹の子には罪がないのだから、お腹の子の存在を否定する発言はやめた。それより新しい命の誕生に感謝し、子どもが生まれてくることを楽しみに待つべきだと思った。

「わかった」

孝恵は俯いたまま小さく頷いた。

節子が夫の昭一に孝恵が不倫の末、妊娠してしまったことを告げると、昭一は真っ赤

な顔をして怒り出した。相手の男がどこの誰で、その男に怒りをぶつけないと気が収まらない。男がどこの誰かを教えろと喚いた。節子も相手の男のことは孝恵から聞いていないと言うと、昭一の怒りは一段と激しくなった。普段は物静かで温厚な昭一なのに、さすがにこの時は違った。かわいい一人娘が傷つけられたわけだから、夫の気持ちがわからないわけではない。しかし、今、それをしたところで、誰も得をしない。悲しみや怒り、苦しみが増すばかりだと節子は昭一を丸一日かけて説得した。

その日は朝から晩までずっと二人の間はギスギスしていたが、最後に昭一は節子の説得に首を縦に振った。節子の説得が終わってから、孝恵から昭一に頭を下げさせた。

「お父さん、軽率なことをしてごめんなさい。でも、お腹の子どもだけは生ませてください」

孝恵は昭一の前で正座し頭を下げた。昭一はしばらく目を閉じて黙っていた。節子は隣に座り、じっと昭一の言葉を待った。

「父さんと母さんにかわいい孫の顔を見せてくれ」

昭一はそう言って孝恵に笑みを向けてくれた。昭一の笑みと言葉に節子は感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

孝恵は「うん、お父さんありがとう」と言って涙を流した。

新しい命の誕生とともに、どこからともなく「オギャア、オギャア」と赤ちゃんの泣き声が響き渡る。その声を聞きながら、節子と昭一は長椅子に二人並んで座っていた。二人とも椅子から立ち上がる気力はなかった。節子は椅子に座ったまま号泣し続けた。隣に座っている昭一は体を震わせていた。

「孝恵がお腹の子どもを墮ろすと言った時に、わたしが反対しなければよかったのよ」

節子は嗚咽しながら言った。

「お前のせいじゃない」

昭一の声は震えていた。

「孝恵は子どもを墮ろすと言ってたし、あなたは生むことに反対してた。わたしだけが子どもを生むべきだなんて偉そうに言ったからこんなことになってしまったのよ。あなたも本当はわたしのことを恨んでるんでしょ」

場所もわきまえず、自分でもわけがわからないくらいに喚いた。

「別にお前のことを恨んでなんていない。ショックは大きいけど、今さら言っても仕方ないことだ」

「嘘、あなたは恨んでるわ。遠慮しないで、わたしのことをもっと責めてよ」

節子は隣に座る昭一の体を揺すった。

「いい加減にしないか。お前がそんなことでどうするんだ。生まれてきた孫娘のためにも、悲しんでる場合じゃないんだぞ。さあ、そろそろ孫娘に会いに行くぞ」

昭一が節子の両肩を握り、節子の目をじっと見つめた。

「孫娘の顔なんて見たくない」

節子はだだっ子のように首を横に振った。

「孝恵が命がけで生んだ赤ん坊だ。孝恵のためにも、赤ん坊のためにも顔を見てやれ」

「できるわけないわ」

節子は下を向いて首を横に振った。

「これからは、孝恵の代わりに赤ん坊の世話をお前がやらなければならないんだぞ」

「わたし、生きていけない。わたしも死にたい」

節子は昭一の胸に顔を埋めた。

「バカなこと言うな。生まれてきた孫娘のために、お前がしっかりしないでどうするんだ」

昭一が少し声を荒げて、節子の肩を揺らした。

節子は嗚咽しながら顔を上げた。顔を上げると昭一の顔を見ると、夫は涙を堪えて節子に向けて笑みを浮かべていた。本当はこの人も辛いはずだ。それをグッと堪えてくれている。

「死んだ孝恵と生まれてきた赤ん坊のためにも、二人で赤ん坊を見に行こう」

昭一が節子の背中をポンポンと叩いた。孫娘の顔を見て気持ちを切り替えなければならない、昭一の言う通り、わたしがしっかりしなければならない。節子は顔を上げて、昭一に向けて笑みを返した。これから、わたしが母親がわりになって孫娘を育てるんだ。孝恵の分まで、孫娘を幸せにするんだ。昭一の顔を見ながら、節子は必死で気持ちを切り替えた。

昭一に肩を抱かれながら新生児室へと向かった。足元がフラフラするが、赤ん坊にはしっかりした祖母の姿を見せよう。新生児室のある五階までエレベーターで上がり、長い廊下を歩いた。昭一が先に歩いて行く。節子はゆっくりとした足取りで昭一の背中を追いかけた。先に新生児室を覗いている昭一が笑みを浮かべて手招きをするので、節子は足を早めた。昭一の隣に立って窓越しに新生児室を覗いた。

「あの子が孝恵の娘だぞ。わしとお前の孫娘だ。孝恵とお前に似てかわいいぞ」

昭一が窓の外から新生児室の中を指さした。昭一の指さす方向へ視線を向けると、赤くて小さな顔と紅葉のような小さな手が産着から覗いているのが見えた。

愛らしかった。さっき昭一の胸で流したのとは違う涙が頬を伝った。孝恵が生まれた日のことを思い出した。すると、また違う涙があふれてきた。

この孫娘のために昭一と二人で、孝恵を失った悲しみを乗り越えよう。孫娘の前では悲しい顔は絶対に見せられない。そんな顔を見せたら孫娘が傷ついてしまう。

「ところで、この子の名前は決まったのか」

昭一が新生児室の中を覗いたまま訊いてきた。名前はまだ決めていなかった。孝恵と話し合っていたが、候補はいくつか出たものの決まらないままだった。

孝恵の名前は節子と昭一と二人で考えた。あれこれと悩みに悩んで『孝恵』と決めた。素直で他人への思いやりのある娘に育ててほしいと思って、『孝恵』と名付けた。

親の欲目かもしれないが、孝恵は名前通り素直で優しく、他人思いの娘に育ててくれた。自分を犠牲にしてでも他人を思いやる優しい娘だった。しかし、孝恵自身は幸せでなかったのかもしれない。他人を幸せにすることも大切だけど、自分を犠牲にしちゃいけない。まず、自分自身が幸せにならないと意味がない。

生まれてきた孫娘には、孝恵とは違い、孫娘自身が幸せになってほしい。そして、その幸せを周りに振りまくような、そんな明るい娘に育ててほしい。節子はそう思って、新生児室の孫娘をじっと眺めていた。こうしていると知らぬ間に長い時間が経っていた。

「その奥が新生児室だ」

エレベーターの方からしゃがれた男性の声が聞こえた。声のする方に顔を向けると二人連れの男性が横に並んでこっちに近づいてきた。中年の恰幅のいい男と初老の痩せた

男だった。

「ここに孝ちゃんの赤ちゃんがいるのか」

恰幅のいい男がそう言って、節子の隣に立ち、中を覗きこんだ。

節子は、男が言った『孝ちゃんの赤ちゃん』という言葉聞いてビクッと反応した。もしかして、この二人の知り合いが孝恵の不倫相手ではないのかと、節子は男たちを睨むようにして見た。節子は全く知らない男たちだった。

節子は昭一の顔を見た。昭一の眉間には深い皺が入り、目はつり上がっていた。昭一の拳が強く握られてブルブルと震えていた。昭一が男たちを殴りだすのではないかと節子は心配になった。

「あの子だ。ほら、可愛いだろ」

痩せた年配の男が新生児室の中を指さしながら言った。男の指さす方向を見ると、自分の孫娘を指さしているわけではなかった。

「ついに孝ちゃんもお父さんになったのか。俺も早く子供がほしいな」

「お前は、その前に結婚だろ」

「奏さん、それ言わないでよ。それ言われると、俺、落ち込んじゃうよ」

「店のアルバイトとかどうなんだ」

「ダメダメ。全く相手にされてない。俺は年とり過ぎだし、それにこの体じゃなあ」

恰幅のいい男はそう言って、自分のお腹の肉をつまみながら満面のえびす顔を見せていた。どうやら孝恵とは全く関係のない男たちのようだ。フッと肩の力が抜けた。昭一も「フー」と息を吐いた。昭一のつり上がった目が元に戻り、握っていた拳は開かれた。

「少し、休憩して何か軽く腹にいれておくか」

「食欲はないですけど、コーヒーくらい飲みましようかね」

もう少し孫娘を見ていたい気もするが、キリがないので、一旦、新生児室を離れることにした。さっきの男性二人に会釈して、新生児室を後にする時、年配の痩せた男性が「お孫さんですか」と満面の笑みで訊いてきたので、「ええ」とだけ返事した。

「おめでとうございます」

男性が言ったので、「ありがとうございます」と頭を下げながら、新生児室を後にした。

休憩室には若い男女と節子と同世代の女性二人が座って談笑していた。節子は空いた席に腰を下ろした。昭一が売店でコーヒーとサンドイッチを買ってテーブルまで持ってきてくれた。

「何か食べておかないと体に毒だぞ、ほれ」

昭一が心配そうに節子にサンドイッチを一切れ手渡してくれた。昔から優しくて頼りになる夫だ。

節子はサンドイッチを口に入れて咀嚼したが、なかなか喉を通らなかった。最後はコーヒーを飲んで胃に流しこんだ。昭一と二人きりでこうして外でコーヒーを飲むのはいつ以来だろう。最近ほとんど孝恵と二人でこうした時間を過ごしてした。それがもう出来ないのかと思うと、さっき食べたサンドイッチが胃液とともに上がってきそうになった。

昭一は二切れ目のサンドウィッチをかじっていた。節子はコーヒーを飲み終わってから、窓の近くまで行って外の景色を眺めた。真っ青な空に真綿のような雲が浮かんでい

る。視線を下げると緑の葉が太陽の光でキラキラと輝いていた。

「ちょっと、外を散歩してきます」

外の空気でも吸って気分転換がしたくなった。

「いっしょに行こうか」

口いっばいにサンドウィッチを頬張ったまま昭一が言った。

「いえ、一人でぶらりと病院の周りを散歩してきます。あなたはゆっくりしててください」

散歩したところで、今の気持ちが晴れるとは思わないが、じっとこの場にいるのも耐えられなかった。

さっき見た孫娘の姿を思い浮かべながら散歩すると、少し気分は晴れるかもしれない。そう期待して重い足取りのまま休憩室を後にし、病院のロビーを抜けた。

病院から一步外に出ると真夏の太陽が容赦なく照りつけた。アスファルトからは、ゆらゆらとかげろうが立っていた。頭に日差しが突き刺さる。帽子か日傘を持ってくるべきだったと自分の影に視線を落とし歩いていると、人の気配を感じた。誰かがこっちを見ている気がした。周りに人影はなかったはずだがと思い顔を上げて見ると、そこには人ではなく黄色い花を咲かせた大きな向日葵が並んで咲いていた。黄色い花びらが太陽の光に反射し、まぶしくキラキラと輝いている。どれも節子の背丈より高い位置に大きな花を咲かせていた。節子の足は向日葵の列へと向かった。一番立派に花を咲かせている右端の向日葵の前に立ち、目を細めて見上げた。向日葵が「元気出してね」と声をかけてくれた気がした。向日葵はお陽様に向かって顔を上げ、キラキラと輝いて笑っていた。それを見て、節子の気持ちが少しだけ晴れやかになった。

「向日葵、ありがとう。少し元気になれたわ」

節子は向日葵を見上げて、手を合わせた。

殺人事件

ハンドルを何度か切り返して、やっと駐車スペースに車が収まった。助手席で舌打ちされるので、余計にうまく駐車できなかつた。現場の前にあるコインパーキングは駐車スペースが三台しかなく、今、空いているのは、停めにくい位置の一ヶ所だけだった。現場が公園だと聞いて、無駄に広い駐車場を勝手に想像してただけに、この狭さは意外だった。

「現場が公園だと聞いてたので、もっと広いところを想像していましたよ。こんな狭いところだとは思ってませんでした」

山川はエンジンを切って助手席に座る高木に向けてぼやいた。

「フン、捜査に思い込みは禁物だ。自分の目で確かめる前から先入観を持つな」

高木はシートベルトを外し、助手席からさっさと出ていった。

「それくらい、わかってますよ。ちょっと思っただけじゃないですか。ほんと、口うるさいんだから」

高木が出ていった後、山川は一人言のように呟いた。

先に出た高木が車の中にいる山川に向かって早くしろとフロントガラス越しに顎を振って指図した。

山川は「はーい」と音を出さずに口だけを動かした後、口元を歪めた。

山川が車から降りると、高木はすでに駐車場を出て、現場の公園へと向かっていた。山川は慌てて高木の背中を追いかけた。遅いと高木の機嫌がすぐ悪くなる。山川は早足で歩いて高木の横に並んだ。

高木と山川が二人並んで公園の入口の前まで来たところで立ち止まった。そこに立つ警察官に山川が「ご苦労様です」と言って警察手帳をかざした。

「どうも、ご苦労様です」

警察官がそう言って敬礼した。高木と山川は規制線をくぐり、公園の中を見渡した。ブランコと滑り台、鉄棒だけしかない面白みのない狭い公園だ。

「子供たちはこの公園で遊んで満足できるんですかね」

薄暗くて狭い目の前の公園と子どもの頃に青空の下で遊んだ緑いっぱいの公園を頭の中で比較した。

「都会に遊べるスペースがあるだけでもありがたいだろ。駅からは近いし、雨が降っても濡れねえしな」

高木が上を見上げた。

「確かにそうですね。雨の日でも、駅から高架下を通れば濡れずにここまで来れますもんね」

山川が見上げた時、ちょうど公園の上をガタンガタンと電車が通った。

「けど、うるさいですね」

「贅沢言うな」

「でも、ここって、幼稚園児や小学生の子どもたちが楽しく遊ぶ場所というより、生意気でいきがった若い連中のたまり場になってるんじゃないですか」

山川は剥き出しになったコンクリートの壁一面に派手な色のスプレーで描かれた落書きに視線を向けた。この落書きのせいで、ここにある滑り台やブランコが子どもの遊具には見えず、凶器か武器のように見えた。

「こういう輩はどこにでもいるもんだな」

高木は落書きを見ながら眉間に皺を寄せた。

「今回の事件は、ここでたむろしていたそういった輩の仕業かもしれませんね」

「山川、何の情報もなしに決めつけるな。先入観は禁物だと言ったところろ」

「別に先入観を持ったわけじゃないですよ。ちょっと推理しただけじゃないですか」

「フン、現場も見ないで、なにが推理だ。お前は素人なのか」

高木が鼻を鳴らし、吐き捨てるように言った。

「すいません」

山川は口を尖らせた。高木と組まされたことで、山川は今回の捜査は最悪だなと思っていたが、その通り最悪な展開だった。山川がちょっと口にした言葉に噛みついてくるし、ずっと仏頂面をしているし、高木は捜査一課では有名な偏屈人間だ。

「どうも、お疲れ様です」

高木と山川の間に重苦しい空気が流れている時に、二人に向かって、高いトーンの声が飛んできた。山川は声のする方に顔を向けると鑑識の男が近づいてきた。ポッチャリした体型で、目が糸のように細い愛嬌のある顔をしている。殺人事件の現場には似合わない顔だ。山川は顔は見たことあるが名前までは知らない。

「お疲れ様です」

山川が鑑識の男に向けて頭を下げた。

「高木さんお久しぶりですね」

鑑識の男が高木に向かって頭を下げた。高木が「よお、所沢か」と言って右手を上げた。鑑識の男は所沢というようだ。

「で、やっぱり殺しか」

高木が所沢に訊いた。

「そうですね、被害者は何者かに背後から殴られています。凶器はあそこに積んであるブロックと同じものですね」

所沢は数個のブロックが積み上げられてある公園の片隅を指差した。公園の塀が工事中のようだ。

「ふーん、なるほど。てことは、計画的ではなく、衝動的な犯行てことか」

「その可能性は高いですかね」

「死亡推定時間は？」

「死後十時間ってとこですかね。正確にはこれからですが」

「昨日の深夜零時から一時くらいか」

高木が腕時計に視線を落とした。

「その辺りかと思います」

「犯行は最終電車が終わってからだな。目撃者を探すのも骨が折れそうだ」

高木が辺りを見渡しながら言った。

「この先に飲み屋街がありますから、その酔客がいたかもしれませんね」

「酔っ払いの話があてになるかだな。で、被害者の身元はわかったのか」

「免許証と職場の身分証明書を携帯していました。名前は陣内晃、年齢は五十五歳。三和タクシーの運転手のようです」

「三和タクシーの運転手ですか」

山川がよく利用するタクシー会社の運転手だ。知ってる顔かもしれないと身分証明書を覗きこんで顔写真を見たが知らない顔だった。

「被害者は工作中だったのか」

「いえ、酒を飲んでますから、仕事帰りじゃないですかね」

「ブロックで殴られたのが致命傷か」

「はい。右頭頂部をブロックで殴られたことによる頭部打撲と頭蓋骨骨折による脳挫傷です」

高木が「右頭頂部か」と言って、自分の右頭頂部を右手でポンポンと叩いた。その後、「うーん」と口を尖らせた。

「あの辺りに対峙する二つの下足痕があります。そこで被害者と犯人が口論にでもなったのでしょうか。その後、被害者の下足痕が遺体のあったところまで伸びています。それを追いかけるように犯人と思われる下足痕も伸びています。犯人が被害者を後ろから追いかけて殴ったんだと思われます」

「被害者はこんな人気のない真夜中の公園で何してたんだろうな」

「酒を飲んだ帰りに、立ちションするために公園に入っただけかもしれません。あそこに形跡がありましたから」

所沢がブランコの方に人差し指を向けた。

「それは被害者のものなのか」

「いえ、それはまだですが、被害者の下足痕をみると間違いはないでしょう」

「なるほど、立ちションを済ませて公園から出ようとしたところで、被害者は犯人と口論になって、逃げ出そうとしたところを後ろからガンてことか」

「そんなところでしょうね。ここは深夜、若者のたまり場になっているみたいですから、そいつらとトラブルになった可能性もありますね。若者たちが、自分たちの縄張りで立ちションしていた被害者に文句でも言ったのかもしれませんが」

「犯人らしき下足痕は一人だけだろ」

「ええ、そうですね」

「なら、若者たちじゃなく、犯人は一人だったってことだ」

「そういうことになりますが、若者たちの一人と被害者が揉めたのかもしれませんが」

「確かにそうだが、そういった輩は誰かと揉めていたら、集団で寄っていくんじゃないか。だから怨恨の線も洗わんと。それについては所沢はどう思うんだ」

「いやー、そこまでは、私にはわかりません。捜査については高木さんたちにお任せし

ますよ」

所沢が頭を下げた。

「そうだな、後はこっちに任せておけ。俺たちは怨恨の線で捜査を進める」

高木が怨恨の線で捜査するというが、山川はそれはないと思った。これから高木といっしょに捜査していくので、自分の意見はしっかりと高木に伝えるべきだと、山川は覚悟を決めて「高木さん」と言って高木に体を向けた。

高木が「あー」と言って、山川に厳しい視線を向けてきた。山川はここで怯んではいけないと腹に力を入れた。

「俺は所沢さんと同じで、ここでたむろしていた若者に殺された気がするんですけどね」

山川が言うと、高木は言葉を発することなく、ギロリと厳しい目で睨んできた。山川は高木のあまりの迫力に固まってしまった。これ以上話すのはやめた方がいいと警笛が鳴り、山川は後ろに一歩下がった。

「山川、脳ミソ空っぽのお前の頭で無駄なことを考えるな」

高木は山川の頭を人差し指でさした。

山川は、「はい」と言ったが、心中は穏やかでなくなった。頭に血が上って冷静でいられなくなっていた。さすがに、脳ミソ空っぽの頭って言うのは失礼過ぎるだろ。一応、二流だが四年生の大学を卒業できる頭は持っている。

なぜ高木とペアを組まされてしまったのか。この事件が解決するまで、こんなことを言われ続けるのかと思うと、山川は暗鬱な気持ちになった。

「とりあえず、この辺の飲み屋にあたってみるか。山川、さっきの被害者の身分証明書の顔写真をスマホで撮影しておけ。これから、それを持ってこの辺りの飲み屋に聞き込みに行く」

高木は山川の気持ちなど頭にはなさそうだ。

「わかりました」

山川は気を取り直して、ポケットからスマホを取り出し被害者の免許証と身分証明書を撮影した。

「きれいに撮れよ。ポケてたら意味ねえぞ」

山川は、「それくらいわかってますよ」と心の中でぼやいた。

「所沢、ありがとうな」

高木が所沢に右手を上げて礼を言った。

「ご苦労様です」

所沢が高木に頭を下げた。

「山川、行くぞ。さっさとしろ」

山川は「はい」と言って、顔をしかめた。スマホをポケットに放り込んで高木の後を追った。つい、高木の背中を睨みつけてしまう。

「どこに行くんですか」

「さっき行っただろ。この辺りの飲み屋街で聞き込みだ」

「この時間に店開いてますかね」

山川は腕時計を見た。

高木が振り向き、また目付きの悪い視線を向けた。

「仕込みで仕事してるところもあるだろうし、最近は昼定食をやっていて昼から開けてる店も多いはずだ」

「なるほど、そう言えばそうですね」

山川もたまに居酒屋がやっている昼定食を利用することがある。そうした店の昼定食はボリュームがあって安くて旨い印象がある。

「昨夜、被害者は、この辺りの飲み屋街で酒を飲んでいた可能性が高いからな。一軒一軒当たっていくか」

「わかりました」

それから高木について飲み屋を一軒ずつ回っていった。高木の言う通り、昼から営業している店もあったし、仕込みのために早い時間から仕事している店もあったが、これまでに有力な情報は得られなかった。有力な情報が簡単に得られるとは思ってはいなかったが、さすがにお腹もすいて疲れてきた。高木は疲れた様子もなく、早足で一軒一軒飲み屋を回って行った。

居酒屋弁慶という立て看板の前まで来ると、数人のサラリーマン風の男性が店頭に並んでいた。人気店なのか店内は満席のようだ。高木が山川に「今、何時だ」と時間を確認した。

「十二時半ですね」

山川は腕時計に視線を落とした。店内から甘辛い醤油のいい匂いがもれてきて、山川は生唾をゴクリと飲みこんだ。そのタイミングでお腹がグゥと鳴った。高木はその音を聞き逃さなかった。山川に顔を向けてギロリと睨んだ。山川は肩をすぼめた。

「腹減ったのか」

高木が山川に訊いた。

「いえ、大丈夫です」

山川は背筋を伸ばしお腹に力をいれた。

「人気店みたいだし、ここで昼飯でも食ってから聞き込みするか」

高木がめずらしく笑みを浮かべた。

「いいですね」

高木からの意外な提案に山川の声は弾んだ。

サラリーマンの列の一番後ろに高木と山川は並んだ。並んでいる間、山川のお腹は鳴りっぱなしだった。高木はそれを無視して、黙って何かを思考している様子だった。それから十分程で山川たちの順番が回ってきて店内に入った。店員がカウンター席になりますがと言ったが、高木はその方が都合がいいとカウンターに腰をおろした。

高木がメニュー表を手にとるとすぐにお造り定食と言って、山川にメニュー表を渡した。山川は最初からトンカツ定食と決めていた。

午後一時が近づいて、サラリーマンたちが爪楊枝を咥えたままレジへと向かっていく。「ご馳走さま」という声と「ありがとうございます」という声が店内を行き交う。そろそろ弁慶の昼のピークも終わりのようだ。お造り定食のトレイが高木の前に置かれ、すぐにトンカツ定食のトレイも山川の前に置かれた。

高木がお造りにわさびをのせて口に入れた。咀嚼して首肯し、うんと言ってから白飯を口に放り込んだ。

「こういう店は魚が旨いんだ。トンカツなんて他の店と変わんねえだろ」
「そんなことはないですよ。肉がジューシーで柔らかいですし、ボリュームもあって旨いです。高木さんも食べます？」

山川はトンカツ一切れを高木の食べるお造りの皿の端に置いた。高木は、おうっと言って、それを口に放り込んだ。咀嚼してまた首肯を繰り返す。

「確かに旨い。お造りも旨かったが、トンカツも旨い。活気もあっていい店だから、人気なのはわかるな。夜の営業中にも来てみたくなる店だ」

二人の会話を聞いていた、カウンターに立つ店長らしき男が「ありがとうございます」と威勢のいい声を上げた。眉が濃く目がキラキラした四十代くらいの体格のいい男性だった。出身は南国の方かなと山川は勝手に思った。口に出すと高木がまた先入観を持つなどか言い出しそうだ。

「おたくが店長さん？」

高木がお茶を啜りながら訊いた。

「はい、そうです」

午後一時を回って客もひいている。そろそろはじめるかと高木が山川に目配せをした。

「お忙しいところ、すみません。ちょっとお訊きしたいことがあるんですが」

山川はそう言って警察手帳を店長の目の前にかざした。それを見た瞬間の店長の顔がひきつるのがわかった。山川はニコリと笑みを浮かべた。

「な、なんでしょうか」

「急にすみません、この方をご存知ないかなと思ひまして」

山川がスマホの画面を店長に向けた。店長が山川の出したスマホの画面を覗きこんだ。

「あーあ、これ陣内さんじゃないかな」

高木が前のめりになった。

「お知り合いですかな」

「ええ、陣内さんなら、よくここに来ますから」

山川と高木が目を合わせた。

「ここの常連客ですか」

今度は山川が前のめりになった。

「ええ、そうですけど。陣内さんがどうかしたんですか」

「今朝、この近くの公園で遺体で発見されました」

山川が言うと店長は目を剥いて、「えっ」と声を上げた後、体が固まった。

「陣内さんは昨晚もここに来られましたか」

「ええ、ええ、来てました。はい、確かに来てました」

店長は慌てた様子で、そう言った後、「坂倉くん、陣内さん、昨日来てたよな」と他の従業員に確認した。

「ええ、来てましたよ」

坂倉という男が近寄ってきた。小柄で目尻が垂れていて、温厚で優しいような顔をしている。

「陣内さん、遺体で発見されたんだって」

店長が坂倉に言うと、坂倉は垂れた目を見開いて「えっ、ウソでしょ」と驚いた様子

だった。

「昨晚の陣内さんの様子をお聞かせいただけませんか」

高木が言ったあと、山川は手帳とペンを手にした。

「は、はい、えーっと」

坂倉が額に手を当てて昨晚の記憶を探ってる様子だった。

「まずですね、陣内さんは昨日お一人で来店されてましたか」

「はい、一人でした」

「これまでもここに来る時はいつも一人でしたか」

「そうですね、いつも一人でしたね」

「昨晚の陣内さんで、いつもと変わった様子はなかったですか」

「いつもと変わった様子ですか」

坂倉が宙に視線をやった。

「どんな些細なことでも結構です」

「昨日はよく飲んでましたね。それからすごく上機嫌でした」

「いつもより酒を飲む量が多く上機嫌だったということですか」

山川は坂倉の言ったことを繰り返し確認した。

「陣内さん、タクシーの運転手なんで、普段はそんなに飲まないんです。けど、休みの前日はよく飲んでましたね」

「と言うことは、今日は休みだったんでしょうか」

「ええ多分ですけど、昨日の陣内さんの飲み方を見て、明日が休みなんだろうなと思ってました。けど、昨日は特によく飲んでたかな。ほんとすごく上機嫌で、隣に座っていた男性のお客さんにもお酌をしてみましたからね」

「隣のお客さんにですか」

「ええ、丁度、今刑事さんが座ってるその席です。こっちに陣内さんが座ってて、こっちに男性のお客さんが座って、二人で楽しそうに飲んでましたね」

「そのお客さんが誰だかわかりますか」

「いやー、知らない顔でしたね」

坂倉が首を傾げた。

「店長はどうですか」

「俺もはじめて見る顔だと思うんですけど、お客さんの顔を全員覚えてるわけじゃないんで、すみません」

店長が申し訳なさそうに眉をハの字にした。

「いえ、いえ、大丈夫です」

山川が手のひらを横に振った。

「では、そのお客さんはどんな人でしたかな。年齢とか体型とか、訛りがあったとか、何か特徴があれば教えていただけませんか」

高木が訊いた。

「そうですね、年齢は五十代くらいですかね。スポーツマンタイプでがっちりした体格をしてました。黙っているとちょっと厳つい感じでしたけど、陣内さんと話してる時はニコニコしてましたよ。けど、ちょっと作り笑いっぽかったかな」

「作り笑いですか」

「ええ、多分、陣内さんともはじめてじゃないですかね。たまたま隣に座って話が弾んだって感じですかね。けど、陣内さんの方が一方的に話してた感じでした」

「その男性の身長はどれくらいありましたかな」

「わりと高かったですね、陣内さんも高いですけど、同じくらいはあったと思います。僕は見上げる感じでしたね」

「陣内さんとそのお客さんは一緒に店を出たんですか」

「いえ、そのお客さんは先に帰りましたね。それで、お客さんがお勘定しようとした時に、陣内さんがそのお客さんの勘定も自分が払うからと言ってました。お客さんは自分の分は自分で払うからと断ってましたが、結局、陣内さんに押し切られてました」

「陣内さんはこれまでもそうやって他の知らないお客さんと仲良くなって奢ったりしてたんですか」

「いやー、記憶にないですね。なんせ昨日の陣内さんはずっと上機嫌でしたからね。臨時ボーナスが入ったとか言ってました」

「臨時ボーナスですか。この不景気にいいですね」

「僕も陣内さんに同じことを言いました。そしたら陣内さんはニヤッと笑って、次入ったら、お前にも奢ってやるよって言ってました」

「次入ったら、ですか。そんなに次から次にボーナスが出るもんですかね」

「いやー、うちは絶対に出ませんけどね」

坂倉は右手を口元に添えて、店長に聞こえないくらいの声で言った。

「普通は出ませんよ。タクシー業界が景気がいいとはあまり聞きませんし、もしかして、陣内さんは賭け事で儲けたんですかね。陣内さんは賭け事はやってましたか」

「陣内さんはボートレースが好きでした」

「尼崎ボートレース場はこの近くですね」

「はい、俺も陣内さんの臨時ボーナスはボートレースで大穴でも当てたのかなと思いました」

「そうですか。ところで、そのお客さんが帰ってから陣内さんはこの店にいたということですが、何時頃までいましたか」

「陣内さんは十一時半位までいましたね」

「そうですか、十一時半ですか」

所沢から聞いた死亡推定時間からすると、陣内はここを出てすぐに殺されたわけだ。

「陣内さんは上機嫌だったと言うことですが、普段はどんなお客さんでしたか。誰かに恨まれるようなことはありませんでしたか」

「そうですね」

坂倉は言いにくそうに口を尖らせた。

「どうですか」

「正直言って、難しいお客さんでしたね」

店長が横から口を挟んだ。

「難しいお客さんですか」

「ええ、気分屋でプライドが高いんです。だから、こいつは、陣内さんが機嫌悪い時はよ

く怒鳴られたりしてました。うちのアルバイトはみんな嫌がってました。特に女の子は嫌がってました」

「アルバイトの女の子が嫌がってたんですか」

「アルバイトの女の子たちが言うには、すぐに口説いてきたり、体を触ってきたりするそうなんです。女の子からその相談を受けて、私が陣内さんに注意すると、その時は一応謝ってくれたんです。ただ反省はしていませんでした。女の子が誤解しているんだと言っていましたから」

「女の子が誤解してる、ですか」

「ええ、女の子の体を触ったことについては、手が当たってしまったのかもしれないと言っていましたし、口説くつもりはなくて、元気がなかったから声をかけただけだと言っていました。可愛いとか綺麗だとか言ってデートに誘ったことはあるが、それも本気で誘ったわけではないと言っていました」

「でも、それからまたすぐに女の子たちから相談を受けました。だから、出来るだけ女の子を陣内さんに近づけないようにしました。それでこいつが陣内さんの担当みたいになって、こいつによく当たり散らかしてましたね」

店長が坂倉に顎を向けて言った。

「なるほど、わかりました。陣内さんも色々問題はあったようですね」

高木が立ち上がった。

「刑事さん、だからと言って、俺たち陣内さんを殺したりはしませんよ」

「それはわかっています。ただ、このタイミングで申し訳ないんですが、昨晚の午後十一時から午前一時の間、お二人はどこで何をされていましたか」

「俺たちのアリバイですか」

店長が訊いた。

「申し訳ありません。関係者全員にお伺いしております」

山川が頭を下げた。

「いいですよ。刑事さんもお仕事でしょうから」

店長が人懐っこい笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「私も坂倉もずっとここにいました。陣内さんが帰ってから学生のアルバイトたちと後片付けをしてました。片付けが終わってからは賭いをみんなで食べて、ここを出たのが一時半を過ぎていました」

「一時半までですか。遅くまで大変ですね。ご協力ありがとうございました。また何か思い出したことがあれば、こちらまで連絡下さい」

山川が店長と坂倉に名刺を一枚ずつ渡した。

「是非、犯人を捕まえてください」

高木と山川が居酒屋弁慶を後にする時に、店長が二人の背中に向かって言った。

妊娠

目の前でスヤスヤと気持ちよさそうに眠る赤ん坊の頬に手を当てた。この子が生まれて、向日葵はとても幸せだ。そして、未婚でできたこの子を生んで育てられるかと悩んだ時に、背中を押してくれたのは幸仁だった。彼のおかげで今の幸せがあると、向日葵は感謝している。

ただ、この子の誕生と引きかえに幸仁が失ったものは大きかった。向日葵はそれを取り戻さないと、家族三人の本当の幸せは来ないと思っている。

向日葵はお腹にこの子ができて、幸仁に相談した日のことを一生忘れない。生んで育てる自信がなかった向日葵だったが、幸仁がかけてくれた言葉のおかげで子どもを生んで育てる勇気が持てた。

向日葵は自分のお腹に手を当てた。どうするべきか考えても自分一人では結論は出せなかった。まずは、お腹の父親の幸仁に相談するしかない。幸仁が何と言ってくるのか、考えるだけで眠れそうになかった。

大事な話があるから、明日会いたいと彼にラインをした。彼からは、わかった、明日、大学が終わってから、向日葵の家に行くからとラインが返ってきた。

続けざまに彼からきたラインには、急にどうしたの？ と書いてあった。向日葵は悩んだ挙げ句、二人にとってすごく大事な話とだけ伝えた。

またすぐに幸仁からラインがきた。大事な話って何？ 気になるから教えてくれときたので、向日葵は、明日のお楽しみと笑顔をつけて返した。彼からは、じゃあ楽しみにしてる、おやすみと返ってきた。向日葵は、おやすみなさいと返して、布団に入ったが眠れなかった。

楽しみにして明日を待っている彼にとって、向日葵が明日、告白する内容は彼にとって喜ばしいことなのか、それとも困らせ悩ませることなのか、この時は全くわからなかった。

幸仁に喜んでほしいと思うけれど、まだ、大学生の彼にとって、負担になることは間違いない。悩ませてしまうことになるかもしれない。

布団に入り、いろんなことが頭に浮かんだ。やはり、彼には黙ったまま、病院に行って何もなかったことにしようか。そうしたら彼を悩ませずにすむ。そこで寝返りを打ってから、体を起こした。

枕元のスマホを手に取り、幸仁の写真を開いて見た。写真の中の彼は満面の笑みでこっちを見ていた。将来、幸仁との結婚を考えている向日葵にとって、今のこの大事なこ

を無かったことにしてもいいものだろうか。隠したまま結婚していいものだろうか。やはり隠したまま無かったことにするなら、幸仁との結婚はあきらめて、すぐに別れるべきだと思った。

幸仁と結婚するつもりなら、本当のことを話して、この先どうするかを二人で話し合うべきだ、いや彼の両親も含めて決めなければならないことかもしれない。もしかしたら、これで彼が逃げ出すかもしれないという不安もあった。

向日葵は幸仁と出会った瞬間に、あたしはこの人と絶対に結婚すると直感した。彼と誕生日が同じで生まれた病院も同じだと知って、運命の人に間違いないと思った。彼も向日葵に会った瞬間に電流がビビビと走ったと言っていた。幸仁との絆を信じているなら、やはり隠し事をしてはいけない。

「向日葵、今日はちょっと顔色悪いぞ」

幸仁は次の日に家に来て、すぐに向日葵の様子がおかしいことに気がついた。

「うーん、あんまり寝てないから。それにちょっとお腹が痛いし、体がダルいのよね。でも、大丈夫よ」

向日葵は胸の前で両拳を握って見せて、元気をアピールした。言い出すタイミングがわからなかった。

「病院行った方がいいんじゃないか。俺ついて行こうか」

病院に行った方がいいと言われて、向日葵はギクリとした。

「大丈夫だから、心配しないで」

向日葵は笑みを張りつけた。

「そう、ならいいけど」

幸仁が唇を尖らせていた。昨日、大事な話があるといったことが気になっている様子だ。彼は自分から聞き出すべきか迷っているように見えた。

向日葵から言い出すべきなのだが、なかなか言い出せなかった。やはり、幸仁には内緒のままにして一人で病院に行こうかと、ここにきて、また葛藤を繰り返した。

「行けよ」

幸仁が急に声を上げた。

「えっ、ど、どこに」

向日葵は慌てた。

「病院に決まってるだろ」

「ああ、病院ね」

「調子悪いんだろ。病院行った方がいい」

「う、うん……、そ、そうだよ」

向日葵は覚悟を決めた。今から告白しよう。

「いっしょについて行くよ。どうせ行かないつもりだろ」

「う、うーん、あ、あのね、ユキくん」

向日葵は顔を上げた。前で胡座をかく幸仁の太股に手を置いて、幸仁の目をじっと見つめた。

「なに？ やっぱりなにか隠してんだろ」

幸仁が向日葵の手をぎゅっと握った。幸仁の手はあたたかかった。

「う、うん。実はね」

「俺に隠し事は絶対にするなよ」

幸仁にじっと見つめられた。

「わ、わかっている。だから今から言うよ」

向日葵は幸仁から少し離れて正座をした。背筋を伸ばして、フーッと息を吐いた。

「なに？」

幸仁が背筋を伸ばした。ゴクリと喉の鳴る音が聞こえた。幸仁も緊張しているのがわかった。

「絶対に驚かないでよ」

「う、うん、わ、わかった」

「あのね」

「なに？」

「病院についてきてくれるのはいいんだけど」

「いいんだけど、なに？ まさか癌とか言うなよ」

幸仁が険しい表情を向けた。

「ちがう、ちがう。あのね、多分なんだけど」

「多分、なに？」

「多分ね、病院といっても産婦人科に行かないといけないと思うの」

「さ、さんふじんか？」

「そ、そう」

「さんふじんかって、あの産婦人科か？」

「そ、そう」

「てことは、向日葵はもしかしてこれか？」

幸仁が右手でお腹を膨らませるようなしぐさを見せた。

「うん、そう。できちゃったかもしれないの」

向日葵はお腹に手を当てた。

「えっ、えー、で、できちゃったって、どういうこと」

「あのね、ユキくんの子どもができちゃったかもしれないってこと」

向日葵がそう言ってお腹をさすった。幸仁は目を丸くして向日葵の顔をじっと見た。そして向日葵のお腹に視線を落とした。向日葵は、幸仁が今どんな気持ちでいるのかが気になった。まだ若いのに子どもなんてできたら困る、まだまだ大学生活を満喫したいと思っているのかもしれない。

「ほ、ほんとに」

幸仁が向日葵に体を寄せて、向日葵の左手を両手で握りしめた。

「う、うん、ほんと。間違いないと思う」

向日葵は幸仁の両手の上に右手をのせた。

「それって、俺の子どもができたってことだよな」

幸仁がまた向日葵のお腹に視線を落とした。

「うん、病院行かないとわからないけど、間違いないと思う」

この後、幸仁はどんな反応をするだろうか。

「そ、そうか、そりゃ、めでたいことじゃないか。向日葵、なんでそんな暗い顔してんだよ。俺はてっきり重い病にでもかかったのかと心配したじゃねえか。心配して損したぞ」

幸仁が向日葵を抱きしめて向日葵の体を揺らした。

「だって、今のあたしたちの状況じゃ、子どもなんて生めないでしょ。墮ろさなきゃいけないんだよ」

向日葵はお腹に手を当てて床に視線を落とした。

「生めない？」

「うん」

「墮ろす？」

「うん」

向日葵は言うてから涙が止まらなくなった。

「生めばいいじゃねえか」

「そんなの絶対に無理だよ」

向日葵は俯いて首を何度も横に振った。

「なんで無理なんだよ？　なんで墮ろすんだよ？」

「だって、それしかないじゃない。あたしとユキくんは結婚もしてないし、ユキくんは大学に通わないといけなくて、あたしは仕事しないと食べていけないのに、子どもなんて生んでる場合じゃないでしょ。育てられるわけじゃないじゃない」

「そんなことない。生めよ。そんなの何とかなるよ」

幸仁が向日葵の手をギュッと握りしめた。

「そんな簡単に言わないで。何ともならないよ」

向日葵は俯いて首を何度も横に振った。

「いや、ダメだ。墮ろすのはダメだ。絶対に、それはダメだ」

向日葵は幸仁の言葉が嬉しかった。しかし、現実を考えると生んで育てることは難しい。幸仁も冷静になったら、それがわかるだろう。

「無理だよ。子どもを産んでも育てられないよ」

「何言ってるんだ。向日葵らしくないな。今のままなら無理でも、今を変えれば無理でなくなるかもしれないじゃねえか」

「今を変えるって、何を変えるつもりよ」

「俺、大学やめて働くわ。今のバイト先が正社員募集してるから店長に頼んでみる。だから俺と結婚して、俺の子どもを生んでくれたらいい」

「ユキくんに迷惑がかかるし、そんなことユキくんのお父さんとお母さんも許してくれないと思う」

幸仁の言葉に向日葵は嬉しくて涙が止まらなかった。けれど、向日葵は幸仁の両親のことを思うと、素直に喜ばなかった。

「この際、親父とおふくろは関係ない。俺の人生なんだから俺が決める。大学をやめて俺は働く、向日葵と結婚する。だから、俺の子どもを生んでくれ。そして、俺と向日葵と子どもと三人で暮らそうぜ」

「ユキくんは、大学通ってる間にやりたいこと探すって言ってたよね。それを探さないといけないでしょ」

「うん、だから今やりたいことが見つかったんだ。いい機会なんだ。きっと、お腹の子が俺に教えてくれたんだ。お父さん、大学行ってる場合じゃないよ。学費ももったいないし、大学行っても勉強しないんだから、大学をやめてお母さんと僕を幸せにしてよってな」

「ユキくんのお父さんとお母さんはなんて言うかな」

「あいつらは放っとけばいいよ」

「でも、ちゃんと話さないといけないし、ユキくんのお父さんとお母さんに反対されてまで、あたし生みたくないから」

「そりゃ、わかってるよ。ちゃんと親父とおふくろに話して認めてもらう。じゃあ、明日にでも話してみるわ」

幸仁は次の日に両親に相談してくれたようだが、最悪の結果になってしまった。幸仁は父親から勘当されてしまった。

勘当

幸仁は目の前でスヤスヤと気持ちよさそうに眠る赤ん坊の頬に手を当てた。この子が生まれて、幸仁は幸せでいっぱいだ。そして、向日葵からお腹に子どもができたと言った時は飛び上がって喜んだ。

ただ、幸仁の親父はこの子を生むことを許さなかった。幸仁はそれに反発して、親父から勘当されてしまった。幸仁は勘当されても平気だったが、向日葵はそうではなかった。向日葵は幸仁と親父が仲直りしないと、家族三人の本当の幸せはないと思っているようで、いつも親父と仲直りするようになってくる。しかし、幸仁には今さらどうすることも出来ない。親父は頑固者だから、親父から頭を下げることはないだろうし、また幸仁から頭を下げる気もない。

幸仁は向日葵から子どもができたと言った次の日にさっそく、親父とおふくろに話すことにした。それが難攻不落であることは幸仁にはわかっていた。しかし、向日葵にそんなことは言えなかった。

「あらー、今日は早く帰ってきたのね」

おふくろの呑気な声は弾んでいた。幸仁がめずらしく早く帰ってきたのでご機嫌なんだろうが、今日これからする幸仁の話を知ると、おふくろの態度はどう変わるだろうか。

幸仁は親父とおふくろに大学をやめて結婚することを伝えるために、大学が終わるとまっすぐ家に帰ってきた。

「ああ、ただいま」

おふくろとは対照的な声になった。

「友達の家で遅くまで遊んでるのもいいけど、たまには今日みたいに早く帰ってらっしゃいよ。あんまり遅くまでいると友達にも迷惑よ」

おふくろは幸仁の方を見ることなく、キッチンに立ったまま言った。

「わかってるよ。友達がもう少しろってうるさいから、なかなか帰りづらいんだよ」

幸仁はリビングで胡座をかいた。

「友達ってどんな子よ。一人暮らししてるんでしょ。どこかの地方から出てきてるの」

おふくろには、向日葵の家に遊びに行く時、一人暮らしの友達のところへ遊びに行くときか言っていないから、おふくろは勝手に地方から出てきた大学の男友達だと思込んでいる。それが女性だと知って、その女性のお腹に自分の孫ができたと言ったと知るとどんな反応をするのだろうか。

「俺の連れのことだから、おふくろには関係ない」

「その友達と遊んでばかりで大学に行っていないんじゃないでしょうね」

「ちゃんと行ってる。行ってるけど、やっぱ、行ってもあんま意味ないわ」

「なに言ってるの。大学でしっかり勉強しないとダメでしょ」

「俺は勉強なんて、もういいよ。それより、今日はちょっと話があるんだ」

幸仁は立ち上がり、キッチンにいるおふくろの前に立った。

「なによ」

おふくろが顔を上げた。そこで少し怪訝な表情を浮かべた。

「俺の将来についての大事な話だ」

幸仁はニヤリと口角を上げた。その表情を見て、おふくろの表情がスッと消えた。

「大事な話ならお父さんがいる時にしなさい」

「ああ、そのつもりだ。親父が帰ってきてから話す」

幸仁は二階にある自分の部屋へと向かった。

「悪い話じゃないでしょうね」

おふくろの高いキンキン声が、階段を上がる幸仁に飛んできたが、幸仁はそれを無視した。悪い話ってどんな話なんだよと言いたかったが、面倒臭いので、そのまま部屋に入ってドアをバーンと閉めた。

幸仁は部屋に入ってからベッドに横になり、ぼんやりと天井を眺めた。自分の子どもが出来たという実感はまったくなかったが、このことをこれから親父に話さなければならぬという重い気持ちだけは、胸の上にはずしりとどろろとした。付き合ってる彼女が妊娠したから大学をやめて働くと言って、頑固者の親父が簡単に認めてくれるとは思えない。

玄関のドアの開く音がして、「ただいま」という親父の声が二階まで聞こえてきた。バタバタと足音がして「おかえりなさい」というおふくろの声がした。

幸仁は「フー」と息を吐いた。

これから親父に話さなければならない。ベッドに横になったまま目を閉じて、この後のことをもう一度頭の中で整理した。どう切りだそうかと考えたが、回りくどいことを言っても仕方がないと思った。付き合ってる彼女のお腹に俺の子どもができたから大学をやめて結婚して働く、そう言えばいいだけのことだ。そんなに難しいことではない。

「幸仁」

ドアの向こうでおふくろの高い声がした。

「なに？」

ドアに向かって言った。

「お父さんに大事な話があるんでしょ」

幸仁がベッドから体を起こした。

「すぐ行く」

「リビングで待ってるわね」

階段を降りるおふくろの足音が重々しく聞こえた。

「フゥー」と息を吐いてから、幸仁は部屋を出た。

階段を降りる足は重かった。リビングに入ると、親父はすでに苦虫を噛み潰したような顔をして胡座をかいていた。これから息子が話す内容があまりいい話ではないと思っているのだろう。おふくろは隣で不安そうな顔をしていた。幸仁は二人の前に正座した。

幸仁が座ると、親父はギロリと睨めるような視線を幸仁に向けた。幸仁はその視線を無視した。

「俺、結婚することにした」

幸仁は正座するとすぐに口を開いた。グズグズしていると言い出せなくなると思ったからだ。

「な、なに？」

親父の声が裏返った。おふくろの目が大きく開いた。

「俺、彼女がいて、その彼女と結婚することに決めたんだ」

一気に話してしまおう。

「結婚だと？」

親父の眉間に深い皺が入ったのがわかった。あまり見ないでおこう。

「ああ、結婚だ」

おふくろの顔を見た。おふくろは目を白黒させていた。

「結婚するのはわかった。それをいつするつもりなんだ」

親父が腕を組んだ。

「できるだけ早くだ」

「大学卒業して、すぐってことか」

ここでつまってはいけない、

「いや、大学はすぐにでもやめるつもりだ」

親父の口元がぐにゃりと歪んだ。

「お前、知ってたのか」

親父がおふくろの方を睨むように見た。

「ううん、わたしも今はじめて聞いたわ」

おふくろは首を横に振った。

「急にどうしたの」

おふくろが前のめりになって訊いてきた。

「実は、彼女のお腹に子どもができたんだ。これから俺が彼女と子どもを養っていかないといけないから、大学に通ってる場合じゃないんだ」

「仕事はどうするつもりだ」

「今のバイト先の最上店長に正社員にしてもらえるように頼んでみる」

「最上さんに頼むだと。最上さんと俺の仲は知ってるだろ。お前は俺の顔に泥を塗る気か」

「別にそんなつもりなんてねえよ。親父と最上店長が仲いいのは知ってるけど、それとこれとは関係ねえし」

「はあー」

親父があきれた表情を浮かべた。

「まあ、そういうことだから、大学はすぐにやめて、最上店長にお願いして、ホームセン

ターショーンで正社員として働くから」

「なにが、まあ、そういうことだからなんだ。お前はバカなのか」

親父がテーブルをバーンと叩いた。

「最近、家に帰ってくるのが遅いと思ったら、も一、何してるのよ。友達って女の子だったの」

おふくろのキンキンした高い声が幸仁の耳に突き刺さった。

「悪いけど、もう決めたことだから」

「ダメだ。そんなことは絶対に認めない。幸仁、お前の夢物語を聞いているほど俺は暇じゃない。今すぐ終わりにしろ」

親父は立ち上がり、リビングから出ていこうとした。

「あなた」とおふくろが親父を見上げた。

「放っておけ。ダメなものはダメだ。話はそれで終わりだ。結婚はダメだ。もちろん大学をやめることもダメだ」

親父は幸仁に背中を向けたまま言った。

「そっちがダメと言っても、俺は決めたから。俺の人生だから、誰にも邪魔させない」

親父の背中に向かって叫んだ。親父は振り向いて、またいつもの目でギロリと幸仁を睨んだ。

「ガキのクセして、何が俺の人生だ。お前が子どもを養えるわけないだろ。さっさとそのバカ女に子どもを堕ろしてもらえ。その費用ぐらいいは、こっちでなんとかしてやる」

「誰がバカ女だよ。そっちの方がバカじゃねえのか。せっかく生まれてくる子どもを堕ろすなんて、それは殺人と同じだぞ」

幸仁はテーブルを叩いて立ち上がり親父を睨みつけた。

「誰に向かってバカと言ってるんだ。お前の父親だぞ。お前がこうしてられるのは誰のおかげだと思ってるんだ」

「知るか、そんなもん。恩着せがましく言うな。なんと言われても俺は決めたからな」

「わかった。それなら、二度とここの敷居は跨がせない。今すぐ、ここから出ていけ。二度と俺と母さんの前に姿を見せるな。お前とは親子の縁を切る」

「あなた、何言ってるの」

おふくろが悲鳴のような声を上げた。

「ああ、そうするよ。あんたらとの親子関係が切れると思うとせいせいするわ。俺は三浦を捨てて佐山の姓になるから」

「相手のバカ女が佐山っていうのか」

「バカ女じゃねえよ」

「いや、バカ女だ。お前みたいな中途半端でバカな男の子どもを身籠るなんて、バカとしか思えん」

「うるせえよ。バカでも何でもいい。俺はもう決めたから」

「ダメよ、幸仁。もう少し冷静になりなさい。お父さんも冷静になりましょう」

「母さんも、こんなやつのは放っておけ」

「でも、このままじゃ、幸仁がまともな生活できるわけじゃないじゃない。一度彼女と会って、ちゃんと話し合ひましょうよ」

「話し合うものにも、子どもは墮ろしてもらうしかない。話し合うのはそれからだ」
「子どもは絶対に墮ろさない。それは俺が決めたんだ」
「幸仁はその彼女に騙されてるんじゃないの」
「それ、どういうことだよ」
「本当に幸仁の子どもなの？　彼女ってどこの誰よ？　一度連れて来なさい」
「母さん、放っておけ。子どもを墮ろさせないなら、話し合う必要なんてない。さっさと出ていけ」
「わかってるよ」
幸仁は先にリビングから出た。
「ユキヒト」
おふくろの声が背中から聞こえたが、幸仁は無視して二階へ上がった。そして、自分の荷物をまとめた。

幸仁は家を出て、その足で向日葵の家に転がりこんだ。
「ユキくん、どうしたの。今日、ユキくんのお父さんとお母さんに、あたしの妊娠のこと話したんでしょ」
幸仁は向日葵にどう説明しようかと考えたが、思い浮かばなかった。
「やっぱり反対されたんでしょ」
「まあな」
幸仁は笑って見せた。
「じゃあ、どうするの」
向日葵は眉をハの字にした。
「どうもしない。予定通りだ。俺は大学をやめて働くから、向日葵は俺と結婚してお腹の子を生んでくれればいいだけのことだ」
「本当に大丈夫なの」
「ああ、大丈夫だ。明日にでもバイト先の最上店長に正社員にしてもらえるよう頼んでみる」
「そんなことじゃなくて、ユキくんのお父さんとお母さんはどう言ってるの」
「まっ、気にするな」
「気にするよ」
「とりあえず、俺は三浦姓から佐山姓になる。親父とおふくろとはしばらくは会わないから」
「それってどういうことよ」
向日葵はじっと睨むように見てきた。幸仁は向日葵と目を合わせることができなかった。
「ほとぼりが冷めるまでだ。それまではそうした方がいい」
それを聞いて向日葵は首を折り頭を抱えた。
それから、幸仁は大学をやめて、向日葵と籍を入れ、ホームセンターショーマンの正社員になった。幸仁はホームセンターショーマンの店長の最上に社員にしてほしいとお

願いましたが、最上はなかなかウンとは言わなかった。最上が親父に気がつかっているのがみえみえだった。それなら、ここのバイトをやめて他の会社で仕事を探すと言ったら、最上はやっと首を縦に振った。

それから幸仁は子どもの誕生を楽しみにして毎日を過ごした。

幸仁は長椅子に座り、指を組んだ手を額に押し当てて祈った。向日葵の母親は、向日葵を生んですぐに亡くなったと聞いていた。子どもを生むということは、それほど大変なこと、命がけなのだ。

今の幸仁は、自分の子どもが生まれてくるという喜び、期待よりも、向日葵の体が無事なのかが心配だった。向日葵の笑顔が早く見たかった。いつものあの笑顔が見たかった。

リノリウムの床をコツコツと鳴らす足音が聞こえた。足音のする方を見て立ち上がった。看護師がこっちに向かってくる。

「佐山向日葵さんのご主人ですか」

看護師が幸仁に声をかけた。

「はい」

幸仁は胸がはちきれそうだった。向日葵は無事なのか。

看護師の顔に笑みが浮かぶのを確認した。

「おめでとうございます。母子共に健康ですよ」

看護師の言葉を聞いた瞬間に体中の力が抜けて椅子にへたりこんだ。

「ありがとうございます」

椅子に腰かけたまま体を折った。早く向日葵の顔と赤ん坊の顔を見に行きたいが、今は腰が抜けたように体に力が入らない。

幸仁は飽きることなくずっと生まれたばかりの赤ん坊を眺めていた。

「おめでとーさん」という声がして顔を上げると、店長の最上が、病室のドアから顔を覗かせていた。

「最上店長、来てくれたんですか」

「ああ、佐山の子ども顔を見せてもらおうと思ってな」

店長は顔をグシャグシャにしていた。

「どうぞ、入ってください」

「お邪魔するよ」

店長が病室に入ってきて、「よかったなー」と幸仁に握手をもとめてきた。幸仁が右手を出すと、店長は力一杯に幸仁の右手を握りしめた。分厚くてあたたかい手だった。

「店長、ありがとうございます」

幸仁が握手したまま頭を下げた。店長が幸仁の下げた頭をポンポンと叩いて、「よかった、よかった。本当によかった」と涙声で言った。

「いつも、主人がお世話になっています」

向日葵がベッドから体を起こして挨拶した。

「奥さん、大変だったね、本当にお疲れさま。起き上がらなくていいから。俺に気を遣わ

ずにゆっくりしてて」

店長はそう言って、向日葵を制するように右手を出した。

「はい、ありがとうございます」

向日葵がベッドの上に座ったままペコリと頭を下げた。

「赤ん坊を見せてくれな」

店長はベビーベッドを覗きこんだ。

「どうぞ、見てやって下さい」

「おーっ、やっぱり可愛いなあ」

店長が目を細めて、じっと赤ん坊を見ていた。

「はい、可愛い過ぎます」

「きれいな目してんな。こりゃあ、完全に奥さん似だな。よかったじゃないか」

「いや、そうですか。目元とかは俺に似てませんかね」

「そうかー。うーん、いや違うな。幸仁の目じゃないな。幸仁の目は、こんなにきれいじゃないな。もっと濁ってるからな。ハハハ」

「店長、失礼なこといいますね。俺の目だってきれいですよ。ほら、見て下さい」

幸仁が店長に顔を近づけた。店長は顔をそむけ、右手で制した。

「幸仁の目なんて、気持ち悪くてじっと見てられないわ」

「失礼ですね。俺は目もきれいですし、心もきれいなんです」

向日葵が二人の様子を笑みを浮かべながら眺めていた。幸仁は向日葵の笑顔を見て嬉しくなった。

「まっ、どっちにしろ、この子は可愛いよ。大きくなったらハンサムになるだろうな。うちの子の赤ん坊の時とは、えらい違いだもんな。うちの子は、山奥から出てきたサルみたいな顔してたからな」

「自分の子供なのに、酷いこといいますね」

「まっ、うちの子は仕方ないけどな。俺とカミさんの子だからな。どっちに似てもサルかゴリラかどっちかだろうからな。ハハハ」

店長は笑いながら、毛むくじゃらで分厚く温かい手で幸仁の背中をパンパンと何度も叩いた。痛かったけど、この店長の元で働けていることが幸せだと思った。

「今日は休ませてくれてありがとうございました」

「そんなの当たり前前のクラッカーだよ」

「当たり前前のクラッカー？ 何ですかそれ」

「当たり前前のクラッカーだよ。知らないの。知らないなら、親父さんにでも教えてもらえよ」

「えっ、……」

幸仁は気まずくて、言葉を返さなかった。店長はわざとこのタイミングで親父の話題を出したのだろうか、それともたまたま出てしまったのか。幸仁は前者だろうなと思った。

「それより、この子の名前は何て言うんだ」

店長は話を切り換えた。

「名前はトウマです」

「へえー、トウマか。カッコいい名前だな。どんな字を書くんだ」

「はい、これです」

幸仁は『斗真』と書いた紙を見せた。

「漢字もかっこいいじゃないか」

「はい」

「こんないい名前、誰が名付けたんだ？」

「俺が名付けました」

生まれてくる子どもが男の子だとわかってから幸仁は名前を決めることに夢中になった。これまでマンガ本以外読むことがなかった幸仁が本を三冊も買い、いろいろと頭を悩ませ考えた。学生の頃、苦手だったはずの漢字の意味にもこだわった。

『斗』は、星空のように壮大で広い心を持ち、星のように輝いてほしいという思いを込めた。

『真』は純粋で真心のある人になってほしいと思った。

向日葵も『斗真』を気に入ってくれた。

「ところで、親父さんには報告したのか」

今度は店長がストレートに訊いてきた。

「いえ」

幸仁は自分の顔が歪むのがわかった。

「そんな嫌な顔すんなよ。それより、ちょっとだけいいか」

店長がそう言って、顎をドアの方に向けた。笑みがスッと消えて口が真一文字になっていた。

「あ、はい」

店長は病室を出ていった。幸仁は後を追いかけて病室を出た。出る前に幸仁が向日葵の方を見ると、向日葵は唇を噛みしめ、じっと幸仁を見つめていた。

病室を出てすぐ横の壁際に置いてある長椅子に店長が腰をおろした。店長が自分の座る隣にスペースを空けてポンポンと叩いて、幸仁にも座るようにと促した。店長は背もたれにもたれるように座っていたが、幸仁はすぐにでも逃げ出したい気分で、椅子の端にチョコンと座った。幸仁には店長が今から話そうとしていることの察しはついていて、親父と仲直りしろということだ。

「やっぱり親父さんには、子どもができたことをちゃんと報告した方がいいと思うな」

店長は前を向いたまま言った。やっぱりこの話かと思い、幸仁はげんなりした。

「嫌です」幸仁は下を向いた。

「親父さんも心配してるし、絶対に今は後悔してるはずだ」

「いえ、あの人は後悔なんてしていません」

幸仁はそう言って、店長の顔を睨むように見ると、店長は口元を歪めた。

「縁を切ったといっても、やっぱり親子なんだぞ。血が繋がったこの世に一人しかいない父親なんだぞ。ちゃんと報告しておけって。親父さんにとっては初孫なんだしな、会いたいに決まってる。これをきっかけに、仲直りできるかもしれないじゃないか」

「いえ、俺は親父に縁を切られたんです。生まれてきた大切な子どもを利用してまで、仲直りなんてしたくありません」

「別に子どもを利用するわけじゃないよ。これから先のこと、子どもが大きくなってか

らのことを考えると、親父さんと今のうちに仲直りしておくべきなんじゃないかな」

「店長には、心配ばかりかけて申し訳ないと思っています。けど、こればかりは、どうしても無理です」

「はぁー、やっぱり幸仁も親父さんに似て頑固だな」

店長が天井を見上げた。

「店長、親父の話するなら、もう帰ってください」

幸仁は早くこの話を終わらせたかった。

「わかった、わかった。もう親父さんの話はやめておくよ。悪かったな」

店長が立ち上がり、幸仁の肩をポンポンと叩いた。

「わがまま言って申し訳ありません」

幸仁も立ち上がり深々と頭を下げた。

「いいよ。めでたい日に変なこと言って悪かったな。じゃあ、そろそろ店に戻るわ」

「店長、忙しいのに、ありがとうございます」

帰っていく店長の大きくて丸い背中に向かって言った。すると店長が振り返り戻ってきた。

「そうそう。高城さんも三井さんも赤ちゃんの顔を見たがってたんだよ。けど、幸仁も奥さんも疲れてるだろうから、お祝いだけ俺に預けて、来るのは遠慮したんだって。二人がおめでとうって言ってたぞ」

「そうですか。明日、二人にお礼を言っておきます」

高城と三井は幸仁といっしょに働いているパートの人たちだ。二人とも幸仁の母親くらいの年齢で、出産についていろいろとアドバイスをくれた。この年代の人が近くにいると本当に心強いなと思った。二人とも幸仁に子どもができることを自分の孫ができるようだと喜んでくれていた。

幸仁は店長を廊下で見送ってから病室に戻った。向日葵はベッドに座って、唇を噛みしめたまま、不安そうな視線を幸仁に向けた。

きっと、店長が何を言ってきたのか気になっているのだろう。そして、その内容に察しはついているのだろう。

幸仁はその視線をすり抜けるようにしてベビーベッドの前に立って、眠ってしまった斗真を眺めた。斗真を眺めていると、自然と笑顔になるが、向日葵の視線が横から突き刺さるのが気になった。幸仁はゆっくりと向日葵に顔を向けた。

「最上店長、なんて言ってたの」

「あ、まっ、最上店長の言いそうなことだ。親父に斗真が生まれたことを報告した方がいいぞだって」

向日葵は、「やっぱり」と言ってから項垂れて、しばらく動かなかった。

「向日葵が気にすることないから。俺と親父の問題なんだから」

「でも、あたしも最上店長と同じで、お義父さんには、ちゃんと報告した方がいいと思う。孫ができたことを知らないままなんて、お義父さんがかわいそう」

「大丈夫だよ。どうせ、店長が親父に話してるって。店長と親父は今でもちょくちょく飲みに行ってるのわかってんだから。それに、親父はかわいそうなことないから。あいつはこの子を墮ろせって言った男だからな」

店長と親父は以前からよく飲みに行っている。幸仁がアルバイトの頃は、今日は、これからお前の親父さんと飲みに行ってくるからと言って出かけていったが、幸仁が勘当されてからは、親父と飲みに行くと言わなくなった。幸仁に言いにくくなっただけで、今でも親父と飲みに行っていることは間違いない。

だから、幸仁のことは親父の耳には入っているはずだ。店長はいい人だが、自分のことをコソコソと親父に報告しているかと思うと、親父のスパイなのかと苛つくことがある。

「でも、あたしはユキくんの口からお義父さんに報告した方がいいと思う」

「じゃあ、考えとくよ」

これ以上、この話はしたくなかった。

「うん、考えておいて」

向日葵もこれ以上言うべきでないし、言ってもムダだと思ったようだった。

二人の間にしばらく沈黙ができてしまった。せっかくの幸せな気持ちが台無しになった。これも全て親父のせいだと幸仁は思った。

捜査

捜査会議の内容が不満だったのだろう。助手席の高木は口元を歪めてムンとしている。シンとした車内で、不機嫌な高木といるのは息苦しい。何を話せばいいのか、山川は会話の糸口を探した。今、捜査について話すのは、高木をより不機嫌にするかもしれないので後回しにしよう。しかし、捜査以外のことで高木と共通の話題は思い浮かばない。どうしようかと思った時、今朝、警察署で起きたちょっとしたトラブルを思い出した。

「今朝、署は大変だったみたいですよ」

山川がフロントガラスに顔を向けたまま言った。

「何かあったのか」

シートを倒していた高木が体を起こした。

「署に中年の男性が現れて、受付で何か話しかけた途端に口から血を吐いて、そのままバタンと倒れたそうです。受付はパニックだったそうですよ」

「警察署がそんなことくらいでパニックになるなよ」

「確かにそうですけど、対応したのが受付の女性だけでしたから」

高木はフンと鼻を鳴らしシートを倒した。高木はこの話に興味がないようで、車内はまたシンとしてしまった。山川は運転に集中することにした。

「その男性は警察署に何しに来てたんだ」

高木は急に訊いてきた。さっきの話は終わってなかったようだ。

「いやー、それは訊いてませんでした」

「なぜ訊かない。一般人が目的もなく警察署には来ないだろ」

「それは、そうなんです、俺には関係ないことなので」

「警察がそんなことじゃダメだ。後で訊いておけ。その男性がどこの誰で何しにきたのかくらいはな」

「はい、わかりました」

山川は返事したが、自分たちに全く関係ないことなのに面倒臭いなど思った。しかし、調べておかないと、後で高木にネチネチと言われるだろうから、後で受付の女性に訊いておこうと頭にメモした。

「それで、大丈夫だったのか」

「えっ、大丈夫って、何がですか」

「今は署で倒れた男性の話をしてるんだろ。大丈夫といえば、その男性の命に決まってるだろ」

「いやー、そこまでは訊いていませんけど」

「そうか。無事だといいたがな」

高木が少しだけ笑みを浮かべた。高木の機嫌が少し回復したようなので、捜査会議について触れてみることにした。高木の考えをしっかりと訊いておかないと、これからの捜査がやりづらい。

「やっぱり、事件は通りすがりの喧嘩だったんですかね」

捜査会議では酔っ払った陣内が、あの辺りにいた若者かチンピラとトラブルになり殺害されたと見ていた。その方向で捜査を進めるとというのが上の判断だった。

「上は簡単に決めつけすぎだ」

高木は吐き捨てるように言った。

「高木さんは通りすがりの喧嘩じゃないと思ってるんですよね」

「決めつけて捜査するべきじゃないと言ってんだ。確かに通りすがりの喧嘩かもしれないが、そうでない可能性も十分に考えられる。怨恨、顔見知りの犯行の可能性もある。なのに、奴らは通りすがりの喧嘩だと決めつけて捜査しようとしやがる。手抜きにもほどがある」

「でも、上は高木さんの好きなように捜査させてくれてるじゃないですか」

「あいつらは、俺を説得するのが面倒臭いから俺のやり方を認めただけだ。あいつらは俺の捜査で犯人逮捕が出るとは思っていない。うるさいから好きにやらせておけと思ってるだけだ」

「けど、これで犯人逮捕にこぎ着けたら、高木さんがヒーローじゃないですか」

「別にヒーローになりたいわけじゃねえ。少しでも早く事件を解決したい。被害者の無念をはらしたい。それだけだ」

「高木さんはこの事件をどう見てるんですか」

「俺は怨恨の線が強いと思っている。それを調べるためにも今からの聞き込みは大事になる」

「わかりました。高木さん着きました。そこですね」

白地に緑色の文字で書かれた三和タクシーの看板がフロントガラスの右側に見えた。

「そうか、着いたか」

高木は窓の外を眺め「よしっ」と声を発した。

山川が来客用の駐車スペースに車をとめるとすぐに高木はシートベルトを剥ぎ、助手席から降りた。山川も慌てて降りて、三和タクシーの事務所へといきり立つ高木の背中を追いかけた。

「陣内が殺されたなんて、本当にビックリしましたよ」

三和タクシー人事部の柳原は薄くなった頭を掻いた。体は小柄だが、声はよく通る高くて大きい声だった。

「その件で、いろいろとお伺いしたいことがあります。お忙しいところ申し訳ないですが、事件の早期解決に向けてご協力をお願いします」

山川が柳原に向けて頭を下げた。

「ええ、そりゃもちろん協力させていただきます」

童顔な柳原の顔がキリッとしまった。

「では、まずですね。陣内さんは昨日は仕事はお休みでしたか」

「ええ、陣内は昨日は休みでした」

「一昨日は仕事でしたよね。仕事は何時まででしたか」

「一昨日の陣内は、午後六時に退社しています」

午後六時に退社してそのまま居酒屋弁慶に行ったのだろう。

「一昨日は仕事を終えてから、陣内さんは誰かに会うようなことは言ってませんでしたか」

「いやー、何も言ってませんでした。無愛想なやつでしてね、いつも挨拶くらいしかしませんので」

「そうですか。柳原さんは居酒屋弁慶という店をご存じですか」

「いやー、知りません。私は下戸なもので」

「それでは、最近の陣内さんについて変わった様子はなかったですか」

「すいません。思い当たりません」

陣内は運転手なので、ずっと職場にいるわけではなく、本社勤務の柳原との会話は特に少なかったのだろう。

「陣内さんを恨んでいる人物に心当たりはないですか」

「陣内を恨んでいる人物ですか。うちの従業員では思い当たらないですが、お客さんとのトラブルが多かったのは事実です。私から陣内には、その都度注意しましたが、なかなかおりませんでした。しかし、お客さんは恨んでるというより怒ってる、または怖がってるといった方が正しいでしょうかね」

「お客さんとのトラブルですか。具体的にどんな内容ですか」

「いろんなのがありましたね。少し待ってください」

柳原がテーブルの端に置いていたタブレットを手元に寄せて指を滑らせていた。しばらくして、山川の方にタブレットの画面を向けた。

「今年だけですが、大体、こんな内容です」

山川が「拝見します」と言ってタブレットの画面を覗きこんだ。表題に『お客様からのご意見』と書いてあり、運転手名の欄には『陣内晃』とあった。

タブレットの画面を下へとスクロールして、そこに書いてある文章を目で追った。読み終わると、また下へとスクロールした。それを何度も繰り返してから、山川は「多いですね」と柳原に顔を向けた。

柳原は「そうなんですよ」と眉をハの字にした。

高木が「何が書いてあるんだ」と山川に訊いてきた。

『運転手から暴言を吐かれて途中で降ろされた』

『渋滞に巻き込まれて運転手の機嫌が急に悪くなって運転が荒くなった』

『近くなのにタクシーを利用するなど怒鳴られた』

『運転手に口説かれて怖かったので途中でタクシーを降ろしてくれと言うと、運転手が怒りだした』

『運転手が急にタクシーをとめて体を触りにきた』

そんな内容だと山川が高木に説明をした。

「これら全てが陣内さんに対するクレームですか」

「はい、そうです」

「それにしても内容も酷いですね」

陣内がこんな人物なら、高木の言うとおりに、殺害理由が怨恨の線も十分に考えられる。

「陣内は元々大手の商社で働いていまして、若くして部長までした男ですからプライドも高かったんでしょうね。お客さんのなかには酔っ払って横柄な物言いをする人も多いですから。他の運転手はそういう時、グッと堪えているんですが、陣内はそれが出来なかったようです。それに加えて陣内は女性にもだらしなかったようですからね」

「陣内さんは、ここで働く前は五味商事で働いていたんですかね」

「うちに来る前にも何社か働いてたようですが、最初は五味商事の部長だったと聞いています。それがうちみたいなタクシー会社で運転手として働くことになって、プライドがズタズタになったんじゃないですかね」

「三和タクシーさんも立派な会社じゃないですか。僕はよく利用させてもらってますが、運転手の方は皆さん礼儀正しくていい方ばかりですよ」

「ありがとうございます。私どもは運転手の接客には特に力を入れてきましたから」

柳原が笑みを浮かべ胸を張った。

「陣内さんに対するクレームはこれですべてですか」

「いえ、これは弊社のホームページに送られてきたものだけで、電話でのクレームもありました」

「その電話のクレームの内容もわかりますか」

「はい、わかりますけど、このホームページにきた内容とさほど変わりませんが」

「それでも結構です。拝見できますか」

「紙の資料になりますので、ちょっと待ってください」

柳原が席を外した。高木が湯呑みを口にしてから「とんでもねえ奴だな」と呟いた。

「恨んでる人物は多そうですね」

山川も湯呑みを口にした。

「まあ、けど、ここにクレームを言ってきた人物が犯人の可能性は低いな。ただ陣内という男は誰かから恨まれていてもおかしくないな」

「お待たせしました」

柳原が資料を持って戻ってきた。

「お忙しいのにお手数をおかけします」

山川が柳原に頭を下げた。

「最近では陣内に二件のクレームの電話がありました」

柳原が一枚目の資料を刑事たちに向けた。

「拝見します」

山川は資料に視線を落とした。

「こちらはですね、よくうちを利用してきている建設会社の社長さんなんですがね、急に運転手の機嫌が悪くなってタクシーから引きずり降ろされたということで電話がありました。常連のお客さんで上得意な方でしたので、なんてことするんだと、陣内にはだいたい怒ったんですがね」

「確かにホームページに来ていたものと似た内容ですね」

「ええ。この時はすぐに代わりの車を手配して、後でお詫びにも伺いました」

「もう一件はどんな内容ですか」

「こっちはもっと酷かったですね。若い女性のお客さんでしたけど、彼女はですね。陣内からストーカー行為を受けたという内容でした」

「ストーカーですか」

「ええ。陣内に問いつめましたけど、陣内はストーカー行為は認めませんでした。陣内の話では、それはたまたま通りかかった時に偶然会っただけだと言ってるんです。けど、最初に陣内がやった内容を聞くとストーカー行為だったと言われても仕方ありません」

「詳しくお聞かせいただけますか」

山川が高木の顔を見た。高木は頷いた。

「はい。その女性の話では、会社の飲み会の帰りに女性三人で陣内のタクシーに乗ったそうです。先に二人が順に降りて車内は陣内と彼女二人っきりになったそうでした。そこで陣内が彼女にこれからドライブしようとか言ってきて、口説きはじめたそうです」

「これと同じような内容がホームページにありましたね」

「ええ、そうですけど、こっちの方が酷いです」

「どう酷いんでしょうか」

「彼女は怖くなってすぐに降ろしてくれと言ったそうですが、陣内は聞く耳を持たず、そのままタクシーのスピードを上げて、ドンドン人気のない山道へと入っていったそうです」

「うーん、それは恐ろしかったでしょうね」

「だと思えます。私にも年頃の娘がいますが、自分の娘がそんな目にあっていたらと思うとゾッとします」

「それで、彼女は大丈夫だったんですか」

「ええ、さすがに彼女もだいぶ興奮したようで、陣内にきつい口調で抗議したそうです。さすがの陣内もあきらめたようで、彼女を自宅近くまで送り届けたそうです」

「ストーカー行為はそれからですか」

「彼女は自宅近くまで送ってもらったのが悪かったと後悔していました。数日後に彼女が帰宅する時に陣内が駅前に車をとめて立っていたそうです。陣内は彼女を見つけると近づいてきて、食事を誘ってきましたが、彼女は断ったそうです」

「偶然だったんですかね」

「しかし、それが何度かあったみたいで、彼女が付きまとわないで下さいと言うと、自惚れるなどと言って怒鳴って帰って行ったそうです」

「それで、彼女から会社へ連絡が入ったわけですか」

「そうです。陣内には注意したんですが、先にお話した通り、たまたま駅で客待ちしていたら、彼女が駅から出てきたので声をかけただけだと言いはってます」

「うーん、陣内さんの言い訳には無理がありますね。それから彼女から連絡はありましたか」

「それからはありません。なので、多分大丈夫だと思っているのですが」

自分の娘だったらゾッとするとおきながら、多分大丈夫だとは呑気なことだ。まあ、他人はそんなものかと山川は変に納得した。

「ありがとうございます。それにしても、陣内さんはいろいろあったようですね」
「まあ、なにせトラブルは多かったですね。実は社長とも相談して辞めてもらおうかと考えていたところなんです。けど、今の世の中、簡単にクビにはできないでしょう」
「そうですか。それでしたら、あなた方は陣内さんが死んで良かったと思ってるわけですか」

高木がニヤリと笑みを浮かべて口を挟んだ。すると、童顔な柳原の目がつり上がった。
「陣内には辞めてほしいとは思いましたが、さすがに死んでほしいなんて思ってませんよ。私たちが陣内を殺したとでも言うんですか」

柳原が高木を睨んだ。
「すいません。そういうつもりはないんですが、警察としてはありとあらゆる可能性を考えさせていただきますので、お気を悪くしたのなら申し訳ございません」

山川が高木の代わりに頭を下げた。
「ああ、それと最近、社員に臨時ボーナスのようなものを出したことはありましたかな」
高木に詫げる様子はない。

「いやー、ないです。この不景気にそんな余裕はありませんよ」
なるほどと高木が口を尖らせた。

「陣内さんが五味商事を辞めた理由はご存じですか」
高木が続けて訊いた。

「面接で聞いた時は、五味商事はプレッシャーがすぎて精神的に追い込まれて体調を壊したからと言っていました。大企業で若くして部長になったので大変だったのかなと思って、その時は聞いていました」

「そうですか。まあ、面接で本当のことは話さんでしょうがな」
「五味商事を辞めた理由は他に何かあったんでしょうか」

柳原が高木に逆に質問してきたが、高木は「いやいや、それはこれからの調べになりますな」と手のひらを横に振った。

「ところで、ここの職場で陣内さんと親しくしていた従業員はいましたか」
柳原が「陣内と親しくしてた従業員ですか」と言ってから、宙に視線を向けてから「そうですね、強いて言えば村山ですかね」と答えた。

「村山さんですか」
「ええ、まあ陣内はあまり人づきあいがいい方ではありませんでしたが、村山とはよく喫煙所で話していました」

「村山さんからお話を聞きたいんですが、今ここに呼んでいただくことは可能でしょうか」

「今ですか」

「はい、出来れば」

「ちょっと待ってください。村山の勤務を確認してきますので」

柳原が席を立った。山川は「恐れいります」と言って柳原を見送った。

「高木さん、さっきのストーカー被害の女性をどう思いますか」

「微妙だな。今の話だけなら、何とも言えない」

「お待たせしました。村山に連絡が取れました。近くを走ってましたので、十分かそこら

で戻ってくると思います」

「ありがとうございます」

しばらくすると、ドアをノックして、村山が入ってきた。三十代くらいの痩せた男だった。村山は柳原に椅子をすすめられて少し戸惑いながら腰をおろした。

「お仕事中、申し訳ありません」

山川が警察手帳をかざした。

「あ、はい」

村山は背筋を伸ばした。緊張している様子で、山川と高木の顔を交互に見た。

「陣内晃さんの件はご存じですか」

「ええ、さっき柳原さんから聞きました。殺されたとか」

村山が柳原の方を見てから答えた。

「それを聞いてどう思われましたか」

「どう思ったも何もビックリしたとしか言いようがありません」

「陣内さんとは親しくされていたようですね」

「うーん、親しいというほどでもないです。喫煙所で雑談するくらいです。運転手でタバコを吸う人間が減ってきたんで、喫煙所で陣内さんと二人きりになることは多かったですから」

「プライベートで飲みに行ったりすることはなかったんですか」

「プライベートではないですね」

「そうですか。では、最近陣内さんに変った様子はなかったですか」

「あの人自身がすでに変わってましたけど、最近特に変わった様子というのとはなかったです」

「誰かに恨まれているとか、何かトラブルに巻き込まれているとか、そんな話は聞いたことなかったですか」

「いやー、聞いたことはないです」

「そうですか」

村山が「あっ、そうだ」と言って手を打った。

「何ですか」

山川は村山の顔を見た。

「関係あるかわかりませんが、最近やたらと気前がよくなりました。煙草や缶コーヒーを奢ってくれたりして、それでポートで儲けたんですかって訊いたら、もっとでかいやつだとか言ってました」

「もっとでかいやつですか」

山川は高木の顔を見た。高木の眉間に皺が寄った。

「ええ、確かそう言ってました」

「具体的に何か言ってませんでしたか」

「いやー、そこまではわかりませんが、俺にも運がまわってきたよって言ってました」

「運がまわってきたですか。柳原さんはそれに心当たりはありませんか」

「いやー、すいません。ありませんね」

柳原は首を傾げた。

「高木さん、どう思います？」

山川が高木の顔を見た。

「今の話といい、臨時ボーナスの話といい、気になるな」

「貴重な情報をありがとうございます。他に何か思い出したことがあれば、こちらに連絡いただけますか」

山川が村山に名刺を渡した。

村山は「わかりました」と言って名刺を受け取った。

「最後に、お二人は昨晚の午後十一時から午前一時の間、どこで何をしていましたか」

「私たちのアリバイですか」

柳原が口元を歪めた。

「申し訳ありません。関係者全員にお伺いしていますので、ご容赦ください」

山川が頭を下げた。

「その時間だと、私は自宅の布団の中ですよ。証明してくれるのは嫁さんくらいしかいませんが」

まず柳原が答えた。

「俺は起きてましたけど、自宅でテレビ見てました。一人暮らしですから誰も証明してくれる人はいません」

「そうですか、わかりました。ありがとうございます。ご協力ありがとうございました」

ユーチューブ

出来上がった動画を眺めて、向日葵は首を傾げた。どうもうまくいかない。全体的にボンヤリした暗い感じで、肝心のライターに刻まれた文字が読みづらい。文字が読めないところの動画の意味がなくなる。仕方なくキーボードを叩いてライターの文字を字幕として打ち込んだ。毎日パソコンを操作しているおかげでキーボードを打つのが速くなった。今日は息子の斗真がおとなしくしてくれていたの、作業は思ったより進んだが、長い時間パソコンの画面に向かっていたせいで、目が乾いてショボショボした。目頭をおさえると瞼の裏にパソコンの画面が残像として残った。

「今日はここまでにしよ」

一人呟いてからノートパソコンをボタンと閉じた。それと同時に「ただいまー」という明るい声が玄関から聞こえた。この声を聞いただけで、向日葵は心が跳ねて幸せな気分になり、一日の疲れが一気に吹き飛ぶ。向日葵は玄関に向かって小走りした。玄関で靴を脱ぐ幸仁の姿が見えた。

「おかえりなさいー」

靴を脱いで玄関に上がってきた幸仁にダイブする勢いで抱きついた。この時が向日葵の至福の時間だ。

「向日葵、目が真っ赤だぞ。今日も一日中やってたのか」

幸仁が向日葵の顔を覗きこんだ。

「うん、一日中やってた。おかげで目がショボショボになった」

向日葵は目をこすった。

「精が出るな。じゃあ、もしかして夕飯の支度はこれからか」

「一応、撮影に使った分はあるけど、あと一品作るから少し時間がかかる。ごめんね」

「いいよ。向日葵も忙しいんだから。ところで斗真は？」

「今日もよく寝てるの」

「起こしてもいいよな」

「うん。そろそろ起こさなきゃと思ってたから。斗真起こしたらお風呂に入れてくれる」

「わかった」

「じゃあ、あたしはその間にご飯の支度するね」

「忙しいのに、悪いな」

「いいよ、ユキくんは外で働いて疲れてるんだから」

「向日葵だって、毎日パソコンやって、家事やって、斗真の世話してんだろ」

「ユキくんの仕事に比べたら大したことないよ。家事は手抜きだし、斗真のお世話は一緒に遊んであたしが楽しんでもらうだけし、パソコンだって、あたしが好きな料理作って、撮影して、編集してユーチューブにアップするだけだしね」

「けど、俺の仕事より向日葵の方が大変だと思う。それに今の収入は向日葵の方が断然多いしな」

「確かに今は多いけど、こんなのたまたまだから、いつ無くなるかわかんない。だから家計を支えてるのはやっぱりユキくんだよ」

「それにしても、向日葵の作った『イケメン男子の心を掴むための絶品レシピ』のブログがこんなに人気になるとは思わなかったな。ほんとビックリした」

「イケメン男子はユキくんのことだったんだけどね。はじめてユキくんがあたしの料理を食べた時、すんごく喜んでくれて、それからあたしたち付き合うようになったから、それをブログにただけなんだけど、まさかこんなことになるとはね」

「確かに向日葵の料理をはじめて食べた時は感動したけど、それが理由で俺は向日葵と付き合いおうと思ったわけじゃないからな」

「それはわかってる。あたしを見た瞬間に体中に電流がビビビと走ったんでしょ。それはあたしも同じだったから。ユキくんを見た瞬間に、あたしの運命の人はこの人だと思ったもん」

「生まれた時から、俺たちはこうなる運命だったもんな。同じ日に同じ病院で生まれたんだから」

「お互いの誕生日と生まれた病院が同じだとわかった時は、ほんとにビックリだった」

「まあ、それにしても、向日葵がこんなに料理上手だとは思わなかったな。人は見た目じゃわからねえと思ったよ。それも得意料理が魚の煮付けや肉じゃがとか和食なんだもんな。出汁も昆布とかつお節からとってるし、すげえよ」

「料理はお婆ちゃんに教えてもらってたからね。お婆ちゃんは料理が得意だったから、お婆ちゃんは勉強できなくてもいいから、料理だけでも上手になっておけて言ったの。ほんと、世の中何が役にたつかわかんないね」

向日葵は幸仁と付き合いはじめてすぐの頃に『イケメン男子の心を掴む絶品レシピ』というブログを立ち上げた。幸仁に自分の料理を食べさせた時の幸仁の喜んでる姿を見て、嬉しくてブログにアップしたのが始まりだった。それから幸仁のために料理をつくる度にブログを更新していった。それがいつの間にか人気になっていた。

レシピの中身は向日葵の祖母の節子から教わった料理がほとんどで、二十歳の女性がつくるようなものは少なく、煮物などの和食が多い。お婆ちゃんのレシピといった感じだ。中には糠漬けの漬け方などもあったが、そういうのがなぜかうけた。

ある日、ブログを見た出版社から、向日葵のところにレシピ本の出版の依頼が来て、向日葵はレシピ本を出版することになった。その本も予想以上に売れた。それから、ユーチューブでもレシピの配信をはじめた。それもそこそこ登録者が増えて好調だ。

幸仁はいつも夕食の後片付けをしたり洗濯物を干してくれたり家事を手伝ってくれる。

「ユキくん、ありがとう」

幸仁が手伝ってくれる度、向日葵は幸仁に向かって、必ずお礼を言う。どんなに親しい間柄でも当たり前だとは思わず感謝の言葉を口にしない。それも祖母節子から教え

られたことだ。

向日葵にとって、一日の最後に斗真の寝顔を見ることも至福の時間だ。小さな胸を上下させ寝息を立てる斗真を見ているだけで、幸せを感じて心が落ち着く。目の前には可愛い斗真の寝顔、背中には優しい幸仁がいる。向日葵はこの幸せを絶対になくしたくないと思っている。

ただ、こんなに幸せな向日葵でも一つだけ心に引っかかっている大きな悩みがある。それさえ解決すれば、本当に幸せになれるんだと向日葵は思っている。そのことについて、幸仁に話を切り出すと幸仁は人が変わったように機嫌が悪くなる。

「ねえ、ユキくん、そろそろお義父さんと仲直りしたらどう？」

思いきって、この話題を幸仁に持ちかけた。また幸仁の機嫌が悪くなるかもしれない。

「またその話かよ。絶対にそれは無理。親父も俺のことを許すはずないしな」

やはり幸仁の反応はいつもと同じだ。

「そんなことないと思うんだけどな。お義父さんは優しい人だから、きっと許してくれるよ」

「向日葵は親父のこと知らないからそんなこと言えるんだ。あいつは頑固でわがままで人の心のない奴なんだから」

「そうかなー」

「そうだよ。あいつは向日葵のお腹に斗真ができた時になんて言ったと思う？」

「それ何度も聞いた」

向日葵はこの話題を出したことを後悔した。

「墮ろせて言ったんだぞ。墮ろして、向日葵と別れろって言ったんだ」

「それ、何度も聞いたから、もう言わないで」

向日葵が人差し指で両耳に栓をした。

「人を殺せて言ったのと同じだぞ。あいつは自分のプライドのためなら殺人するのも平気な奴なんだ」

「ユキくんはお義父さんの話になると、凄く怖くなる。その話はもう聞きたくない」

「聞きたくないなら、向日葵もあいつのことは二度と口に出すな」

「斗真が物心つくまでに、あたしも斗真も三浦の姓になりたいんだけどな。ユキくんも佐山より三浦の方がいいでしょ」

「もう言うなって、俺は佐山幸仁になって良かったと思ってる。三浦幸仁になんて絶対に戻りたくない」

幸仁はこの話題になると興奮して早口になる。その様子を見て、本当は幸仁もお義父さんと仲直りしたいはずだと向日葵は思っている。何かいいきっかけがあればいいのだが、それがなかなか見つからない。いつかは幸仁とお義父さんが仲直りしてほしい。三浦親子に亀裂が入ったのは向日葵のせいだ。それが向日葵にとって、今一番辛いことだった。

向日葵という名前は祖母がつけてくれた。まず向日葵自身が絶対に幸せで明るく元気に前を向いて生きること。そして、向日葵自身の幸せを周りの人たちに振り撒いて、周りの人たちまで幸せにできるような人間になってほしい。向日葵という名前に込めた思いを、祖母は布団の中で幼い向日葵によく聞かせてくれた。

向日葵は幸仁と斗真のおかげで幸せになれた。しかし、向日葵の幸せを周りの人に振

り撒くことはできていない。反対に自分のせいで幸仁の父親と母親を不幸にしている。それは向日葵にとって耐え難いことだった。

誕生日

店長室を覗くと、店長の最上が下唇を突きだし、パソコンの画面に顔を近づけていた。店長の手元を見ると右手人差し指だけでキーボードをポツポツと頼りなく叩いている。キーボードを叩いているというより、ボタンを押していると言った方が正しい。

「店長、お先に失礼します」

幸仁が声をかけると、店長は人差し指の動きを止めて幸仁の方に顔を向けた。

「おお、佐山か」

店長の目は真っ赤になっていた。今日は、店長の姿が見えないと思ったら、一日中、店長室にこもり、パソコンと向き合っていたようだ。

「お疲れ様です」

幸仁はペコリと頭を下げた。

「お疲れさん。今日は早いんだな」

店長はそう言ってから、立ち上がり短い両手を突き上げ「ウーン」と声を上げて背筋を伸ばした。

「はい、店長が忙しい時にすいません」

店長の充血した目を見ると、先に帰ることが申し訳なくなった。

「いいよ、いいよ、そんなこと気にすんな。閉店業務をやって遅くなる日もあるんだから、早く帰れる日は帰ればいいんだ」

「でも、店長、大変そうですね」

「そうなんだー、こいつが厄介なんだよな。みんなは便利って言うけど、俺にとっちゃ全然便利じゃないよ」

店長がそう言って、パソコンを顎で差した。

「パソコンですか」

「そう。明日、会議だからさ、報告書を作成中なんだよ」

「そう言えば、明日は本社で店長会議があるって言ってましたね」

「そっ。また会議で絞られるわけだけど、その前に会議に出す報告書を作らないといけないんだ。それが今月からは手書きの報告書がダメになってさ、パソコンに打ち込んで、今日中にメールで送信しないといけないんだ。手書きだとすぐにできるんだけど、パソコンだと、これがなかなか進まんのよ。ここに先月の売上と利益率を入力しろとか、ここには自慢の売場画像を貼り付けろとか、全くわけわかんねえよ。文字を打ち込むのに時間がかかるし、ほんと歳とるとやっぱりダメだわ」

店長はそう言って頭をボリボリと掻いた。店長は自分は歳だと言うが、まだ五十歳くらいのはずだ。まだまだ元気で若い。売場で力仕事とかバリバリとこなしているのだから、歳だというよりデスクワーク、特にパソコンが苦手なだけだ。

「店長の仕事って、いろんなことやらなきゃいけないで大変なんですわね」
「まあな。けど、お前んとこの親父さんに比べたら屁みたいなもんだけどな。俺なんて雇われの身だから、毎月給料はちゃんともらえるし、忙しいといたって仕事離れりゃ自由の身だしな。親父さんは社長だからプライベートなんてないと思うぞ。家族のためだけじゃなく、従業員のことまで考えないといけないからな。なのに、いつも新しいことにチャレンジしてすごいよ」

幸仁は親父の話題になったので、逃げ出したくなって、「店長、頑張ってください」と逃げるようにして店長室を出た。

店長は幸仁との会話の合間に親父の話題をしらじらしく挟んでくる。幸仁と親父を仲直りさせようとしているためのようだが、それが無駄だということが、店長は全くわかっていない。店長はいい人で、すごくお世話になっているが、幸仁と親父の問題に他人である店長が口を挟んでくることだけは鬱陶しい。

店長は幸仁がここで働く前から親父と知り合いだ。店長はなぜか親父のことを尊敬している。親父みたいな人間を尊敬する店長の感覚もよくわからない。幸仁の親父は、この地域では有名なスーパーミウラの社長だ。幸仁の祖父三浦奏輔が営む果物店を継いでスーパーミウラとしてオープンさせてから順調に売上を伸ばし店舗数を増やしていったようだが、幸仁にとってはそれが凄いととは思わない。

幸仁と親父との関係が壊れたのは一年以上前のことだ。幸仁が付き合っていた向日葵のお腹に子どもができたことがきっかけだった。向日葵は両親がいなくて親戚もいないので頼れるのは幸仁しかいなかった。しかし、幸仁も大学生だったので、子どもを堕ろすしかない向日葵は言ってきた。幸仁は向日葵が子ども生んで育てるために、大学をやめて、向日葵と結婚し、バイト先のホームセンターショーマンで社員として働くこと決めた。そのことを親父に話すと猛反対され口論となり、最後に幸仁は勘当されて家を飛び出した。それ以来、幸仁は親父とおふくろには会っていない。幸仁は勘当された時の親父の言葉が今でも許せない。三浦孝士という男は血も涙もない人間だ。今でもあの日の親父の言葉を思い出すと怒りで体が熱くなる。

ベビーベッドを覗くと、斗真はスヤスヤと気持ちよさそうに寝息をたてていた。首を横に傾け、半開きの口からよだれが垂れる。幸仁はそれを見ているだけで、一日の疲れがふっ飛ぶ。

「それじゃあ、今から誕生パーティーの準備するね」

向日葵が斗真を起こさないように、幸仁の耳元で小声で言った。今日早く帰ってきた理由は幸仁と向日葵の誕生日だからだ。

「斗真は？」

「夜寝なくなるかもしれないけど、もう少し寝かせておくわ」

向日葵は台所へと向かった。

「それにしても、斗真はよく寝るよな」

幸仁は居間で胡座をかいてテレビのリモコンをつけた。

「寝る子は、元気に育ってくれるかな」

台所から向日葵の声をした。

テレビの画面からは、さほどおもしろくもないお笑いタレントが焼肉を食べている映像が流れていた。

そのお笑いタレントが、「この肉の脂はしつこくなくて本当に甘いですね。これまで食べた焼肉の中で一番美味しいです」と目を大きく見開いてコメントしていた。確かに旨そうな焼肉だったが、『これまで食べた中で一番美味しい』というコメントは大袈裟じゃないか。このお笑いタレントが今までに食べに行った焼肉屋の店員が聞いたらどう思うのだろうかといらぬ心配をした。そんなことを思いながら、焼肉の映像を見て生唾を飲みこんだ。

「はい、おまたせー」

向日葵が大きな白い皿を両手で持ってきた。その皿を幸仁の前に置いてニコッと笑った。幸仁も笑みを返してから、向日葵が置いた大きな白い皿に視線を落とした。

「えっ、す、すげえ」

幸仁の目に飛び込んできたのは皿の上にとっしり載ったステーキ肉だった。幸仁の掌くらいの大きさで厚さが一センチ以上あった。焼きたてで金色に輝く脂が白い皿に滴っている。脂のいい匂いが部屋中に立ち込めた。さっきテレビに映っていた焼肉よりこっちの方が断然旨そうだった。

「こ、この肉、す、すごいね」

幸仁の口の中は唾液が止まらない。

「そう、二人の誕生日だし奮発しちゃった」

嬉しそうに話す向日葵の手にはワインがあった。

「えっ、ワインまであるの？」

「そう、記念日だからね」

こんな上等な肉とワインを買って、家計の方は大丈夫なのかという言葉は飲み込んだ。今のこの雰囲気をおち壊すわけにはいかないし、今の稼ぎは向日葵の方が幸仁より多いからだ。

「俺、こんな大きくて旨そうなステーキ食べるのはじめてかも」

「あたしも、こんなステーキ食べるのはじめて。A5ランクの肉だって言ってたよ。感謝、感謝ねー」

A5ランクの肉？ 肉のランクは、よくわからないが、たぶん高級なんだろう。それに、向日葵は何に感謝なんだろうか。

これも今日のために向日葵が買ってきたのか、これまでに見たことのないキラキラしたワイングラスで乾杯してから、ワインを口に含んだ。この赤い液体の味の旨いはずはよくわからないが、気分は盛り上がった。

ステーキにナイフを入れると、柔らかくて簡単に切れた。肉の焼き加減もよくわからないが、ミディアムに丁度よく焼けているんだろうと思った。向日葵は料理なら何でも上手だ。料理は祖母から教えてもらったということだが、さすがに肉の焼き方なんかは教えてもらってないと思う。元々向日葵自身に料理のセンスがあるのだろうか。肉を口

に入ると、とろけるように簡単に噛みきれて、肉汁が口の中に広がった。脂がしつこくなくて甘い。旨すぎる。こんな旨い肉、生まれてはじめてだ。さっきのお笑いタレントとは違い、幸仁の場合は間違いなくこれまで食べた肉の中で一番旨い肉だった。

「旨すぎ」

思わず声が出た。

「うん、すんごく、美味しい」

向日葵も興奮気味に声を上げた。

贅沢な気分だった。せっかくの二人の誕生日だ。これくらいの贅沢をしてもバチはあたらなだろうと幸仁は思った。

「ありがとう。美味しかった。ごちそうさま」

「うん、美味しかったね。ごちそうさま」

二人で顔を見合わせ、手を合わせた。そこで、隣の部屋から斗真の泣き声が聞こえてきた。

「斗真が起きたみたいだな」

「ほんとだ。ちょうどだね」

向日葵が斗真の寝ている隣の部屋に視線を向けた。

「斗真は、俺たちが食べ終わるのを待っててくれたのかな」

「斗真って、赤ちゃんなのにすごいね」

「ちょっと見てくるよ」

幸仁は立ち上がり隣の部屋に向かった。

「うん、お願い」

向日葵がそう言ってから、洗い物をキッチンへと運んで行った。

幸仁は斗真を隣の部屋から連れてきて膝の上に置いた。斗真もご機嫌そうだ。向日葵がキッチンから、またお皿をもってきた。

「ユキくん、お待たせ。はい、次は食後のデザート」

向日葵がそうってお皿をテーブルの上に置いた。

「おっ」幸仁はお皿を覗きこんだ。

「ついに桃を買いましたー」

お皿の上には一口サイズに切った桃が並べられていた。

「おー、す、すげえな」

「ケーキを買おうと思ったんだけど、ユキくんは桃が大好物だからね」

向日葵はニコニコしながら幸仁の顔を覗きこんだ。

向日葵はなぜ、幸仁が桃が大好物だと知っているのだろうか。幸仁が桃が好きだったのは、子どもの頃に行った桃農園の記憶があるからだ。桃農園で過ごした楽しい時間と食べた桃の美味しさが忘れられなかったからだ。しかし、今は違う。だから、向日葵に桃が大好物だと話した記憶はない。

「向日葵、俺が桃が好きだったことよく知ってたな」

「当たり前よ。ユキくんのことは何でも知ってるんだからね」

幸仁は不思議に思ったが、これ以上桃について話したくなかったので、そのまま終わらせた。

爪楊枝に刺した桃を一切れ持ち上げた。部屋の灯りに反射してみずみずしくキラキラと輝いている。そのまま口に放り込むと口の中が冷んやりとした。噛むと甘い果汁が口いっぱいに広がった。子供のころに食べたあの桃と同じくらいに、向日葵の出したこの桃は美味しかった。これまで食べた桃の中で一番旨いとは言えないが、あの時に食べた桃に匹敵するくらいの旨さだった。あの旨い桃を食べた日のことを思い出したが、幸仁は頭を振って、記憶を振り払った。あれは遠い過去のこと、自分は子どもだったから勘違いしていただけなんだ。

「斗真の分はこっちね」

斗真用に、火を通して細かく砕いた桃がプラスチックの皿にのせてある。

「斗真の方も旨そうだな」

向日葵が幸仁の隣に座り斗真に桃を食べさせていた。

「はい、あーん」

斗真が大きく口を開けた。つられて幸仁も大きく口を開けていた。向日葵がスプーンにのせた桃を斗真の口に入れると、斗真はモグモグと口を動かして笑っている。それをゆっくり何度か繰り返していた。すぐに皿のなかの桃は空っぽになった。やっぱり斗真は食いしん坊だな。

「マーマ」

斗真がしゃべった。少し前から斗真がしゃべりはじめていた。最初の言葉は今と同じ『マーマ』だった。

それから『パーパ』と言ってもらえるようにと、幸仁は何度も「斗真、パーパだよ」と斗真に向かって言い続けたが、未だに『パーパ』とは言ってもらえていない。

今日も斗真に顔を近づけて「斗真、パーパだよ」と言ってみたが、斗真は幸仁の顔を見て笑ってるだけだった。

今日もダメだなと諦めかけた時に、斗真が「じーじ」と言った。幸仁は慌てて斗真の顔を見た。

「斗真、『じーじ』じゃないよ。俺は『パーパ』だよ。言ってみな」

幸仁は斗真の顔を覗きこんだ。

「ばーば」

今度もパーパではなく、濁音になっていた。

「『ばーば』じゃないよ、『パーパ』だよ。ほら、斗真言ってみな」

「じーじ」

「ばーば」

「マーマ」

斗真は『じーじ』と『ばーば』と『マーマ』を繰り返した。幸仁は首を傾げた。

「なんで、『じーじ』と『ばーば』と『マーマ』なんだよ」

幸仁はふてくされるように言った。

「お隣の三橋のおじいちゃんとおばあちゃんにも可愛がってもらってるからかな」

向日葵は困ったような表情を浮かべた。

「そっか、斗真は俺より三橋のおじいちゃんとおばあちゃんと過ごしてる時間の方が長いもんな」

この町内にはお年寄りが多くて幸仁と向日葵のような若い夫婦はめずらしい。だから斗真は、この町内に住むお年寄りの人気者になっているのは、向日葵から聞いていた。前の公園で遊んでもらったり、家に呼んでもらったりしているらしい。

斗真が可愛がってもらえていることはすごく嬉しい。向日葵も小さい頃からここで育っているから、顔見知りも多くて向日葵のことを娘のように思い、斗真のことを孫のように可愛がってくれている。

しかし、斗真と長い時間過ごせるお年寄りたちを羨ましく思うことがある。幸仁も斗真ともっと長い時間一緒に過ごして、もっともっと遊びたいと思う。しかし、仕事をしっかり頑張らないと向日葵と斗真を養っていけない。仕事に行ってる間はもちろん斗真に会えない。朝早く出勤する日は斗真はまだ寝ているし、遅く帰る日は斗真はすでに寝ている。

小さなホームセンターだ。大企業とは違い残業もそこそこ多い。週休二日といっても休日出勤も時々ある。

仕事で疲れていても斗真や向日葵の顔を見ると元気になることは間違いないが、やはり肉体的、精神的な疲れが積もり積もっていくと、正直、休みの日は体を休めたくて斗真と遊ぶ気力がない時もある。

休みは一人で、ポーっとしていたい、ゆっくりと眠りたいと思ってしまう。会社の先輩たちは昔に比べたら、残業も休日出勤もマシになったと言っていた。自分たちの若い頃は一ヶ月間休み無しだったとか、一日の睡眠時間が二、三時間しかなかったとか、一ヶ月の残業時間が二百時間を超えていたとか、武勇伝のように話している。昔の人は本当に働き者なんだなと思う。

昔、親父が仕事から帰ってきて、グッタリとリビングに座りこんでいるのを、何度も目にすることがあった。親父から生気が感じられなかった。おふくろと幸仁に対して一言も口をきかずに、目を閉じてソファに静かに座っていた。おふくろはそんな親父のことがわかってたのか、文句も言わず黙って夕食の支度をしていた。

幸仁はそのドンよりした空間にいるのが耐えられなかったので、すぐに自分の部屋に引っ込んだ。親父のせいで家が暗くなるのが嫌だった。

今思えば、親父は社長だから今の幸仁なんかとは比べ物にならないくらいに肉体的、精神的に追い込まれていたのかもしれない。今の幸仁の職場で武勇伝のように話している人たちよりもっと大変だったのかもしれない。それでも頑張り続けていたのは、家族を養っていくため、従業員を守るためだったのだろうか。本当は今の幸仁と同じように、幼ない息子とゆっくりと長い時間を共に過ごしたかったのだろうか。

今日の帰り際の最上店長の言葉が頭を過る。

『お前んとこの親父さんに比べたら屁みたいなもんだわ』

幸仁が疲れた表情で帰ってきてても、斗真と向日葵はいつもニコニコと笑ってくれる。斗真と向日葵の笑顔に幸仁は助けられている。子どもの頃の幸仁は、今の斗真や向日葵のような笑顔を親父に向けたことはなく、どちらかと言えば避けていた。疲れて帰ってきた親父に挨拶もしなかった。

今、斗真や向日葵があ頃の幸仁のような態度だったら、自分は頑張れるだろうか。あの時の親父は、どんな気持ちでいたのだろうか。

「斗真はいつも笑ってくれるな。お母さん譲りなのかな。ありがとうな。父さん、斗真の笑顔のお陰で仕事も元気に頑張れるよ」

そう言って斗真の頭を撫でた。『パーパ』はまた今度聞かせてもらおうことにしよう。

聞き込み

山川は塗装が剥がれ錆びの浮いた鉄製の階段を不動産屋の男に続いて上がっていった。すぐ後ろから高木がカツカツ、カツカツ、とせわしない足音をたてているので、山川は落ち着かなかった。高木が不動産屋の呑気な足取りに苛立っているのは見え見えだった。「歳取ると、これくらいの階段でも疲れますわ」

不動産屋は階段を上がりきったところで、振り向いて笑みを浮かべた。そんなことはどうでもいいから早くしてくれ。山川は心の中でぼやいた。

「それより、陣内さんの部屋はどこなんですか」

山川は不動産屋を急かした。

「ああ、この部屋なんですわ」

不動産屋は階段を上がってすぐの部屋のドアを手のひらでパンと叩いた。

「すぐに鍵を開けてもらえますか」

山川が言うと、不動産屋は「はいはい」と相変わらず呑気な口調で言って、ドアノブにポケットから出した鍵を差し込んだ。そこからまた時間がかかった。ガチャガチャと鍵を回そうとしているが、引っ掛かっているのか、なかなか鍵が回る気配がなかった。不動産屋が「あれ、おかしいな」と言って、山川に苦笑いを浮かべた。笑ってる場合じゃないんだ。早くしてくれ。

「その鍵で合ってるんですか」

山川は不動産屋の顔を覗きこんだ。

「間違いないはずですけどね。違ったら事務所まで取りに帰らないといけなくなるな。それは大変だし合っててくれよ」

不動産屋がブツブツ呟きながら鍵を回していると、いきなりガチャリという音を立てて鍵が回った。

「合ってましたね」

不動産屋が山川にニヤリと笑みを向けた。

「開きましたか」

「ええ、鍵が間違いでなくて、良かったですわ」

不動産屋は言いながらドアを開けると、ドアがギィーという嫌な音を立てた。

「お手数をおかけします。終わりましたらお電話させていただきます」

「どれくらいかかりそうですかな」

不動産屋がおもちゃみたいな腕時計を見た。

「そうですね。一時間くらいで終わると思います」

山川も腕時計を見て高木の顔をうかがった。高木は無言で頷いた。

「一時間くらいでしたら、事務所に戻るには中途半端ですし、外で待っているには少し長いんで、この近くの喫茶店で休憩しときますわ」

「お忙しいのに申し訳ないです」

「いいですよ。最近は暇ですから」

不動産屋はにこやかな表情を浮かべた。

「その前に陣内さんについてお話を訊いてもよろしいですか」

「陣内さんのことはほとんど知らないんですよ。陣内さんと顔を合わせたのは、ここに入居した時だけでしたからね」

「そうですか、このアパートの住人とトラブルとか聞いたかとはなかったですか」

「いやー、ないですな」

不動産屋は首を横に振った。

「家賃の滞納とかはなかったですか」

「それもなかったですわ」

不動産屋はさっきまでの呑気さとは打って変わって、早く休憩させろといった感じだった。

「そうですか、わかりました。ありがとうございます。ご協力感謝します」

「じゃあ、私、すぐその角を曲がったところの喫茶店で待っていますんで」

「ご迷惑おかけします。終わったら電話します」

山川が不動産屋に頭を下げる後ろで、高木は玄関から室内を覗いていた。

不動産屋が喫茶店へ向かっていく後ろ姿を見送ったあと、高木と山川は部屋に足を踏み入れた。

「それにしても、汚ねえ部屋だな」

高木がそう言ってから、三畳ほどの台所にある冷蔵庫のドアを開けた。後ろから山川が冷蔵庫の中を覗きこむと缶ビールと缶チューハイだけしか入っていなかった。高木は冷蔵庫の横に置いてあるゴミ袋を持ち上げて中を覗きこんだ。

「カップ麺やコンビニ弁当の容器ばかりだな」

高木はゴミ袋を置くと、今度は六畳の部屋へと移動した。山川が部屋の蛍光灯の紐を引っ張った。パチパチと音を立ててから部屋が明るくなった。小型テレビの前には脱ぎっぱなしの衣類が散乱している。折り畳み式の小さなテーブルの横には布団が敷きっぱなしだった。

「なんだこれ」

高木がテーブルの上に置いてあった一冊の本を手にした。ペラペラとページを捲って、うーんと首を傾げた。

「レシピ本ですかね」

山川も首を傾げた。この部屋にこの本があるのは違和感でしかない。

「ここで料理をしている様子はねえしな。なんでこんなもんがあるんだ」

「もしかしたら、陣内さんがこれから料理でもはじめようと思って購入したのかもしれないね」

「まあ、その可能性もあるが、この本は若い女性向けだ。陣内さんが読みそうには思えない。まあ中を見てみろ」

高木がレシピ本を山川の胸の前に突き出した。山川はそれを受け取りページを捲った。最初の章は、山川が子どもの頃、母親が作ってくれた昔懐かしい和食の写真がズラリと並んでいた。一人暮らしをはじめてからは、こういった料理はほとんど食べていない。山川も陣内と同じくカップ麺とコンビニ弁当が主な食事だ。年に数回、徳島の実家に帰った時に母親の手料理を食べると、子どもの頃とは違い、すごいご馳走に感じた。母親のありがたさを感じる瞬間だった。

レシピ本のタイトルは『お婆ちゃんの料理は健康的でダイエットにもいいよ』となっていた。ページを捲ると、次の章は『イケメン男子は実は和食が大好き』というタイトルで、そこからページを捲ると、『実は男子はキャラ弁が好き』とあってキャラ弁のレシピ写真が並んでいる。キャラ弁の絵柄はヒマワリのものばかりだった。

「確かに陣内さんとは全く結びつきませんね」

山川がレシピ本を閉じようとした時に、本に挟まっていた紙切れがヒラヒラと床に落ちた。山川は落ちた紙切れを床から拾い上げて確認した。

「高木さん、これ、このレシピ本を買った時のレシートですよ」

山川は高木にそのレシートを差し出した。

「おお、そりゃ貴重だな。この本はいつ、どこで購入したもんだ」

「えっとですね、店は牧野書房ってところですね。日時は六月十日の五時五分になってます」

「てことは二ヶ月くらい前か。二ヶ月前にしてはこの本はきれいな状態でレシートも挟まったままだな。このレシピ本を陣内さんが使った形跡はねえな」

「そうですね。間違っ買って、そのままにしてたんですかね」

この部屋の中で、このレシピ本の艶のある表紙が一番輝いて見えた。

「牧野書房はこの近くか」

「ええっと、西宮駅前ですね」

「西宮か、陣内さんはなぜそんなところで本を買ったんだろうな」

「さあ、どうなのでしょう。ここからそんなに遠くはないですけど」

「すぐにその牧野書房に行って話を訊いてみるか」

「あ、はい、わかりました。すぐに行きますか」

「まあ、待て。それよりこれを見ろ」

高木がテーブルの横にあった屑入れから紙切れを取り出した。

「それもレシートですか」

「そうだ。こっちは喫茶店のレシートだ。それも同じようなのが二枚ある」

高木が二枚のレシートを山川に渡した。山川は二枚のレシートを見比べた。レシートは同じ喫茶店のもので、どちらもコーヒーとオレンジジュースを注文していた。違うのは記された日時が五日前と十日前ということだ。時間はどちらも午後一時頃だった。

「こっちはわりと最近ですね。ここは陣内さんの行きつけの喫茶店ですかね」

「男一人でコーヒーとオレンジジュースを注文するか。それにわざわざ一人で尼崎から西宮まで行くのもおかしいだろ。山川、ちゃんと考えて推理しろよ。だから、お前はいつまで経っても半人前なんだ」

「すみません」

山川は口を尖らせたが、確かに高木の言う通りだと思った。

「陣内さんは五日前と十日前にこの西田珈琲で誰かと会っていたんだろな。コーヒーを陣内さんが注文したとすると、オレンジジュースを注文したのは女の可能性が高い」

陣内さんの周辺の女性で、今のところ思い当たるのは、三和タクシーの聞き込みでできたストーカー被害者の女性くらいだ。

「三和タクシーで聞いたストーカーの被害者ですかね」

「こんなものもある」

高木が山川の話を見殺しにして、今度は屑入れから白い封筒を取り出した。

「銀行のロゴが入ってますね」

「ところで、なぜ、ここに鑑識が入ってねえんだ」

「俺に訊かれてもわかりませんが、犯行現場じゃないからですかね」

「今回の事件を、あいつらは通りすがりの喧嘩だと決めつけて捜査してるようだが、俺は怨恨の線の可能性の方が高い気がする。すぐに陣内さんの人間関係を洗いなおさないとダメだ」

「高木さんは最初からそう言ってましたよね」

「そうだ。だからすぐ、ここに鑑識をまわすように連絡しろ。この封筒の指紋も調べてもらえ」

「けど、俺から言って、鑑識が動いてくれますかね」

「つべこべ言うな。言われた通りにしろ」

「わかりましたよ」

山川はスマホを取り出した。

「それから、電話が終わったら、さっきのレシートと封筒の写真を撮っておけ」

「今からその本屋と喫茶店に聞き込みに行く。それと陣内さんの元妻の住所が西宮だ。ついでにそこにも行って話を聞いておくかな」

「わかりました」

陣内さんの元妻なんて二十年も前のことに関係ないと思うのだが、山川は高木に従うしかなかった。下手に意見するとどやされるだけだ。

「おい、さっさとしろ」

高木は言うことだけ言って部屋を出ようと玄関で靴を履きはじめた。

山川は慌てて鑑識に電話をして、それからスマホでレシートと封筒の写真を撮った。

「鑑識に電話して、レシートと封筒の写真も撮りました」

山川は玄関に立つ高木に告げた。

「よし、行くぞ」

高木がドアを開けて出て行こうとした。

「ちょ、ちょっと待ってください。不動産屋にも終わったことを連絡しないとイケませんでした」

「先に不動産屋に電話しておけよ。相変わらず、お前は要領が悪い」

高木は出るのをやめて、開けたドアを勢いよくバタンと閉めた。

間口は狭いが店内に入ると思ったより中は開けている。明るい店内にはずらりと一面に本の背表紙が並んで見える。入ってすぐのマンガ本のコーナーには立ち読みの列がで

きていて、その列の後ろを通り抜けると、赤いエプロン姿の若い女性店員が屈んで本の整理をしていた。

「すみません」

山川が女性店員の顔を覗きこむように少し屈んで声をかけた。

「あ、はい、いらっしゃいませ」

女性店員は慌てて立ち上がった。立ち上がったが、屈んでいる山川と視線が同じくらいの小柄な女性だ。

「ここの責任者の方とお話がしたいんですが」

「あ、はい。店長でいいですか」

若い女性店員は首を傾げた。

「はい。お忙しいところ、申し訳ないですが、お願いします」

女性店員は、少し訝しげな表情を浮かべたが、「わかりました。少々お待ちください」と言って奥へと消えていった。

山川はレシピ本の並ぶ棚に視線を向けた。レシピ本だけでもいろんな種類がある。陣内の部屋にあったレシピ本と同じものを探してみたが、どれも同じに見えた。

すぐにさっきの女性店員が戻ってきて、その後ろに女性がついて来ていた。彼女が店長だろう。眼鏡をかけた読書姿が似合いそうな三十代くらいの女性だった。山川は向かってくる女性に向けて頭を下げた。女性も少し不安そうな表情を浮かべながら頭を下げた。

「店長の井ノ上ですが」

色白でショートカットの黒髪がよく似合っていた。

「お忙しい時間に申し訳ありません」

山川が井ノ上の目の前に警察手帳をかざした。

「あ、はい、な、なんでしょうか」

井ノ上の眼鏡の奥の目に緊張の色が浮かんだ。山川は笑みを浮かべて井ノ上の緊張をほぐそうと試みた。しかし、あまり効果はなかった。後ろに立つ高木の人の相のせいだ。相変わらず、苦虫を噛み潰したような顔をしている。容疑者と話すわけじゃないんですから、笑みくらい浮かべてくださいよと言いたいところだが、山川が言えるはずもなかった。

「実はこれなんですけど、見ていただけますか」

山川がスマホを操作し、陣内の部屋で撮影したレシートの画像を開いてから、井ノ上にスマホの画面を向けた。井ノ上が「は、はい」と言ってスマホの画面を覗きこんだ。

「これ、この店のレシートですよ」

井ノ上が目を凝らしてから、「そうですね、うちですよ」と頷いた。

「実はですね、ある事件の関係者の自宅にこのレシートがあったんです。その人物の足取りを追うためにご協力をお願いしたいのですが」

「あ、はい、わかりました。どのようにすればよろしいですか」

「レシートの日付を見ると二ヶ月前なんですけど、この本を購入した人物の記憶があれば、お訊かせいただきたいんです」

「二ヶ月前ですか、いやー、どうでしょう」

井ノ上がポロシャツから覗く白くて細い首を傾げた。

「このレシートに記載されている、この時のレジの担当者の大山さんからお話しが訊ければありがたいんですが」

「大山なら、今レジに入ってます。少しお待ち下さい」

井ノ上がレジの方へと向かった。

「二ヶ月前のお客さんのことなんて覚えてますかね」

山川が高木に小声で訊いた。

「うーん、わからんな。よほどインパクトがないと覚えてないかもしれんな」

一分も待たずに井ノ上がこっちに向かって少し早足で歩いてきた。井ノ上の後ろから歩いてきているのが大山だろう。ふっくらとした体型とニコやかな表情は接客に向いているんだろうなと山川は思った。

井ノ上が「お待たせしました。彼女が大山です」と紹介してくれた。

大山は、「大山です」とニコやかな表情を山川にも向けた。

「刑事さん、もう一度、さっきのレシートの画像を見せていただけますか」

井ノ上が山川に言った。少し緊張がほぐれた様子で、店長らしくテキパキとした感じに変わっていた。

「あ、はい」

山川がスマホを指で操作して画像を開いてから二人にスマホの画面を向けた。

「大山さん、これ覚えてる。何かの事件に関係する人が持ってたんだって」

井ノ上が山川の代わりに説明してくれた。大山は山川の手からスマホを手に取り、目から近づけたり遠ざけたりして、最後は眼鏡を外して近づけて見ていた。

「あーあ、覚えてるかも」

大山の言葉に山川と高木が顔を合わせた。

「この時のこと覚えてるんですか」

「うん、覚えてるわ。なんか変やったからね」

大山は井ノ上とは違い、最初から緊張している様子はなかった。

「このお客さんなんですが、どんな人でしたか」

「えーっとね、確か、この本を買うようなタイプじゃなかったのよね。これは若い女性向けのレシピ本なのに、わたしと同世代くらいのおじさんが買って行ったわ。だから、すごく覚えてる」

陣内さんに間違いないと山川は高木に向かって首肯した。高木が続けると顎を突き出した。

「その時の様子を詳しくお聞かせいただけますか」

「ええ、いいですよ。そのお客さんがレジにこの本を持ってきた時に、私がこの本は誰かにプレゼントですかって訊いたんですよ。そしたら、いえって言って照れ臭そうに笑ってました」

「プレゼントではなかったということは、本人が使うつもりだったってことですか」

「ええ、それでねプレゼントじゃなくて、お客さんが料理するために買うのなら、他におすすめの男性向けのレシピ本があるから、そっちにした方がいいですよって言ったんです」

「なるほど、その男性は、それに対してなんて言ったんですか」

「このレシピ本は、自分の知り合いが書いたものだから売上に協力するんだみたいなこと言ってましたね」

「知り合いが書いた本ですか」

「ええ、そう言ってましたね」

「なるほど。すごく参考になりましたわ」

高木がめずらしく少し興奮したように山川には見えた。

「ありがとうございました」

山川が大山に頭を下げた。

大山は「いいえ」と言って満足そうだった。最後に「これ、何の事件なんです？」としつこく山川を見上げてきたのは少し面倒臭かった。高木はそれを無視して先に店を出て行った。

本屋から出て数分歩いたところに、次の目的地はあった。木目調の外壁の落ち着いた雰囲気のお店だ。

「ここですね」

山川が建物を眺めた。

「先にコーヒーでも飲んでからにするか」

高木はさっさと店に入っていった。山川が後を追うと、高木はすぐに空いた席に腰をおろしたので、山川も高木の前に腰をおろした。

「聞き込みはしないんですか」

山川がき訊くと、高木は、「その前にコーヒーが飲みたくなったから奢ってやるよ」と目尻に深い皺を寄せた。

高木にしては珍しいなと思った。牧野書房で大山という店員から聞いた情報のおかげかもしれない。大山から話をきいた時の高木はすごく興奮していた。少しずつだが、犯人に近づいていく手応えを山川も感じていた。

若い女性店員が注文をとりきたので、高木がホットコーヒーを、山川はアイスコーヒーを注文した。

「お前は今回の事件をどうみてる」

高木がコーヒーカップを口にして、山川を上目遣いに見た。

「俺は高木さんの意見に賛成です。通りすがりの単なる喧嘩ではないと思います」

「フン、何、俺に合わせてんだ。俺の機嫌をとったところで何の得もねえぞ。出世もできねえし、給料も増えねえ。逆に上から目をつけられるだけかもしれん」

「俺だってそんな為だけに捜査しているわけじゃありませんよ」

「じゃあ、何の為だ」

「そりゃあ、事件の早期解決、犯人逮捕をして被害者の無念を晴らすためですよ」

山川が言うと、高木は「バカな奴だな」とニヤリと笑みを浮かべた。

コーヒーを飲み終わった後、マスターをよんでもらい、山川は警察手帳を見せた。マスターの顔が一瞬強ばったのがわかった。前にいる人物が警察の人間だと知ると、誰もがそうした表情を浮かべるのを山川は何度も経験してきた。

「ここのお客さんのことで、少しお話をお聞かせいただけますか」

山川はいつものように、相手の緊張をほぐすための笑みを浮かべた。今回は高木の表情も柔らかかったので、マスターの顔の強ばりはスッと引いてくれた。

「うちのお客さんのことですか」

「ええ、このレシートなのですが、ある事件に関係している人物の自宅のゴミ箱にあったんです。これはこここのレシートですよ」

山川がスマホを操作してからレシートの画像をマスターに向けた。

「ええ、うちのレシートです」

マスターがスマホの画面を覗きこんだ。

「このレシートのお客さんのことわかりますか」

「ああ、はい、このお客さんならよく覚えています」

マスターが何度も首肯しながら答えた。

「えっ、本当ですか」

山川は興奮して、椅子から立ち上がる勢いだった。

「ええ、ええ、このお客さん、何度もうちに来てくれましたし、なんかヤバそうだったので、よく覚えています」

山川はマスターの言葉を聞いた後、高木を見ると目が鋭く光っていた。その後、山川に向けて、早く続けろと顎を突き出した。

「ヤバそうってどういうことですか」

マスターが「えっとですね」と言ったところで、頭を整理しているのか、言葉を詰まらせた。

「まず、このレシートを見るとコーヒーとオレンジジュースが注文されていますが、そのお客さんは二人だったんですかな」

高木が口を挟んだ。

「ええ、そうです。でも、正確に言うと三人なんですよ」

「正確に言うと三人とは、どういうことですか」

「女性が赤ん坊を連れてきましたので」

「とういことは、そのお客さんは子連れ夫婦といったところでしょうか」

山川が高木の後を引き継いだ。

「いやー、男性と女性の歳はだいぶ離れてるようでしたので、最初見た時は子連れ夫婦というより、おじいちゃんと娘と孫かなと思いましたけど」

「そうすると、男性は五十代から六十代くらいですか」

「多分、五十代くらいじゃないですかね。女性は若かったです。二十歳くらいに見えました」

「もしかして男性はこの方じゃないですか」

山川はスマホを操作して陣内の画像を開いてからマスターに向けた。マスターはその画像を見て頷いた。

「はい、この方です。間違いありません」

山川は高木の顔を見た。高木の鼻の穴が大きく膨らんでいるのがわかった。

「いつ頃から来るようになりましたか」

「確か、二ヶ月くらい前からですかね。はっきりとは覚えていませんが」

二ヶ月前となると、陣内があのレストラン本を買った日あたりだ。

「いつも、三人で来てたんですか」

「そうですね、三人で来てたというか、ここを待ち合わせ場所にしてたんじゃないですかね。大体、女性と赤ん坊が先に来て、遅れて男性が来てました」

「マスターはそのお客さんのどういうところを見てヤバそうと思ったんでしょうか」

「はい、それはですね、最初に来店された時はお二人はすごくなごやかだったと記憶しています。それこそ男性は孫を連れた娘と会ったおじいちゃんのような感じでした。ですが、来店する度にお二人の雰囲気が変わってきました。女性は来る度に表情が暗くなっていきました。男性もきつい表情になっていきましたし、女性に向かって大声で怒鳴ることもありました。それと、うーん、まあ、これはちょっとよくわかんないんですけど」

マスターがそこで口ごもった。

「何でしょうか。隠さずにお話いただけますか」

「いや、隠すわけじゃないんですが、間違っていたら申し訳ないです」

「記憶違いや思い違いは、誰にでもあります。あなたがおっしゃったことの実情については、私どもで調べます。間違っている構いませんので、気になることがあるのなら、お話いただけますか」

「そうですか。えっとですね、実はこのお客さんのことで、私が一番気になっているのは、女性が男性に封筒のような物を手渡していたことなんです」

それを聞いた高木の表情が変わった。

「その封筒は銀行の封筒じゃなかったですか」

「ちゃんと見てないので、銀行の封筒かはわかりませんでしたけど、封筒を渡す時の女性の表情が気になりました。すごく険しくて男性のことを恨んでいるように見えました。反対に男性はケラケラと笑って嬉しそうに封筒を受け取って上着の内ポケットに入れました。だから、私は女性が男性に強請られてるのかと心配しました。けど、どうすることも出来なくて、申し訳ありません」

「マスターの責任ではないです。それより、その封筒はこれじゃないですかね」

山川がスマホを出して、陣内の部屋の屑入れにあった封筒の画像を開いてマスターに向けた。

「うーん、多分ですけど、これだった気がします」

「女性が封筒を渡していたのを見たのは一度だけですか」

「私が目にしたのは二度ですね。それ以外にも渡していたのかもしれませんが、ずっと見ていたわけではありせんので」

「そりゃそうですね。ところで、二ヶ月前から、何度くらいここに来店されてましたかね」

「さあ、どうでしょう。週に一回くらいのペースだったと思いますので、十回くらいは来てたんじゃないですか」

「その若い女性に心当たりはありますか」

「いやー、知らない女性でしたね。アイドルみたいに可愛い女性でしたので、一度見たら忘れられないと思います」

「若い女性が気になりますね」

山川が高木に向けて言うと高木は無言で頷いた。

「わかりました。すごく参考になりました。また、なにか思い出したことがありましたら、こちらまでご連絡お願いできますか」

山川がマスターに自分の名刺を渡した。

「わかりました。ところで、これ、何の事件の捜査なんですか」

「申し訳ありません。現在捜査中ですので、お答えすることはできません」

「そりゃそうですよね」

マスターが苦笑いを浮かべた。

「次、行くぞ」

高木がスッと立ち上がって喫茶店を出て行こうとしたので、山川は慌ててコーヒー代の精算をした。

桃農園

今日からのチラシの準備が段取りよく終わった。開店まで少し時間があるので、幸仁は休憩室で向日葵が朝入れてくれたコーヒーが入るマグボトルを口にした。

「おい、佐山」

自分と呼ぶ声に振り向くと、そこには、いつもはあまり見せない険しい表情をした最上店長が立っていた。

「はい」

サボるなど注意されるのかと思い、幸仁は身構えた。

「今から少し付き合ってくれんか」

店長の雰囲気がつもと違うなど幸仁は思った。店長のこんな表情はあまり見たことがない。サボっていると注意する時の表情とも、売上不振で部長に怒られている時の表情とも違う。

「今からって、店はどうするんですか」

「チラシの準備は終わったんだろ」

「ええ、まあ、終わりましたけど」

「じゃあ、後はみんなに任せておけばいい」

「今からじゃないとダメなんですか」

「ああ、今すぐだ。少しでも早い方がいい。あまり時間がないんだ」

店長は幸仁に目を合わそうとせず、視線を少し下げて言った。

「はい、わかりました」

幸仁は納得してなかったが、お世話になっている最上店長には逆らえない。

「悪いな」

店長が幸仁の肩をポンポンと叩いてきたが、その時も店長は幸仁と目を合わそうとしなかった。

「一体、どこに行くんですか」

幸仁が訊くと店長は下唇をつきだした。店長が困った時にする表情だ。答えにくいことのようなのだ。

「う、うん、そうだな、まあ、ちょっとドライブだ。ここから十分くらいのところに行くだけだ」

店長と一緒に行く場所で、ここから車で十分で思い当たるのは、このホームセンターショーマンの本社くらいだ。

幸仁がショーマンの本社に行ったのはこれまでに二回だけだ。一回目は正社員にしてもらうための面接試験の時で、その時も店長の車で連れて行ってもらった。二回目は採用が決まってから手続きのために一人で行った。

なぜ、今から本社に行くのだろうか。本社の人間から自分のことで、店長は何か小言でも言われているのだろうか。しかし思い当たることはない。どこかに転勤だろうか、それにしては店長の様子がおかしい。転勤くらいなら普通に話してくれればいいことなのにと幸仁は思った。

「用件は一時間くらいで終わりますかね」

幸仁は探りを入れて訊いてみた。

「う、うーん、そ、そうだな。そんなもんかな」

店長はまた下唇を突き出した。

「わかりました」

幸仁はマグボトルのフタをした。

「終わってから昼飯に旨いもんでも食いに行くか。奢ってやるよ」

店長が無理矢理笑みを張りつけているのがわかった。

「何か大事なことなんですか」

「行けば、わかるよ。じゃあ、行くか」

店長が車のキーを右手に持ってチャラチャラと鳴らした。

それから車に乗り込み出発したが、車の中で店長との会話はなかった。車のラジオから明るく透き通る女性の声が流れていたが、その内容は幸仁の頭には入ってこなかった。幸仁は店長の顔を覗き見たが、信号で止まった時もずっとフロントガラスに顔を向けたまま、幸仁の方を見ようとはしなかった。

車は大通りから左折し、道幅の狭い片道一車線の道を進んで行った。本社とは反対方向だった。今から本社に向かっているわけではなさそうだ。どうでもいいや、幸仁はそう思い、外に広がる田畑をぼんやりと眺めた。店長は車で十分と言っていたが、すでに倍の時間が過ぎていた。

窓の外を眺めていると、幸仁にとって懐かしい白い建物が見えてきた。車はその建物の前を通り過ぎて、その奥にある駐車場に入ってしまった。店長は無言のまま空いているスペースにバッグで車をとめた。

「着いたぞ、ここだ」

店長がエンジンをとめてフロントガラスに顔を向けたまま口を開いた。その声は掠れていた。

「店長、病院に何の用があるんですか」

建物には『駿河総合病院』と壁に緑の文字で大きく書いてある。ここは幸仁と向日葵が生まれた病院だ。

店長はしばらく車から降りようとはせず、フロントガラスに顔を向けたままだった。

「誰かのお見舞いですか」

「ああ、そうだ」

店長はまだフロントガラスに向いたままだ。

「誰なんですか」

店長はしばらく口を開かなかった。幸仁はじっと店長の横顔を見た。すると、店長の目が潤んでいるのがわかった。

「店長、誰なんですか」

幸仁がもう一度訊いたが、やはり店長からの返事はなかった。よく見ると店長の分厚い下唇が震えていた。そして、どんぐりのような大きな目から大粒の涙が頬を伝った。

「フン、フン」

店長の鼻を吸る音が車内に響いた。幸仁は今のこの重苦しい雰囲気には耐えられなくなった。車から降りようかと思って、ドアのレバーに手をかけた。

「あそこが五一〇号室だ」

店長のその声は微かに震えていた。幸仁が店長の方を見ると、店長は建物に向けて太い人差し指を向けていた。幸仁は店長が指をさす方向に視線をやった。

「五一〇号室ですか」

首を傾げながら幸仁がそう呟くと、店長が勢いよく助手席の方に体を向けた。真っ赤になった目で幸仁をじっと見つめてきた。店長は急に幸仁の右手を両手で握った。分厚くて汗ばんだ手が幸仁の右手の自由を奪った。

「親父さんだ」

「親父さん？」

「そうだ。親父さんが、今ここに入院している。だから、今から見舞いに行こう」

親父は怪我でもしたのだろうか、それとも病気だろうか。店長の様子を見ていると軽いものではない気がする。幸仁の心にズシンと重いものがのしかかった。しかし、はいそうですか、と言って親父の見舞いに行く気にはなれなかった。

「俺と親父はもう他人なんで、見舞いに行く義務はないんです。それに親父も俺に見舞いに来られても気分が悪いだけでしょうから、治るものも治らないですよ」

幸仁は五一〇号室の方に視線を向けたまま言った。

「今はそんなこと言ってる場合じゃない。お前と親父さんは誰がなんと言っても親子なんだよ。血が繋がった親子なんだ」

店長の目は血走り、幸仁の右手を握りつぶすくらいの力で握りしめていた。

「店長、とりあえず冷静になってください。それと、ちょっと痛いんで、この手を離してもらっていいですか」

幸仁は自分の心が大きく揺れているのを隠すために、意識して平坦な口調で言った。

「あ、あー、悪かった。スマン」

店長は幸仁の手を解放してからズボンの太もものところで手の汗を拭いていた。

「店長、親父がここの病院に入院していることはわかりました。けど、俺は見舞いには行きません。せっかく店長が誘ってくれましたが、やっぱり俺は親父とは二度と会いません。ほんと、すいません」

幸仁は頭を下げた。

「会うだけでも、会っておけ」

「いえ、会いません。店長だけで行ってください。俺は、このままここから歩いて帰ります」

車から降りようと助手席のドアのレバーを引いた。ドアを押して開けると外のムシムシした空気がパワーッと車内に入ってきた。車から左足を地面に着けたところで、幸仁の右肩に重たいものが載った。店長が幸仁の肩を右手で抑えつけていた。

「もう、長くないんだぞ」

店長の声が震えていた。幸仁は振り向いて店長の顔を見ると、店長の顔はグシャグシャになり、目から涙がポタポタと落ちていた。

「長くない？」

幸仁は呟くように訊いた。

「そうだ。親父さんは末期のガンで入院している。親父さんの意識があるうちに仲直りしておけ。もう時間がないんだ。縁起でもないことを言うようだが、今、親父さんに会っておかないと、二度と会うチャンスがないかもしれないんだぞ」

幸仁は自分の体が熱くなっていくのがわかった。呼吸の仕方がわからなくなり、口にする言葉が浮かばない。頭が真っ白になり苦しくて思考することが出来ない。気づいたら、店長の手を振り払い、助手席のドアを大きく開けて外へ飛び出していた。

「おーい」

店長の声が耳に飛び込んできたが、それを無視して病院の駐車場を走って出ていった。振り向くことは出来ず、何も考えることが出来ず、ひたすら走った。

子どもの頃に見た親父の笑顔とさっきの涙を流す店長の顔が頭から離れない。それを振り払うために走り続けた。しかし走っても走っても親父と店長の顔が交互に頭を過る。二人の顔が頭から消えるまで走り続けるつもりだったが、苦し過ぎてついに立ち止まった。膝に手をあて、地面に向かってゼーゼーと喉の奥から激しく息をした。汗と涙がポタポタとアスファルトに落ちた。親父が末期ガン。なんでなんだ。親父はいつも強く威張ってて頑固でムカつく親父でないとダメなんだよ。

さっき、店長といっしょに親父の見舞いに行くべきだったのだろう。頭ではわかっているが、幸仁はベッドに横たわっている弱々しい親父の姿を見るのが怖かった。

走ってきた道を振り返って見た。目の前に田んぼが広がり、その奥に駿河総合病院の白い建物が見えた。

「ウォー」と病院に向かって叫んだ。

そこから重い足を引きずりながら歩いた。どこをどう歩いてきたのか記憶にないが、顔を上げると目の前に懐かしい景色が広がっていた。市民プールと公園だ。小学生の頃に友達から聞いた話を思い出す。父親にここに連れてきてもらって、キャッチボールをしたり、プールで泳いだりしたと、月曜日の休み時間に自慢気に話す友達が羨ましかった。幸仁は親父にこういう場所に連れて来てもらったことはなかった。

親父は仕事ばかりしていた。親父に連れて行ってもらった記憶は親父が経営するスーパーミウラが契約している農園ばかりだった。朝早くから軽トラックに乗せられ、いろんな所に連れて行かれた。一番印象に残っているのは桃を栽培している塚原農園に連れて行ってもらった時のことだ。あの時は楽しかった。親父が格好よかった。もうあの頃には戻れない。

「今日、これから行く塚原農園さんはお前の爺ちゃんが見つけたきた農園だ。その農園の桃は甘くて美味しいんだ。幸仁も今日は収穫体験をさせてもらってから、美味しい桃を腹一杯食べさせてもらえ」

親父は軽トラックを運転しながら助手席に座る幸仁の坊主頭に大きな手を置いた。

あまり冷房の効かないガタガタ揺れる狭い車内だったが、親父と一緒にいるその空間はなぜか心地よかった。高速道路に入ると軽トラックのエンジンは激しい音をたてて苦しそうだった。車内にまで響くエンジン音のせいで、幸仁も親父も自然と声が大きくなった。何が面白かったのか覚えていないが、二人そろって車内で大笑いしたことを覚えている。

軽トラックはその後、高速道路を降りて川沿いの道を走っていった。徐々に道幅が狭くなり、窓から見える景色は緑が深くなっていった。幼い幸仁はガタガタと揺れる助手席で深くなっていく緑を眺めた。明るい時間帯なのに、緑がだんだんと深くなり、周りは薄暗くて、映画の世界のような少し不気味な感じがしたが、親父が隣にいて、恐怖心はなく幸仁は冒険しているようなワクワクした気分になった。山道を抜けると急に青空が見えて視界が開けた。軽トラックのフロントガラスから陽が差し込み、日差しの向こうに塚原農園の看板が見えた。

駐車場に軽トラックを入れ、エンジンを切ってから、親父は「幸仁、お疲れさん、着いたぞ」と言って、左手を伸ばし首の後ろを軽く揉んでくれた。その大きな手が心地よかった。逆光で親父の表情は見えなかったが笑っているのはわかった。

軽トラックから降りると、親父よりも真っ黒な顔をしたおじさんとお婆さんとお兄さんが真っ白な歯を出して迎えてくれた。その隣で白くて大きな犬が吠えていた。

「社長、遠いところまで足を運んでいただきありがとうございます。今年もよろしくお願ひします」

真っ黒な顔のおじさんが親父に右手を差し出した。

「こちらこそ、いつも美味しい桃をありがとうございます」

親父はおじさんに右手を出しておじさんと握手した。それからしばらく、親父は農園のおじさんと難しそうな話をしていた。その親父の姿がかっこよかった。

「社長の息子さんですか」

おじさんが親父の後ろに隠れるようにして立っていた幸仁の顔を覗きこんだ。

「ええ、息子の幸仁です。今日は、わがまま言って、息子を連れてきて申し訳ありません」

「いえいえ、私たちも社長の息子さんに会えるのを楽しみにしてましたよ」

おじさんが幸仁の顔を見て目を細めた。

「幸仁、いつも美味しい桃をうちの店に納品してくれている塚原さんだ。挨拶しなさい」

親父が幸仁の背中を押して前に出した。

「こ、こんにちは」

緊張してしまい、俯いたまま小さな声しか出せなかった。親父みたいに胸を張ってかっこよくは話せなかった。

「幸仁くん、今日は桃の収穫を手伝ってくれるんだってね。本当に助かるよ。頑張ってくれな」

おじさんが中腰になり、幸仁の頭を撫でた。

「はい、頑張ります」

幸仁は恥ずかしかったが、出来るだけ胸を張ってからペコリと頭を下げた。

「手伝うというより、我々は邪魔になるだけかもしれませんが、今日はよろしくお願ひします」

親父は幸仁の頭に手を置いて、おじさんに向かって頭を下げた。幸仁も一緒に頭を下げた。

それから、おばさんに桃の収穫のやり方を教えてもらいながら幸仁は桃の収穫を手伝った。しかし、桃を傷つけてしまったり、落としたりして、手伝ったというより、親父の言う通り邪魔をただけかもしれないと子ども心に思った。けど、農園の人たちは、すごく優しくかった。収穫が終わってから、幸仁は白い犬と野原を駆け回って汗まみれになった。

「幸仁くんも休憩しましょうか」

おばさんが幸仁を呼びに来ると、白い犬はおばさんに向かって飛び跳ねていった。

「サクラ、幸仁くんに遊んでもらってよかったわね。だけど、幸仁くんはこれから休憩だからね。遊ぶのはもうおしまいよ」

おばさんが白い犬の胸の辺りを撫でながら言うと、白い犬は「ワン」と吠えておばさんの前にお座りした。

「サクラ、今日はいい子ね。幸仁くん、お父さんは先に家の中で休憩しているから、幸仁くんもそろそろ休憩しましょうか」

おばさんがそう言って歩きはじめた。幸仁は「はい」と言ってついて行った。サクラもおばさんの横を歩きながらついて来た。

「幸仁くん、今日は遠いところからありがとうね」

おばさんは歩きながら幸仁に顔を向けて真っ黒な顔をクシャッとして笑った。幸仁は照れてしまい言葉を返すことなく笑みだけを返した。おばさんに連れられて塚原農園の家が上がると、冷房がきいていて体から汗がスッと引いた。

「おお、幸仁も来たか。ここに座れ」

親父が自分の隣に敷いてある座布団を手のひらで叩いた。親父とおじさんたちはテーブルの周りに胡座をかいて座っていた。

幸仁は「うん」と言って親父の隣に正座した。

目の前の大きな皿の上には艶々と輝く桃が丁寧に並べられてあった。幸仁は座った途端にゴクリと喉を鳴らした。おばさんがその様子を見てニコリと笑った。幸仁は恥ずかしくて俯いてしまった。

「今年の出来もよさそうですね」

親父が日に焼けた顔から白い歯を覗かせていた。

「はい。おかげさまで、今年も美味しく甘い桃ができましたよ」

おじさんは胸を張った。

「じゃあ、遠慮なくいただきます」

親父はそう言うとともに、皿から桃を一切れ爪楊枝に刺して口に放り込んだ。咀嚼しながら何度も頷いて、「うん、やっぱり旨い」と言って、おじさんに笑みを向けた。

「いくらでも切りますから、腹一杯食べて帰ってくださいな」

おばさんは陽に焼けた顔をクシャクシャにした。

「幸仁も食べてみろ。甘くて旨いぞ」

親父が幸仁の坊主頭をくしゃくしゃと撫でた。

「うん、いただきます」

幸仁も皿に手を伸ばし、桃を一切れ爪楊枝に刺して口に入れた。口に入れた瞬間、甘さの中に微かな酸味のある果汁が口いっぱい広がった。これまでに食べたことのない最高に甘くて美味しい桃だった。それから幸仁は遠慮することなく腹一杯桃を食べた。

「父ちゃん、僕は桃が大好物になった」

幸仁は帰りの軽トラックに乗り込む前に親父の顔を見上げて言った。

「そうか、それは良かった。俺はスーパーミウラを大きくする。将来はそれを幸仁が継いで、この美味しい桃をお客さんに届け続けてくれな」

親父は嬉しそうな顔をして、幸仁の坊主頭をクシャクシャと撫でた。

「うん」と元気に返事をした。

思い出ただけで、あの時の桃の甘さと微かな酸味が口の中に広がる気がした。同時にあの日の軽トラックの中で幸仁に見せてくれた親父の笑顔や農園の人と話しているカッコいい親父の姿が頭に浮かんだ。

親父とは塚原農園以外にもブドウ農園やイチゴ農園、田植えや稲刈りにも連れて行ってもらった。幸仁の幼い頃の親父は仕事で忙しそうだった。

親父に公園やプールに遊びに連れて行ってもらった記憶はないが、代わりに、農園などに連れて行ってもらった記憶は楽しいものばかりだった。

「幸仁という名前は周りの人を幸せにできる人間になってほしいと思って名付けたんだぞ」

親父が塚原農園へ向かう途中、高速道路を降りてから軽トラックの中で話してくれた言葉を思い出した。

「周りの人を幸せにする？」

「そうだ。幸仁にはまだ難しいかな」

親父がフロントガラスに顔を向けたまま言った。

「そんなことないよ。ちゃんとわかってるよ」

幸仁は口を尖らせて言った。

「そうか、それならいい。今から行く塚原農園の人たちは、自分たちの収穫した桃を食べた人たちに幸せを感じてほしいと思って、一生懸命に桃を育てているんだ。幸仁もそんな農園の人たちの心を感じてほしいんだ。心のきれいな優しい人たちばかりだからな」

あの日、塚原農園の人たちは幸仁に優しく接してくれた。甘くて美味しい桃も食べさせてくれた。親父の言う通り、塚原農園の人たちといると幸せな気分になって、楽しい時間を過ごせると思った。親父は幸仁にも塚原農園の人たちのように、周りの人を幸せにする人間になってほしかったんだろう。

やはり、店長といっしょに見舞いに行くべきだった。なぜ素直になれなかったんだ。これからどうしたらいいんだ。今から店長に電話して謝ろうか、それともこのまま職場に戻って仕事をしようかと頭を悩ませた。しかし、結局そうする勇気は持てなかった。幸仁は今日はこのまま早退させてくれと職場に電話をした。

夕方まで、そこら中を徘徊した。どこをどう歩いたのか記憶はない。家に着くと、向日葵が「おかえりなさい」と抱きついてきた。幸仁は、はじめて向日葵が抱きついてくるのを払った。

向日葵は目を丸くして、幸仁をじっと見ていた。向日葵には親父が入院してることは絶対話せない。

元妻

コインパーキングに車をとめ、フロントガラスから覗くと、これから向かうマンションが聳え立って見える。建物の麓にはマンションを見上げるように緑豊かな樹木が広がっている。立地といい建物といい安月給の山川には無縁なところだなと思った。

「うわー、なんか、陣内さんとは真逆の生活を送ってるって感じですね」

山川はエンジンを切って瀟洒な建物をフロントガラス越しに見上げた。

「フン、それより何号室だ。早くせんと時間がないんだぞ」

高木は機嫌がいいのか悪いのかよくわからない。牧野書房に続いて西田珈琲でも有力な情報が仕入れられたので、ご機嫌かと思いきや、今は不機嫌そうな顔をしている。

「えっと、2〇〇1号室です」

「アポはちゃんと取れたのか」

「はい、三十分くらいならお話しできるとのことでした」

「そうか。陣内さんの部屋に鑑識が入るよう依頼したのか」

「依頼の電話しましたよ。高木さんも隣で聞いてたじゃないですか」

「知るか。そんなことより早く行くぞ」

高木が助手席から降りて先を歩き出した。山川も慌てて車から降りて、高木の背中を追いかけた。追いかけている間に、「なんなんだよ」と心の中で舌打ちをした。

毎日のように愛用している百円均一のマグカップとは明らかに物が違う。貝殻のように薄くてきらびやかな光を放つティーカップは、山川のごつくて大きな手には似合わない。高木の顔にもこのティーカップは全く似合わない。持つだけで壊れてしまいそうな華奢なティーカップを山川は恐る恐る持ち上げた。ガクガクと手を震わせながら、ティーカップを口元に近づけると爽快なミントの香りが鼻に届いた。息を吸い込みその香りをより深く味わってみると、気分が落ち着いた気がした。そして、生まれはじめてハーブティを一口味わった。

「お忙しいのに申し訳ありません」

山川はティーカップを置いてから五味良子に頭を下げた。

「そんなに忙しくしてるわけじゃないですすからいいんですけど、ただ、陣内のことと言われましても離婚して二十年になりますし、お話できるようなことは、特にございませんよ」

良子は高木と山川の前に腰を下ろした。

「陣内さんが殺されたことはご存じでしたか」

「ええ、ニュースで知りました」

良子がティーカップを口にした。彼女がティーカップを持つと絵になるなど山川は捜査とは関係ないことを思った。高木に気づかれたら睨まれるだろう。

「知って、どう思われましたかな」

高木が彼女に質問した。

「どうと言われましても、ビックリしたとしか言いようがありません」

「最近、陣内さんに会われましたか」

「いいえ、会っていません」

「最近、陣内さんがこの辺りの本屋や喫茶店に姿を見せているのですが、あなたとは会わなかったんですか」

「ええ、会っていません」

「じゃあ、陣内さんはたまたまこの辺りで買い物して喫茶店に行ったということでしょうか」

「たまたまと言いますか、陣内の今の住まいは尼崎ですよ、ここは西宮です。すぐ隣ですから、別に尼崎の人が西宮の本屋や喫茶店に行っても、別に不思議なことじゃないですよ。ここが他府県ならわかりますけど。刑事さん、変な勘ぐりはやめてもらえますか」

良子の目尻が吊り上がった。山川は無言で頭を下げた。

「若いのが失礼しましたな。では、私からもあなたに質問させてください」

高木が引き継いだ。

「何でしょう？」

良子は口元を歪めて、掛け時計に視線を向けた。良子の機嫌を損ねたので、予定より早く切り上げられるかもしれない。

「陣内さんと離婚した時のことをお訊かせいただけませんか」

良子が呆れたように肩をダランと落とした。

「そんな昔の話が捜査の役に立つんですか」

良子が訝しげな表情を浮かべている。山川も良子と同じ意見で、そんな昔のことが、今回の捜査に役に立つものかと思った。ただでさえ、良子の機嫌を損ねているのに、今回の事件とは全く関係ないそんな質問をして火に油を注ぐだけじゃないかと思った。

「役に立つかはわかりませんが、被害者の情報は少しでも多い方がいいですよ」

高木が珍しくにこやかな表情でしつこく粘った。

「で、刑事さんは離婚した時の何が知りたいんでしょうか」

良子は高木にきつい視線を向けた。

「あなたと陣内さんが離婚した理由です」

「離婚した理由ですか」

良子が眉間に皺を寄せた。

「ええ。あなたは今の五味会長の長女で今の社長とは兄妹です。あなたと結婚した陣内さんは、当時の社長があなたの父親だったおかげで若くして部長になれた。あなたと離婚していなければ、今頃、陣内さんは現社長のあなたのお兄さんと共に経営陣になっていたでしょうな」

「そうだったかもしれませんね」

良子の表情は冷めていた。

「なのに、陣内さんは離婚して仕事も辞めてしまった。陣内さんがあなたのような魅力的な女性と五味商事の地位を簡単に捨ててしまうとは思えないんですよ。だから、離婚はあなたの方から言い出したんじゃないですか」

「ええ、そうです。わたしから陣内に離婚してくれと言いました」

「やはり、そうでしたか。何故、あなたは離婚を決めたのですかな」

「それと今回の事件とは全く関係ないことですよ。それを話さなければなりませんか」

「私は引っかかっていることが一つあります」

高木が人差し指を立てて良子に向けた。

「引っかかっていること？」

良子はまた掛け時計に視線を向けた。そろそろ帰ってくださいと言われそうだ。

「もしかするとですが、私が引っかかっていることが今回の事件と繋がっているかもしれないんです。あなたにご迷惑はおかけしません。過去の嫌な思い出で、言いにくいことかもしれませんが、お話しいただくと大変ありがたいのですが」

高木は穏やかな表情を浮かべながら粘った。

「別に言いにくいことなんてありません。陣内が一方向的に悪いんですから」

「では、話していただけますか」

「いいですけど、ほんとに事件とは関係ないと思うんです。それでもよろしければお話しします」

「お願いします」

高木は慇懃に頭を下げた。

良子は「わかりました」と言って、目を閉じた。それから一つ呼吸して話してくれた。「当時のわたしは、あの人のことをイケメンで仕事もできる素敵な男性だと思いこみ好きになりました。なので、わたしの方から交際を申し込んで、三ヶ月ほど付き合ってから結婚しました。ですけど、死んだ人を悪く言いたくはないですけど、本当の彼は中身は空っぽでどうしようもない男だったんです。当時のわたしは世間知らずでそんなことも見抜けませんでした」

「なるほど、陣内さんは中身は空っぽでしたか。あなたがそれに気づいたきっかけは何だったんでしょうか」

「ある日、兄からあいつはどうしようもない男だから別れた方がいいと言われました。わたしがなぜかと訊くと、仕事はいい加減で、嘘をつく。女性にもだらしがないからだと言ったんです」

「お兄さんの言葉を信じて別れたわけですか」

「いいえ、仕事のことはさておき、わたしも陣内さんが女性にだらしがないことは、何となくわかっていましたし、別に遊びならいいかなとも思っていましたので、それですぐに離婚しようとは考えていませんでした」

「それがなぜ離婚すると決めたんですかな」

高木が前のめりになった。

「兄はわたしに話すべきかずっと悩んでたようですが、兄からあることを聞かされて別れる決心をしました」

「あることとは何ですか」

「仕事、女性関係などで不信に思っていた兄が陣内に興信所をつけたんです。その時、兄は会社のためとわたしのためにだと言ってました」

良子はそこで呆れたように鼻で笑った。

「興信所の報告はどういったものでしたか」

「陣内の仕事はいい加減を通り越してました。兄はそれに気づいていたので、興信所を頼んだんだと思います」

「仕事がいい加減を通り越していたとは具体的にどういったことでしょうか」

「横領をしていたようです」

「ホォー、そうでしたか」

高木が何度も首を縦に振った。

「そして、やはり浮気もしていました」

「あなたは先ほど浮気くらいはいいとおっしゃってましたが」

「ええ。ただの浮気くらいならいいとは思っていたんですけどね」

当時のことを思い出したからなのか、急に良子の顔が歪んだ。

「ただの浮気じゃなかったわけですか」

高木の目が鋭く光った。

「ええ。陣内はその浮気相手を妊娠させてしまったようです。陣内はその女性に子どもを墮ろすようにだけ告げて、そのまま女性を捨てて逃げたそうです」

「やはりそうでしたか。それで離婚を決めたわけですか」

「ええ。他人の旦那に手を出した泥棒猫に対しての怒りもありましたけど、それ以上に彼女にそんな仕打ちをした陣内が許せなくて、人間として最低だなど思いました。この先、彼と一生を共にする気にはなれませんでしたので、離婚すると決めました」

「それで、陣内さんは仕事を辞めさせられたわけですか。それらが事実なら自業自得ですね」

殺されてしまった陣内だが、山川は彼に対して少し怒りを覚えた。

「ところで、妊娠した陣内さんの浮気相手の女性についてわかりますか」

「ええ、名前くらいならわかります。兄からももらった興信所の報告書は今でも残っておりますから」

「是非、それを拝見させてください」

高木の声に力がこもった。

「わかりました。報告書をお持ちしますので、少しお待ちください」

「よろしく申し上げます」

高木が頭を下げた。良子が席を立てて奥へと消えた。

「陣内さんの当時の浮気相手の女性が今回の事件と関係しているんですか」

山川が高木に小声で訊いた。

「ああ。その浮気相手の女性がというより、その時、妊娠した子どもだな」

「子どもですか。でも、さっきの話だと、陣内さんは浮気相手の女性に子どもを墮ろさせたんじゃないかなかったですか」

「陣内さんは子どもを墮ろすように告げて、その女性を捨てて逃げている。その後、女

性が本当に子どもを墮ろしたのか、それを調べる必要がある」

「そうなんですか」

山川は首を傾げた。

「お待たせしました。こちらです」

良子が戻ってきて、興信所の資料をテーブルに置いて、高木と山川の方に滑らせた。

山川は、「拝見します」と言って資料を手元に寄せた。その資料は少し色褪せ、二十年の年月を感じさせるものだった。資料を手にとるとずっしりとした重みを感じた。当時、良子はこの報告書を実兄から見せられてどんな気持ちだったのだろう。この表紙にある染みは、もしかしたら彼女の涙なのかもしれないと山川は思った。

「おい、見せろ」

高木が右手を出したので、山川は「はい」と言っ、高木に報告書を手渡した。

高木は山川から報告書を受け取ると勢いよくページを捲った。そして、あるページで捲る手が止まった。じっとそのページを睨むように見ている。

「おい、この名前をひかえろ」

高木が資料をテーブルに置いて、そのページのある文字を人差し指でさした。

「わかりました」

山川は高木の人差し指の先を見た。そこには『佐山孝恵』と記載されていた。この女性が陣内の不倫相手の女性のような。それを見た高木はすごく興奮しているが、この女性が今回の事件とどうして関係があるのか、山川にはピンの来ていなかった。

五味良子のマンションを出てから、コインパーキングまでの短い距離を高木は山川が追いつけないくらいの速さで歩いた。

「高木さん、どうしたんですか」

山川が追いついて高木に訊いた。

「繋がったな」

「何が繋がったんですか」

「佐山孝恵がだ」

「それは、陣内さんと佐山孝恵は不倫の関係だったんですから、元々、陣内さんと佐山孝恵は繋がってますよね」

「そんなこたあ、わかってる。西田珈琲のマスターの言っただ通りかもしれん。いや、多分間違いない」

高木はコインパーキングに入り車の前で立ち止まった。

「マスターの言っただ通りですか」

「そうだ。マスターの言っただこと覚えてるか」

「ええ、一応」

山川が車のキーを開けた。

高木は「一応かよ」と言っ、舌打ちをしてから、助手席に乗り込んだ。山川も運転席に乗りこんだ。

「西田珈琲のマスターは、陣内さんと会っていた若い女性、それと連れていた子どもの

関係を最初はどう思ったと言っていたか覚えてるか」

「確か、おじいさんと娘と孫かと思ったと言っていました」

「それだ」

「どういうことですか」

山川は首を傾げた。

「どういうことですかって、お前は相変わらず何も考えてねえな」

「すみません」

「急いでるんだ。ボーッとしてないで、早くエンジンをかけろ」

山川は「わかりました」と言って車のエンジンをかけた。

「陣内さんの部屋にあったレシピ本の著者だ。覚えてるな」

覚えてるも何も、山川はレシピ本の著者の名前を見ていなかった。

「いえ、覚えていません」

「覚えていませんじゃなく、見ていませんでしたらろ」

山川が「すみません」と言うと高木は「フン」と鼻を鳴らした。

「あのレシピ本の著者は佐山向日葵となっていた。佐山孝恵と同じ佐山姓だ。佐山って姓はそうあるもんじゃない」

「それって、もしかして」

「ああ、佐山向日葵は、佐山孝恵と陣内さんとの間にできた子どもかもしれん。ただ、佐山向日葵は子どもを連れていた。もし、結婚して姓が変わっていたのなら、佐山向日葵の旦那の方がそうなのかもしれない」

「佐山孝恵はお腹の子どもを墮ろしたんじゃないんですか」

「陣内さんは佐山孝恵に子どもを墮ろすように告げただけだ。佐山孝恵が墮ろさずに生んだ可能性は十分に考えられる」

「高木さんはそれで五味良子の離婚の理由を知りたかったわけですか。佐山向日葵についてすぐに調べないといけませんね。署に戻りますか」

「いや、その前に牧野書房に行け」

「牧野書房ですか」

「ああ、そこで佐山向日葵のレシピ本を買って西田珈琲に行く」

「また戻るんですか」

「レシピ本には佐山向日葵の顔写真が載っていたはずだ。それを西田珈琲のマスターに見てもらおう」

「わかりました」

「それと、署に電話して、誰かに佐山向日葵について調べてもらってくれ。旦那の情報もほしい。結婚して佐山向日葵が佐山姓になったのなら、旦那の方が陣内さんの子どもかもしれんからな」

「西田珈琲で陣内さんと会っていた若い女性が佐山向日葵で間違いなかったですね。でも、どうして陣内さんは佐山孝恵が墮ろしたはずの自分の子どもが生まれていることを知ったんでしょう」

「そこは、まだわからん」

「でも、佐山向日葵は陣内さんに強請られて現金を渡していたのは間違いなさそうですね。それで、飲んだ帰りの陣内さんに現金を要求されて殺してしまったってところですか。犯人は佐山向日葵で間違いなさそうですね」

「てめえは、相変わらずバカだな。そんな単純なもんじゃねえ。今わかったのは陣内さんが西田珈琲で会っていた女性が佐山向日葵で、その佐山向日葵、もしくは佐山向日葵の旦那の母親が二十年前の陣内さんの浮気相手だった佐山孝恵の可能性が高いとわかったただけだ」

「高木さんは陣内さんを殺害したのが佐山向日葵じゃないと思ってるんですか」

「そうだな、佐山向日葵に話をきく必要はあるが、陣内さんを殺害したのが佐山向日葵だとは思えんな」

「西田珈琲で強請られてたのは佐山向日葵で間違いありませんよ。高木さんは何が引っかかっているんですか。教えてくださいよ」

「このレシピ本を見れば、佐山向日葵の犯行でないことはわかるだろ。何故、お前はそれがわからんのか、こっちが教えてほしいわ」

「すみません」

「レシピ本の著者の欄に佐山向日葵のプロフィールが詳しく書いてある。もう一度、そこをよく見てみる」

「著者のプロフィール欄ですか」

山川はレシピ本を手にとって、著者のプロフィール欄を見た。そこには、佐山向日葵の顔写真と出身地や生年月日、身長、体重といった内容が書いてあるだけだった。山川は首を傾げるしかなかった。これで何がわかるんだろうか。

「まだ、わからんのか」

「はい、わかりません」

高木は呆れた表情を浮かべてから説明をはじめた。

「陣内さんは右頭頂部を公園にあったブロックで殴られている。右頭頂部だ」

高木が自分の右頭頂部をおさえた。

「陣内さんの身長は百八十五センチだ。身長が百五十五センチの佐山向日葵が百八十五センチある陣内さんの右頭頂部を殴って即死させられるか。それに鑑識の報告書には現場にあった下足痕の足のサイズは二十八センチとなっていた。佐山向日葵の下足痕とは考えにくい」

「まあ、確かにそうですね」

「お前は鑑識の資料やこのレシピ本にしっかり目を通してないから、わからんのだ」

「じゃあ、佐山向日葵は結婚してますから、強請られていることを旦那に相談して、旦那が陣内さんを殺ったとか」

「そうだな。その可能性はある。そこに佐山向日葵の旦那の情報はあるのか」

高木が山川が机に広げてある取り寄せた資料に顎を向けた。

「ちょっと待って下さい」

山川は資料に視線を落とした。

「どうだ」

「ありました。佐山向日葵の旦那は佐山幸仁で旧姓が三浦幸仁ですね」

「旧姓？ 男が結婚して佐山になったわけか」

「そのようですね。めずらしいですけど、最近は昔と違って、色んなパターンがあるみたいですよ。佐山向日葵が天涯孤独だからですかね」

「そうすると、佐山向日葵が佐山孝恵の子どもの可能性が高くなったな」

「そういうことになりますね」

「だが、さっきも言ったが佐山向日葵が陣内さんを殺害したとは考えにくい。旦那について教えてくれるか」

「えっとですね、三浦幸仁の家族は父親が三浦孝士で、母親は三浦翔子です。幸仁は一人息子のようですね」

山川がそこまで言った後、「えっ、マジか」と声を上げた。

「どうした」

「佐山幸仁の父親の三浦孝士はスーパーミウラの社長ですよ」

「スーパーミウラって、この辺りで見かけるあのスーパーミウラか。佐山幸仁は一人息子なのにスーパーミウラの後を継がなかったのか」

「ちょっと待って下さいよ。俺、すごいことに気づいたかもしれません。今から下の受付に行ってきますから、高木さんちょっと待ってて下さい」

山川は勢いよく立ち上がり、部屋を飛び出して階段を駆け下りた。

「おい、どうした」という高木の声を山川は完全に無視した。

自首

「じゃあ、行ってくる」

幸仁は大きく息を吸って胸を膨らませた。

「うん、頑張ってるね」

向日葵が幸仁の目をじっと見つめた。笑みを浮かべているが、向日葵も今は緊張しているはずだ。それを出さず、笑みを浮かべてくれるところが彼女のいいところだ。幸仁はこれまでに何度もこの笑顔に助けられた。

向日葵の肩に手を置いて彼女の目を見つめてから、幸仁は踵を返した。目の前の白いドアを見つめ、右拳をギュッと握った。握った拳の中がジワリと汗ばんでいくのがわかる。目の前のドアをノックするだけのことなのに、それが出来ないでいた。背中に向日葵の視線を感じ、ゴクリと唾を飲み込んでから、覚悟を決めて、トントンとドアをノックした。

昨日、最上店長にこの病院に連れて来られた。その時、親父が末期ガンだと聞かされた。店長は時間がないから早く親父と仲直りしておけと言った。幸仁は頭が混乱して、そこから逃げ出してしまった。

今、見舞いに行かないと一生後悔するだろう。それは幸仁もわかっていたが、気持ちの整理がつかなかった。店長の車から飛び降り、仕事に戻る気にもなれず、そのまま早退して、行くあてもなく町を徘徊した。夕方になり自宅に帰ってからも幸仁は親父のことが頭から離れなかった。向日葵は幸仁の異変に気づいて、何があったのかと、しつこく訊いてきた。幸仁は最初はごまかしていたが、向日葵には通用しなかった。いつもとは違う向日葵の迫力に圧倒されて、幸仁は涙を堪えて本当のことを話した。

「あたしと斗真もいっしょに行くから、明日、お義父さんのお見舞いに行きましょう」

向日葵は親父が癌で入院していると聞かされても驚く様子はなく、冷静で落ち着いた口調で幸仁を説得した。

「いや、やっぱりやめとく」

幸仁はそれでも見舞いに行く気になれなかった。意地をはってる場合じゃないことはよくわかっている。しかし、こっちが勘当された側だから、親父の方から勘当を取り消すまでは会いに行くわけにはいかない。勘当された時点で親父とおふくろとは死別したんだと思えばいいんだ。そうすれば、今、親父が末期ガンだからと苦しむ必要はないはずだ。

「いい加減、大人になってよ。こんな時に意地はってどうするのよ」

向日葵がめずらしく目くじらをたてて怒り出した。向日葵に抱かれていた斗真がビックリして泣き出した。

「お、おい、斗真がビックリしてるぞ」

幸仁は向日葵の迫力に圧倒された。

「斗真はビックリしたんじゃない。斗真もユキくんにも怒ってるのよ」

斗真の激しい泣き声を聞き、向日葵のきつい視線を受け、そこで、幸仁は見舞いに行くことにした。

病室から「はい」というか細い声がしたので、幸仁は汗ばんだ手でドアノブを回した。ドアを少し開けて、その隙間から恐る恐る中を覗くと、椅子に座っているおふくろと目が合った。

おふくろの目が大きく見開いたのがわかった。幸仁は目を逸らし俯いてしまった。

「幸仁、よく来てくれたわね」

懐かしい声を聞いて、顔をあげると、おふくろは椅子から立ち上がって笑みを浮かべた。立っているおふくろの姿を見て、体が一回り小さくなった気がした。幸仁に向かって笑みは浮かべているが、顔色は青白く目は真っ赤だ。キンキンとヒステリックに声を上げて、幸仁を怒っていたおふくろとは別人のようだった。幸仁の胸がジンと傷んだ。おふくろの立つ横にはベッドがあり、そこに親父がいるはずだが、今のこの位置からだとも衝立が邪魔をして見えない。もう一歩入れれば親父の姿も見えるのだろうが、まだ、その勇気がなかった。

「幸仁、来てくれたのか」

衝立の向こうから親父の声がした。掠れて聞き取りにくい声で、あの日、幸仁に向かって「出ていけ」と怒鳴った迫力ある声とは別人のようだが、親父の声に間違いなかった。幸仁は返事をしなかった。

「幸仁」

また、親父の声が聞こえた。最初の声より聞き取りやすく大きな声だった。親父と顔を合わせるのが恐かったが、ここまで来てそのまま帰るわけにはいかない。幸仁はもう一歩奥に入り、衝立の向こうを覗いた。塚原農園に行った日のことを思い出して、必死で笑みを作った。

「親父、久しぶり」

声が上がらず震えた。泣き出しそうで、それだけ言うのが精一杯だった。親父の顔はまだ見ることができず俯いていた。

「元気そうだな。ゴホン、ゴホン」

親父の声は掠れて苦しそうだった。

幸仁は「ああ」と短く言ってから、そこではじめて親父に顔を向けた。目の焦点が合わないのか、涙のせいなのか、視界がボヤけて親父の顔がはっきり見えなかった。幸仁は目頭をおさえてから、もう一度親父の顔を見た。瞬きを繰り返すうちに、親父の顔がはっきりと見えてきた。

久しぶりに見た親父の顔だった。笑みを浮かべていたが頬はげっそりこけて、顔色はドス黒く、塚原農園で見た陽焼けした赤みのある艶やかな黒さではなかった。

「よく来てくれたな」

ベッドに座っていた親父が幸仁に右手を差し出した。パジャマの裾から見えた腕は、筋肉が盛り上がり血管の浮いた幸仁の知っている親父の腕ではなかった。枯れ枝のような腕を見て、胸が痛くなったが、幸仁は親父の差し出した右手を握った。

「心配ばかりかけやがって」

親父は握る手に力を入れたが弱々しかった。幸仁が右手に力を入れると、親父の右手が壊れそうな気がして、そっと優しく握っていた。親父の目を見ると涙を浮かべていた。

「こっちの方こそ心配してるよ」

幸仁は涙が堪えきれず、左手で目頭をおさえた。

「ハハハ、大丈夫だ。幸仁に心配されるようじゃ、俺も終わりだな」

「俺、親父に謝らなければいけない」

この後、幸仁は親父に頭を下げて向日葵と斗真を紹介し、家を飛び出したことを詫びようと思った。

「幸仁が謝ることはない」

親父が首を横に振った。微かに笑みを浮かべ、優しい表情だった。

「いや、だけど、……」

幸仁がそこまで言うと、『トントン』とドアをノックする音がした。幸仁は話を中断して、ドアの方を見た。

おふくろが「はい」と言って首を傾げて、幸仁と親父の顔を交互に見た。親父も首を傾げた。

幸仁も誰が来たのかと首を傾げた。休憩室で待たせている向日葵なのかと思ったが、まだ早過ぎる。向日葵と斗真の登場は幸仁が親父に謝った頃を見計らって病室に来てもらう予定にしていた。

ドアがゆっくりと開いてドアの隙間から覗く顔はやはり向日葵ではなかった。

「失礼しますよ」と二人の男が病室に入ってきた。全く見知らぬ男たちだった。おふくろを見ると、おふくろも知らない男たちのようで首を傾げていた。

「どちら様でしょうか」

おふくろが男たちに訊いてから親父の顔を見た。親父は、男たちのことを知っているのか、彼らを見た後、唇を噛みしめて目を伏せた。

「家族団欒中に申し訳ないですな」

二人のうち年配の男の方が言った。申し訳ないと言いながら、そういう態度には見えなかった。横柄な感じで、幸仁は苛立った。

「なんなんですか、あなたたちは」

おふくろも苛立ったのか、おふくろらしいキンキンとした声をあげた。幸仁は子どもの頃、この声でよく怒られた。

「あなたが三浦孝士さんですな」

年配の男はおふくろの言葉を見向きもせず親父の方に体を向けた。

親父は「ええ、そうです」と頷いた。

「申し訳ないですが、お二人は少しの間、席を外してもらえますかな」

年配の方が幸仁とおふくろを順に見て言った。

「いや、外さなくていい」

親父がきつい口調で言った。

「いいんですか」

若い男の方が親父の顔を覗きこんだ。

「ええ、二人は私の家族ですから」

親父はそう言って深い呼吸をした。

そこで、ドアをノックする音がして、全員が一斉にドアの方を見た。今度は向日葵がドアの隙間から顔を覗かせた。向日葵は病室にいる全員に視線を走らせ、見知らぬ男たちがいることに目を白黒させていた。

「もしかして、あなたが佐山向日葵さんですか」

若い方の男が向日葵に訊いた。

「あっ、はい、そうですけど」

「ちょうどよかった。あなたも中に入ってください」

若い方の男がドアを開けて、向日葵を中に招いた。斗真を抱いた向日葵が恐る恐るといった感じで中に入ってきた。

「あなたたち、一体、なんなんですか。他人の病室いきなり入ってきて、失礼じゃないですか」

おふくろは少し切れ気味だった。幸仁も見知らぬ男二人が入ってきて、我が物顔でいることに切れそうになった。それも、よりによって、これから親父に頭を下げて許してもらい、向日葵と斗真を紹介しようとする大切な時にだ。

出て行けと怒鳴ってやろうかと思った時、若い方の男が上着の内ポケットから何かを取り出しておふくろに見せた。

「すいません。実は私たちはこういう者です」

おふくろがギョッとした顔を浮かべてから親父を見た。親父は黙ったまま天井を見上げてから目を閉じた。

病室に現れた二人は捜査一課の刑事で年配の方が高木、若い方が山川と名乗った。そして、二人は親父に訊きたいことがあると言った。

「三浦孝士さん、単刀直入にお伺いします」

山川が言った。

「はい」

親父は目を閉じたままだった。

「あなたは陣内晃さんという男性をご存知ですよ」

幸仁は知らない名前だった。隣に立つ向日葵を見ると、その名前を知っているのか、なぜか俯いて唇を噛みしめていた。

「ああ、その前に、あなたに確認したいことがあるんですわ」

高木が割って入った。

「はい、なんでしょうか」

親父が訝しげな表情で高木を見た。高木はニヤリと笑みを浮かべた。

「あなたは警察署の受付の前で倒れて、ここに運ばれたんでしたな」

「はい、そのようです。倒れてからの記憶はありませんが」

「なぜ、あなたは警察署に行ったんですかな」

高木が訊くとおふくろが前に出た。

「わたしも不思議だったわ。警察署で倒れて、ここに運ばれたって聞いたから。あなた、なぜ、警察署になんか行ってたの」

おふくろが親父の顔を覗きこんだ。親父は唇を噛みしめていた。

「まず、警察署に行った理由を話してもらえませんか」

高木が親父の顔を覗きこむが、親父は口を開きそうになかった。高木はしばらく親父が口を開くのを待っていたが、最後は諦めたようで頭を掻いてから続けた。

「話してもらえそうにないですな。まあ、いいですわ。後で、ゆっくり聞かせてもらいますかな」

高木がそう言って一歩後ろに下がって、山川に進めろといった感じで顎を突き出した。今度は山川が一歩前に出てから病室にいる全員を見渡した。

「実は、現在、私たちはある殺人事件の捜査をしています」

山川の言葉を聞いて、おふくろの口から「えっ、殺人」と声が漏れた。

「それがうちの主人となにか関係があるんでしょうか」

おふくろが不安そうな表情を浮かべて山川に訊いた。

「殺されたのは陣内晃さんという男性です。公園で何者かに右頭頂部を強打されて殺害されました。三浦孝士さん、あなたは陣内晃という男性をご存じですよ」

山川はおふくろの問いに答えず、親父に質問した。親父は相変わらず言葉を発しない。

「陣内晃さんについて、三浦孝士さんと佐山向日葵さんにお話しが訊きたいんですが、お時間取っていただけませんか」

山川は続けた。

「あなた、どういうことなの」

おふくろが親父の肩に手を置いて顔を覗きこんだ。

「向日葵、どういうこと？」

幸仁は親父と向日葵の顔を交互に見た。

誰もが口を閉じて、病室内は暫く沈黙が続いた。沈黙を破ったのは親父だった。親父から信じられない言葉が飛び出した。

「陣内晃を殺害したのは私です。申し訳ありませんでした」

親父はそう言うと、ベッドに座ったまま体を二つに折った。幸仁は親父の放った言葉の意味をすぐに理解できなかった。親父が今発した言葉を反芻した。殺害したのは私ですと言った。殺害したのは私、殺害したのは私、幸仁は頭の中でその言葉を何度も繰り返したてから、ハッと親父の顔を見た。

「親父、何言ってるんだ。殺害したってどういうことだよ」

幸仁の頭は混乱した。

「あなた」

おふくろもわけがわからないという様子で何度も首を横に振っていた。

「お義父さん」

向日葵が幸仁の横で泣き出した。そして斗真まで泣き出した。

「やはり、そうでしたか。でしたら、今から陣内晃さんの殺害方法や動機について詳しいことを訊かせてもらえますかな」

高木は混乱する病室の中にも関わらず、淡々とした口調で親父に話しかけた。

「あなた、どういうことなの。殺人事件ってなんなのよ。全くわけがわからない」

おふくろはパニック状態のまま親父の肩を何度も揺すった。

「本当に申し訳ない」

親父は体を二つに折ったままの状態だ。

「親父、何してんだよ。ほんとにその陣内って男を殺したのかよ」

幸仁は親父の胸ぐらを掴み、二つに折っている体を起こし激しく体を揺すった。親父は抵抗せずに幸仁にされるがままだった。

「おい、やめなさい」

山川が幸仁の二の腕を握り、幸仁を親父から引き離した。

「幸仁、すまん」

「親父、本当なのか、本当に人を殺したのか」

幸仁は山川に羽交い締めにもされたまま喚いた。

「ユキくん、落ち着いて。お義父さんの話を聞きましょうよ」

向日葵はボロボロと涙を流していた。

「佐山向日葵さん、あなたにもお話を訊かせていただかねばなりません」

「はい、わかりました」

「向日葵、お前なにか知ってんのか」

向日葵は「ごめんなさい」と言って幸仁に頭を下げた。向日葵はギュッと唇を噛みしめている。

「では、まず、三浦孝士さん、陣内晃さんの殺害方法について訊かせてください」

親父は「はい」と言ってから天井を見上げた。それからしばらく沈黙した。親父は深呼吸を繰り返してからゆっくりとした口調で話し始めた。

「公園の名前はわかりませんが、鉄道の高架下にある小さな公園でした。そこで陣内と口論になり、カッとなってしまい陣内の後頭部をその公園にあったブロックで殴りました。その時は陣内が死んだとは知らず、そのまま逃げて帰りました。次の日にニュースで陣内が死んだと知りました」

「殺すつもりはなかったということですか」

「はい、殺すつもりはなかったです」

「陣内さんとあなたは以前からの知り合いだったんでしょうか」

「いえ、あの日はじめて会いました」

「はじめて会った人を殺害したわけですか。その辺の動機について詳しくお訊かせられますかな」

「動機ですか」

親父は深く息をした後、幸仁でもおふくろでもなく、なぜか向日葵の顔を見ていた。向

日葵が親父に向かってなぜか頷いた。そして親父も頷いた。刑事たちは向日葵にも話が訊きたいと言っていた。なぜ向日葵が関係あるのか全く意味がわからなかった。

「あなたの写真を犯行現場近くにある居酒屋弁慶の店員に見てもらいました。店員があなたのことをよく覚えていました。陣内さんが殺害された日、あなたが陣内さんといっしょに飲んでいと証言してくれました。それに間違いはないですか」

「間違いありません。あの日、陣内と居酒屋弁慶で飲んでいました」

「そこではじめて陣内さんに会ったというわけですか」

「はい、そうです」

「なぜ、そこから陣内さんを殺すことになってしまったのでしょうか」

「陣内と酒を飲んでいて、ちょっとしたことで、口論になってしまいました。腹が立ったので、私は一旦、店を出て冷静になろうと思いました。しかし、怒りは収まりませんでした。なので、陣内が店から出てくるのを待って、公園まで後をつけました。公園に入った陣内に向かって、私は彼に謝れと言ったんです。しかし、陣内は私を無視しました。それでカッとなって、公園にあったブロックで陣内の頭を殴りました」

何をしてくれたんだ。このままだと斗真が殺人犯の孫になってしまうじゃねえか。こんなやつの見舞いになんて来なければよかった。せっかくやり直そうと思って、ここに来たのに、これじゃあ、勘当されたままでよかったじゃねえか。

「居酒屋弁慶の店員は、二人が揉めている様子はなかった。最初から最後まで楽しそうに会話していて、陣内さんは終始上機嫌だったと話していますが」

「店員さんにはそう見えたのかも知れませんが、あの時、私は怒り心頭に発していました」

「なぜ、あなたは陣内さんに怒りを覚えていたのでしょうか。陣内さんと口論になった理由も教えていただけますかな」

「今、思えば大したことじゃありません。私の会社を貶されたからです」

「あなたはスーパーミウラの社長ですよ。居酒屋でたまたま隣に座った陣内さんと最初は話が弾んでいたが、自分の会社の悪口を言われて、カッとなって殺したということですか」

「はい。申し訳ありませんでした」

幸仁は親父を睨みつけた。こいつはなんてバカなんだ。自分のプライドを傷つけられたくらいで人を殺すなんて。やはりこいつはあの時と変わっていない。

「あなたはこれまでも居酒屋弁慶にはよく行ってたのですか」

「いえ、あの日、はじめて行きました」

「なぜ、あの日、居酒屋弁慶に行ったのでしょうか。あなたははじめから陣内さんを殺害するつもりだったんじゃないですか」

「いえ、そんなことはありません。たまたまです。急に酒が飲みたくってフラーっと居酒屋弁慶に入ったんです」

「たまたまですか」

高木も山川も納得していない様子だった。

「はい。たまたま居酒屋弁慶に行って、陣内の隣の席に座ったんです。確かに、店員さんのおっしやる通り、最初は会話が弾んでいました。けれど、私がスーパーミウラの社長

と知った途端、陣内の態度が変わりました」

「急に陣内さんの態度が変わったんですか。それはどうしてですか」

「私がスーパーミウラの社長だと告げると、陣内の顔色が急に変わりました。お前の店の弁当を買って食べた後に腹を壊したと因縁をつけてきました。それからスーパーミウラは物は悪いくせにポッタクリのように値段が高い。従業員の教育もなっていないし、最低の店だと言ってきたんです」

「陣内さんはスーパーミウラの客として、社長のあなたにクレームを言ってきたわけですか」

「まあ、そんな感じです。私はスーパーミウラは地域一番の店だと自負しています。それを貶されてカッとなくなってしまいました。それで、頭を冷やそうと一旦は居酒屋を出て帰るつもりでしたが、どうしても腹の虫が治まらず、陣内に謝らせようと外で待ち伏せしました。そして、出てきた陣内の後を追って、あの公園で陣内に謝れと言ったんです。しかし、あいつはスーパーミウラは最低だと何度も繰り返して喚くので、それで殴ってしまいました」

「なるほど、そういうことですか。あなたのプライドを傷つけられたことに腹を立て殴ったということですか。それが事実なら、三浦さん、ちょっとやり過ぎですな」

高木は納得してない様子で口を尖らせていた。

「申し訳ありませんでした」

親父が体を二つに折った。

「ちょっと待ってください」

甲高い声が病室に響いた。声の主は向日葵だ。向日葵は一步前に出た。

「向日葵、どうしたんだ」

幸仁は向日葵の肩に手をやった。向日葵の肩が震えているのがわかった。

「嘘です。お義父さんは嘘をついています」

向日葵は幸仁の言葉には答えず、また甲高い声を上げた。

「向日葵は黙ってなさい。ゴホンゴホン」

親父が苦しそうにしながらも声を荒げた。

「お義父さん、あたし本当のことを話します」

「やはり、佐山向日葵さんも今回の事件に関係しているんですな」

高木が言うと向日葵は「はい」と言って頷いた。

幸仁は何がなんだかわけがわからなかった。

「では、佐山向日葵さん、真相をお話いただけますかな」

高木がさっきまでとは違い、柔らかな口調で言った。

「向日葵、どういうことなんだ？」

幸仁が向日葵の二の腕を強く握り引っ張ったが、山川が「ご主人、冷静に」と言って、幸仁の両肩をおさえた。

向日葵が幸仁の方に振り向いた。向日葵は申し訳なさそうに、「ユキくん、ごめんなさい」と言って頭を下げた。

「佐山向日葵さん、本当のことをお話いただけますかな」

高木が念を押した。

向日葵は幸仁に「お願い」と言ってから斗真を幸仁に預けた。幸仁は何がなんだかわけがわからないまま、斗真をギュッと抱きしめた。

「陣内晃はあたしの実の父親なんです」

向日葵の口調は、さっきまでとは違い、比較的落ちつきを取り戻していた。

「えっ、どういうこと？」

幸仁は一段とわけがわからなくなり、向日葵と親父を交互に見た。向日葵は真顔で刑事たちをじっと見ていた。親父は向日葵が話し始めてから首を折った。

「あたしは祖父母からあたしの父親はあたしが生まれる前に事故で死んだと聞かされていました。でも、あたしの父親は死んでなかったんです。あたしの父親は陣内晃だったんです」

「陣内さんが実の父親だということを、あなたは何故知ったのですか。その辺のことも含めて、もう少し詳しく聞かせてもらえますかな」

向日葵の実の父親が生きていたというのか。向日葵は、何故そのことを自分に話してくれなかったのか、幸仁は、向日葵が隠し事をしていたことにもショックを受けた。

「はい。あたしの父親はあたしが生まれる前に死んだと、祖父母から聞かされてきました。あたしは父親の顔も知らないしどんな人だったかも知りませんでした。あたしは幼い頃からずっと父親がどんな人なのか知りたくて仕方なかったんです。でも、祖父母は教えてくれませんでした。それで、亡くなった母親が持っていたライターが父親の形見ではないかと思い、ユーチューブでこのライターの持主の知合いはいないかと問いかけてみたんです。そのライターには『A・Jinnai』と刻まれていました」

「あなたは、ユーチューブでは有名人みたいですね。私はその辺のことは全くわかりませんが」

高木ぎ頭を搔きながら言った。

「それから数日後に陣内があたしの前に現れました。陣内は自分が、あのライターの持ち主であたしの父親だと言いました」

「それで、あなたは陣内さんが自分の父親だと知ったわけですか。それから陣内さんはあなたに何を要求してきたのでしょうか」

「陣内は、あたしが母親のお腹にできた時に結婚するつもりでいたけれど、あたしの祖父母に猛反対されて二人の仲は引き裂かれたんだと言ってました。祖父母から二度と顔を見せるなと言われ、母親に会うこともできなくなり、あたしが生まれたことも知らなかったそうです。陣内は当時大きな会社の部長をしていたそうですが、母親との仲を引き裂かれ、あたしは墮ろされたものだと思ひこみ、ショックで仕事への熱意もなくなり、会社を辞めて浮浪者のような生活をしていたと言ってました」

「陣内さんは会社を辞めた理由をそう話したんですか」

山川が顔をしかめて不服そうな表情を浮かべていた。確かに酷い話だと幸仁は思った。好きな女性との仲を引き裂かれ、自分の子どもと会うことも出来ず、墮ろされたと思ってたなんて、自分がそんな目に合わされたら、気が狂ってしまうだろう。気力を失い仕事を辞めて浮浪者になった陣内という男性が不憫でならないと思った。どうして、向日葵の祖父母はそんな酷いことをしたのだろう。向日葵から聞いていた祖父母の印象とは全く別人だ。

「今はタクシーの運転手をやっていると言ってましたが、いまだに当時のことを悔やんでいたそうです。そんな時にユーチューブであたしのことを知ったそうです」

「そういうことでしたか。その後、陣内さんとあなたとの関係は良好なものだったんですか。今回の事件を考えると、良好だったとは思えんのですがな」

「あたしは父親に会えた嬉しさもありましたが、祖父母が陣内に対してそんな酷い仕打ちをしていたことにショックを受けました。陣内はお金に困ってるので工面してほしいと言ってきたので、祖父母のとった行為のお詫びの気持ちもあり、その時は五万円を渡しました」

「いきなり、やっと会えた実の娘に金を無心してきたんですか」

山川は呆れた顔をしていた。

「あたしは祖父母のおかげで幸せな生活をしていましたが、知らないところで実の父親が辛い思いをしていたと思うと、これくらいはしなければと思いき現金を渡しました」

「しかし、それで終わらなかったわけですか」

「はい。陣内はそれから何度もお金を要求してくるようになったんです。さすがにあたしも変だと思うようになりました。考えてみれば、あたしの祖父母は陣内が言ってるような酷い人ではないと思いました。もしかして、この陣内という男はあたしを騙してるんじゃないかと思いました。だから、これ以上は現金は渡せないと言ったんです。そうしたら、陣内はお前の旦那の父親はスーパーミウラの社長だから、お義父さんに頼めと言ってきました。お義父さんには、ただでさえ迷惑をかけているのに、そんなこと無理ですと言うと陣内は自分で頼みに行くと言ってきました。それだけはやめてほしかったので、仕方なくそれから陣内に現金を渡し続けました」

「なるほど、それがなぜこのような結果になってしまったんでしょうか」

「お義父さんがあたしの異変に気付いたのはそれからすぐでした。あたしが最近元気がないとお義父さんに問い詰められて、陣内のことを相談してしまいました。お義父さんは自分が陣内と話をつけるから、向日葵は心配するなど言ってくれました。それから陣内は殺されたことをニュースで知りました。だから、あたしのせいなんです。お義父さんは悪くないんです」

向日葵は顔をグシャグシャにして泣いていた。

「三浦孝士さん、今の話は本当ですか」

親父は首を折ったまま口を開かなかった。

「陣内さんと佐山向日葵さんが会っていたことは、近くの西田珈琲という喫茶店での聞き込みでわかっています。その時の様子は佐山向日葵さんが陣内さんに強請られているようだったと喫茶店のマスターは証言しています。封筒のようなものを佐山向日葵さんが陣内さんに渡しているところも目撃されています。さっきの佐山向日葵さんの話は信憑性があると思うのですが、三浦孝士さん、いかがでしょう。本当のことを話していただけますか」

親父はそれでも口を開かなかった。

「あなた、ちゃんと本当のことを話してくれる」

おふくろが親父の横に座って、親父の肩に手を置いた。

親父は「わかった」と言ってからしばらく遠くを見ていた。しばらく病室に沈黙が続いた。

「どういうことなんだよ。意味わかんねえよ」

「ユキくん、ごめんなさい」

向日葵が泣きながら頭を下げた。そこでやっと親父が口を開いた。

「確かに向日葵から陣内のことで相談は受けました。しかし、それが理由で、私は陣内を殴ったわけではありません。向日葵は今回の事件と全く関係ありません」

「そうですよね。私もそこがひっかかるんですよ。佐山向日葵さんがあなたに相談した時点で陣内さんが佐山向日葵さんを強請るネタがなくなったわけですから。そこで陣内さんの悪行は終わりなんです。なのに、なぜあなたは陣内さんを殺してしまったんですか。そのまま、陣内さんを無視しておけばよかったわけじゃないですか」

「はい、そのつもりでした。居酒屋弁慶でもうこれきりだと、伝えるつもりで陣内の隣に座りましたが、陣内はやたらと上機嫌でしたので、そのことを言い出すタイミングを失ってしまいました。下手に話し出して陣内が怒りだしたら店にも迷惑もかかりますので、私は一旦弁慶を出てから、外で彼と話すことにしました」

「それで陣内さんが帰るのを待って殺害現場の公園で話し合ったわけですか」

「そうです。そこで私がスーパーミウラの社長で向日葵の義理の父親だと伝えました。だから陣内にこれ以上向日葵に近づくな、現金を要求しても無駄だからこれで終わりだと言いました」

「それに対して、陣内さんが怒り出したわけですか」

「はい。それで陣内は私を罵り出しましたが、そんなことだけで、私は陣内を殴ったりはしません。もちろん殺す気なんてなかったです。なので、私は陣内に言うべきことだけを言って、そのまま帰るつもりでした」

「しかし、あなたは陣内さんをブロックで殴っています。何故ですか。そのまま帰っておけば、その後は陣内さんから佐山向日葵さんが強請られることもなく、殺人事件も起こらなかったのに」

「はい、あのまま帰ればよかったんです。でも、あいつは最後に許せないことを口にしたんです。絶対に口にしてはならないことをあいつは口にしたんです。それでカッとなってしまいました」

「陣内さんは最後にあなたに何と言ったんですかな」

高木の表情は穏やかだった。

「あいつは最低な男です。絶対に許せませんでした」

親父は末期ガンの患者とは思えないくらいに顔を赤くして興奮していた。

「一体、陣内さんは何と言ったんですか」

山川が同じことを訊いた。

「あいつは、あの女があの方に向日葵を生まずに墮ろしておけばよかったんだと言ったんです。向日葵の母親、佐山孝恵が、向日葵を墮ろしておけばよかったんだと言ったんですよ。そんなこと言う陣内を許せますか。私は許せませんでした。向日葵を墮ろしておけばよかったなんて許せません。向日葵はうちの息子を幸せにしてくれた大切な女性ですよ。それで頭に血がのぼってしまい、自分でもわけがわからなくなりました。気がついた

時には陣内が私の足元で倒れてました」

「事情はよくわかりましたわ。では、この後、この山川に署に連絡させますので、署から他の者がここに来ると思います。その時、あなたは自首してくださいな」

「えっ、自首ですか」

「ええ、あなたは、あの時、自首するつもりで、警察署に来たんですな」

「はい、そのつもりでした」

「自首するつもりだったが、その寸前で倒れて意識がなくなってここに運ばれた。そうすな」

「ええ」

「ですから、この後、あなた自身で自首の続きをしてくださいな」

「あ、はい、わかりました」

「では、我々はこれで失礼します」

高木が慇懃に頭を下げて病室を出て行った。山川もそれに倣って頭を下げて高木に続いて病室を出て行った。

幸仁は何がなんだか、いまだに意味がわからなかった。呆然としたまま、病室を出ていく刑事たちを見送った。刑事たちが出ていってから、誰も口を開かず、病室はシんとしていた。

しばらく沈黙が続いたが、それを破ったのは斗真だった。

「ジージ、バァーバ、マァマ」と言って笑った。

「斗真」

幸仁は斗真をギュッと抱きしめた。

そして斗真が幸仁に向かって、「パァパ」と言って笑った。

情

山川は病室を出て、前を歩く高木を追いかけた。

「高木さん、三浦孝士に自首させるんですか」

「ああ、三浦孝士は、あの時、そのつもりで署に行ったわけだからな」

「でも、せっかく俺たちが三浦孝士が犯人だと突き止めたのに、もったいないですよ」

「俺たちがだと」

高木が振り返り、山川を睨み付けた。

「いえ、高木さんがです」

山川は肩をすぼめた。けど、受付で倒れた男が三浦孝士だと気づいたのは自分なの
と思った。

「せっかく高木さんが犯人が三浦孝士だと突き止めたのに、自首させたら、俺たちの、い
や高木さんのこれまでの苦勞が署長にわかってもらえないじゃないですか。これまでの
苦勞が水の泡ですよ」

「俺たちのこれまでの捜査の苦勞なんて、三浦孝士と佐山向日葵の苦勞に比べたら屁み
たいなものだ」

高木が並んで歩く山川を横目で見た。

「そうですか。高木さんがそう言うなら、それでいいんですけど」

山川は、ここで三浦孝士を逮捕したら、署での高木の株も上がるのに、もったいない
などと思った。

「だから、すぐに署に電話しろ。三浦孝士が自首したいと言ってるとな」

「俺たちは三浦孝士についてなくていいんですか」

「三浦孝士は逃亡の心配もない」

「まっ、そうですけど。一応、三浦孝士が逮捕される場所を確認した方がいいんじゃない
ですかね」

「お前がそう思うなら、お前だけここに残っててもいいぞ。わしは遠慮しておく」

「俺も高木さんといっしょに行きますけど、高木さん、どうしたんですか」

「わしは、三浦孝士が逮捕される場所を見るのが辛いだけだ」

高木はそう言って、足を早めた。

山川はこの人にも人間の血が流れてるんだなと高木の横顔をじっと見た。

修復

幸仁は病院の休憩室の自販機に百円玉を滑りこませてコーヒーが出来上がるのを待っていた。椅子に座っている向日葵に目を向けるとテーブルの前で俯いたままだ。

それを見て、「ハァー」とため息が出た。このため息は誰に対してのものなのか、向日葵に対してなのか、親父に対してなのか、さっきの刑事に対してなのか、自分自身に対してなのか、幸仁自身もよくわからなかった。

向日葵に訊いておかなければならないことが山ほどある。内容次第では、この先、二人は夫婦としてやっていけないかもしれない。これから話す内容は他人には聞かれたくない。休憩室に誰もいなくてよかったと思った。

取り出し口の赤いランプが消えたので紙コップを取り出した。紙コップを持って向日葵の座るテーブルへと向かった。向日葵はまだ顔を上げていない。

「ほい、コーヒーだ」

向日葵が座るテーブルの前に紙コップを置いた。

「ありがとう」

向日葵が消えいりそうな声で言った。

自販機へ戻り、自分のコーヒーを買った。向日葵の様子を覗き見るが、コーヒーに口をつける様子はない。「チェッ」と舌打ちして、自販機に体を向けてコーヒーが出来上がるのを待った。

赤いランプが消えて、自分のコーヒーを手に持ち、向日葵の前に腰をおろした。向日葵を見るが、顔を上げる気配はない。幸仁は湯気の上がるコーヒーを口にしてズズと音を立てた。

「冷めるから、早く飲みなよ」

幸仁は苛立ちを隠し、いつも通りの口調で言った。

向日葵は「うん」と言って、やっと顔を上げた。

「さっきの話はどういうこと。何から訊けばいいのか、頭が混乱して、わけわかんねえんだけど」

「ごめんなさい」

「まず向日葵と親父は今日初めて顔を合わせたわけじゃなかったってことだよな」

幸仁はそれを確かめようと思った。なぜ向日葵と親父はこれまでに会っていたのか。そして、そのことを向日葵は幸仁に隠していたことも気になる。

「うん。これまで黙っててごめんなさい。ユキくんの内緒で、お義父さんとお義母さんに会いに行ってた」

向日葵の言葉を聞いてショックで頭に血がのぼるが、取り敢えず落ち着いて訊くべきことを訊いておこう。

「いつから親父とおふくろと会ってたんだ」

怒りで声が震えそうになるのを必死で堪えた。

「ユキくんと結婚してすぐにあたしからお義父さんとお義母さんに挨拶に行ったの。それからずっと会ってた」

「そんなに前からかよ」

幸仁はなんともいえない気持ちだった。長い期間、向日葵に騙されていたことに怒りが沸点に達する。手にしているコーヒーを向日葵にぶっかけたい気分だった。

「俺に内緒で何のために親父なんかとコソコソ会ってたんだよ」

声が震えた。もう我慢の限界かもしれない。

「最初は、ユキくんと結婚をお義父さんとお義母さんに認めてもらいたかったから、それで会いに行ったの」

「別にあいつらに、俺たちの結婚を認めてもらわなくてもいいんだよ。それにさっきの刑事の話が本当なら、親父は殺人犯だぞ。こっちから縁を切りたくらいだ」

「それはあたしのせいだから」

「それも、わけがわかんねえ。向日葵の実の父親は生きてたってことだよな」

「そうだったみたい。俺がお前の実の父親だって急にあたしの前に現れたの」

「なんで、強請られなきゃならねえんだよ。向日葵が悪いわけじゃねえのに。向日葵のおふくろとばあちゃんとじいちゃんが悪いんじゃないか」

「違うわ」

向日葵がキリッとした目で幸仁を睨んだ。幸仁はその目を見て、少し怯んだ。

「じゃ、じゃあなんでだよ」

「きっと、お母さんもおばあちゃんもおじいちゃんも悪くないと思う。あの陣内が悪い男だったからよ」

「全員が死んでるから、真相はわかんねえけどな」

「あたしを生んでくれたお母さんと育ててくれたおばあちゃんとおじいちゃんをあたしは信じてる」

「親父の話が本当から、陣内って奴は、向日葵のおふくろさんが向日葵を墮ろしておけばよかったんだって言ってたみたいだし、向日葵に金を要求してたのは事実だから、確かに陣内って奴も悪い男だったんだろうけどな」

「きっとそう。お母さんとおばあちゃんとおじいちゃんは、陣内からあたしを守ってくれたんだよ」

「けど、親父もそいつを殺すことはなかったよな」

「あたしがユキくんに早く本当のことを話しておけばよかった。そうしたらこんなことにならなかったのに」

向日葵は首を折った。

「なんで、話さなかったんだ？」

「ユキくんがあたしがお義父さんとお義母さんと会ってること知ったら怒り出すかもしれないし、そうになったら本当に終わっちゃうかもしれないから、ユキくんに話すタイミングをお義父さんとお義母さんと相談していたところだったの」

「陰でコソコソしやがって」

幸仁は飲み終わった紙コップを握り潰した。

「本当にごめんなさい」

向日葵はテーブルに額をこすりつけた。

それを見て、幸仁は「フン」と鼻を鳴らした。

「お義父さんとお義母さんからユキくんの小さい頃のことをいろいろと教えてもらったよ。ユキくんは子どもの頃、アトピーが酷かったから食べさせるものが大変だったってお義母さんが言ってた。お義母さんは自分の若い頃の食生活が悪かったせいでユキくんはアトピーが酷かったのかもしれないって反省してた。それから、お義母さんはスーパーミウラの仕事の時間を減らして、ユキくんのために、毎日、アレルギーに注意して料理を作るようにしたんだって。お義父さんもユキくんのためにはその方がいいからって、忙しくて大変なのに、お義母さんにお店を手伝わせなかったらしいよ。お義父さんはお義母さんに、お前は幸仁のために体に良くて美味しい料理をいっぱい作ってやってくれてって言ってたんだって。ユキくんはお義父さんから愛されてたんだよ」

「もしかして、向日葵の料理はおふくろの影響を受けてたのか」

向日葵の料理は最初から旨かったが、斗真が生まれたくらいから味付けが少し変わってきた。豚の生姜焼きの味がおふくろに似てきたし、どの料理も幸仁の好きな味付けになった気がしていた。最初は不思議に思ったが、さほど気にはしていなかった。それと健康志向が強くなった。食品添加物のことをすごく気にするようになった。幸仁は、向日葵が斗真のことを考えて、そうしているだけだと思っていた。

「よくわかったね。さすが、ユキくん。あたしがユキくんの好きな料理をお義母さんに教えてほしいってお願いしたら、ユキくんの好きな味付けの仕方をいろいろと教えてくれたの。豚の生姜焼きをお義母さんに教えてもらった通りの味付けに変えてから、ユキくんが美味しそうにバクバク食べてたって話すとお義母さんはすごく嬉しそうにしてたよ」

「そういうことか」

「もっと言うよね。誕生パーティーのお肉も桃もお義父さんからもらったの。お義父さん、嬉しそうに顔して、幸仁はこの桃が大好きなんだって言ってね」

「みんなで俺を騙してたわけかよ」

「違うよ、騙したんじゃないよ、黙ってただけだよ」

「それを騙したって言うんだよ」

「そうかな」

「そうだよ、向日葵も親父もおふくろも俺を騙してたんだ。親父もおふくろも、やり方が汚えよ。向日葵だって俺に黙って親父とおふくろに会ってたなんて、俺への裏切りだ」

「あたしもお義父さんもお義母さんも、ユキくんを騙してなんかいないし裏切ってなんかいない。あたしたちは黙ってただけなの。本当は、あたしもお義父さんもお義母さんも、ユキくんに話したくて話したくて仕方なかった。けど、ユキくんに話すタイミングがわからなかった。下手に話したらユキくんが怒り出すから。やっぱり家族みんなで仲良くしたかったからね。だから、あたしたちは騙したんじゃない。ユキくんとお義父さんが仲直りできるタイミングが来るのをずっと待ってたの。でもね……」

向日葵がそこまで言って、幸仁に一步近づいて、幸仁の顔をじっと見上げた。向日葵

の目から大粒の涙が頬を伝った。幸仁は向日葵の目を見ることができなかった。

「でもね」と向日葵が幸仁を見上げたままもう一度言った。向日葵の目からは次から次へと大粒の涙が溢れ出て頬を伝った。

「向日葵」

幸仁が言うと、向日葵は急に「グワーァ」と子供のように声をあげて泣き出した。

「急にどうしたんだよ。そんな大声で泣くなよ」

幸仁は自分の胸に向日葵を引き寄せた。向日葵は幸仁の胸の中で「グワーァ、グワーァ」と泣き続けた。

「わ、わかった、わかった。俺が悪かった。だ、だから向日葵、もう泣くな」

幸仁は赤ん坊をなだめるように向日葵の背中をテンテンと手のひらで叩いた。斗真じゃあるまいし、向日葵は赤ん坊みたいに泣きすぎだろ。

「何に対して悪いと思ってるのよ」

向日葵が幸仁の胸に顔を当てたまま泣きながら言った。

「それは、親父やおふくろや向日葵に対してだよ」

斗真をあやす時のように向日葵の背中を擦った。

「なぜ、悪いと思ってるのよ」

「それは、俺が意地張ってたから、親父と喧嘩になって、親子の関係をグダグダにしてしまったことかな」

「ほんとに、悪いと思ってるの」

向日葵はずっと幸仁の胸で涙を拭いている。

「思ってるよ。さっき、刑事が来る前に親父に謝るつもりだったんだから。それが本当の俺の気持ちだ」

「ほんと」

向日葵が幸仁の胸に埋めていた顔を上げた。幸仁が見下ろすと、向日葵の目がキラキラしていた。

「ああ」

「じゃあ、今から仲直りして」

幸仁を見上げる向日葵の顔が満面の笑みに変わっていた。さっきまでの大粒の涙は一体なんだったんだ。まあ、いい。向日葵はやっぱり笑顔の方がいい。そこで幸仁は気持ちを切り替えた。

「わかった。斗真も待ってるし病室に戻るか」

幸仁が言うと、向日葵は「はい」と幼稚園児のように右手を高く上げた。

幸仁は向日葵の笑顔を見て、嘘泣きかよと苦笑いを浮かべた。

病室に入ると、斗真が親父のベッドの上でチョコンとご機嫌に座っていた。普段、斗真は幸仁と向日葵の姿が見えないとすぐに泣き出すのに、今はニコニコしている。親父とおふくろはベッドの上の斗真に夢中で、幸仁と向日葵が病室に入ってきたことに気づいていない様子だ。幸仁は向日葵と目を合わせた。

「もうしばらく、このままにしておくか」

幸仁が声を出さずに口だけを動かした。

「そうね」

向日葵も口だけを動かした。

幸仁と向日葵は並んで、親父とおふくろと斗真の様子を見ていた。

「ジージ、キャッキャ、バーバ、ケラケラ」

親父は「斗真は本当にいい子だな」と斗真の頭を撫でながら目を細めていた。親父、なにデレデレしてんだよ、似合わないんだよと思い、幸仁は声を出して笑い出しそうになった。

おふくろは「斗真くーん」と言って斗真の頬にキスしていた。おい、おふくろ、キスなんかして斗真に変な病気うつすなよと心の中で呟いた。

親父とおふくろの表情は幸仁の位置からは見えないが、きっと、顔をくしゃくしゃにして笑っているのだろう。二人の声のトーンで想像できる。なぜ、もっと早くこうしなかったのかと、幸仁は熱いものがこみ上げてきた。

親父とおふくろは、その後もずっと斗真の頬を擦ったり、手を握ったり、足を揉んだり、横腹をこそばしたりと斗真の体を触りまくっていた。斗真はその間ずっとケラケラと笑っていた。親父の笑い声も病人とは思えないくらい元気な声だった。これから自首しようとする男とは思えない。斗真には周りの人を幸せにする力があるんだなと思った。これは母親譲りなんだろう。

「親父、帰る前に話を聞いてくれるか」

こみ上げてきたものを沈めるように、幸仁は大きく深呼吸した。幸仁が席を外してくれと向日葵に目配せをした。向日葵が「斗真のオムツを替えてジュースでも飲ませてきます」と言って、斗真を抱えて病室を出ていった。

親父が斗真に手を振った。斗真も親父に手を振り返した。幸仁は病室を出ていく向日葵の背中を見送ってから、親父に深々と頭を下げた。

「親父、意地張ってわがままばかりでごめん」

頭を下げると同時に床に涙が落ちた。幸仁は顔を上げることが出来ず、しばらく落ちる涙を見ていた。

「謝るのは、俺の方だ。あの時に斗真を墮ろせなんて言った俺がすべて悪いんだ。幸仁は向日葵と斗真のために、今日までよく頑張った。ゴホン、ゴホン」

親父は言い終わってから苦しそうに咳をした。

「あの時、意地をはらずに、俺が頭を下げるべきだった。向日葵とのことを認めてもらうべきだった。そうしてたら、俺たち家族はもっと幸せに過ごせた」

「済んだことだ。これからやり直せばいい」

「けど、……」

もう遅いよ、と言いかけて、幸仁は言葉を飲み込んだ。

「幸仁、俺はお前の名前をつける時、周りの人を幸せにしてくれる人間になってほしいと思って名前を決めた。お前はその通りに生きてくれた。向日葵や斗真を幸せにしてくれたし、職場でもそんな存在だと最上さんから聞いている。俺はそれを聞いて誇らしくて本当に嬉しかった」

「けど、俺は親父とおふくろを幸せにできていない」

「そんなことない。俺は幸仁のおかげで十分幸せな人生だった」

「いや、やっぱり、俺は親不孝だよ」

幸仁は首を折った。

「向日葵は素晴らしい女性だ。その向日葵を選んだのは幸仁、お前だ。それに、俺は斗真を見て、今すごく幸せな気分になった。その斗真を育てると決めたのも幸仁、お前だ。お前はなにも悪くない。全て俺が悪かったんだ」

親父は唇を噛みしめていた。

「俺の力じゃない。向日葵のおかげだ。俺は向日葵に感謝してる。向日葵がいなかったら、俺は……」

そこで声が詰まって、また涙が止まらなくなった。

「これからは向日葵と斗真とお母さんを幸せにしてやってくれ」

「わ、わかった」

それしか言えなかった。親父もだよとは言えなかった。

「それを聞いて安心した。幸仁、今日はありがとうな。俺は今すごく幸せな気分だ」

親父は頬を緩め遠くを見つめていた。

「俺、これからも頑張るけど、まだまだ未熟者だ。これから親父に助けてもらわないといけない」

幸仁がそう言うと親父は首をゆっくりと横に振った。

「俺がいなくても幸仁なら大丈夫だ。向日葵もついてるしな。ゴホン、ゴホン、ゴホン、ゴホン」

「大丈夫かよ」

「ゴホン、ゴホン、ゴホン、ゴホン、ゴ、ホ、ン」

「おい、親父、どうした、おい」

幸仁は親父の背中を擦った。親父は苦しそうに咳を続けた。

後継

一番前の椅子に座り、左隣に座るおふくろを見てから右隣に座る斗真を抱いた向日葵を見た。二人とも目に涙を浮かべていた。幸仁は涙こそ出ないが、悲しくて辛くて、そして悔やんだ。お経を聴きながら、目を閉じると、親父と行った塚原農園の景色が瞼の裏に浮かんだ。

最後に親父はおふくろに向かって「苦勞をかけたな」と言った。

斗真の頬に手を当て、「楽しく生きろよ」と言った。

向日葵の手をとり、「ありがとう」と言った。

幸仁の手を握り、「あとは頼むな。これまでありがとう。俺は幸せだった」と言った。

幸仁は嗚咽が出るだけで、言葉が出なかった。親父の手を握ったまま、心の中で、向日葵を守ってくれてありがとう、意地はってごめんなさいと何度も繰り返した。

最後に親父はニコリと笑みを浮かべたまま目を閉じた。

「あなたー」

「親父」

「お義父さん」

「ジョージ」

残された家族四人が一斉に声を上げた。

喪主のおふくろに代わり、幸仁が参列者に向かって挨拶をした。何度も嗚咽し言葉を詰まらせながら、参列者に感謝の言葉を述べ、親父との思い出を話した。話が終わる前に声を上げて泣いた。周りを気にすることなく、子どものように大声で泣いた。

会場からすすり泣く声が漏れる中、親父との別れの時間が近づいてきた。棺の周りに人が集まり、順番に棺に花を入れてくれた。一人の男性が棺に花を入れてから長い時間手を合わせた後、幸仁の方に体を向けた。

「この度は御愁傷様です」

男性は悲しそうな潤んだ瞳を幸仁に向けてきた。十五年の年月が流れたが陽に焼けた顔は変わらない。

「ありがとうございます」

幸仁は頭を下げた。

「三浦社長のご子息の幸仁さんですよ」

「はい、そうです。塚原さんですよ。ご無沙汰しております」

親父と塚原農園に行った時の記憶が鮮明に甦った。

「三浦社長には、大変お世話になりました」

「いえ、父の方こそ、塚原さんにはお世話になりっぱなしだと、私が子供の頃から聞かされてました。本当にありがとうございました」

「いえいえ、私たちにとって、三浦社長と先代の奏輔さんは恩人ですから」

「そう言ってもらえると、祖父も父も天国で喜んでいると思います」

「ところで、幸仁さんは、スーパーミウラの後を継がなかったんですね」

「ええ、叔父が継いでくれますから」

少し後ろめたい気持ちになった。

「お子さんができて、他で働いてるんですってね」

「はい、親父が話してたんですか」

「ええ、三浦社長から聞きました。すごく喜んでましたよ。息子は自分でやりたいことを見つけて頑張ってる、そうおっしゃってました」

「そうでしたか。私のわがままで後を継がなかったから怒ってるとばかり思っていました」

「いえ、あなたのことを話す時の三浦社長はいつもニコニコと目を細めてましたよ。特にあなたの奥さんとお子さんの話をしている時は顔がとろけてましたね」

「けど、親父は私に後を継いでほしかったんじゃないですかね」

「確かに継いでほしかったみたいですが、それより、あなたが家族を持って幸せに過ごしてくれていることが嬉しかったみたいです」

「そうなんですか」

「また今度、お子さんと奥さんを連れてうちに遊びに来てくださいよ」

「いいんですか」

「もちろんですよ。ぜひ来てください」

「近いうちにお言葉に甘えさせていただきます」

そうだ、斗真にも、俺が子供の頃に味わった塚原農園での楽しかった思い出を体験させてあげよう。塚原農園まで行く道中、親父の運転する軽トラックの助手席に座り感じたワクワク感、塚原農園で汗をいっぱいかいて収穫を手伝った充実感、最後に美味しい桃をお腹いっぱい食べさせてもらった満足感、そんな親父との思い出を斗真とも味わおう。そして、その時は隣で笑っている向日葵の笑顔が見たい。

キャラ弁

大学生になってまで、母さんの手作り弁当を学校に持っていくのは、お前はマザコンかよと笑われそうで嫌だった。しかし、母さんは僕のために朝早く起きて弁当を作って持たせてくれる。だから、いらぬとは言にくい。友達から弁当を持ってきただけでもマザコン扱いされそうなのに、弁当の中身を見られたら、なんて言われるだろう。恥ずかしくて絶対に弁当の中身は見せられない。せっかくの休憩時間なのに、僕はいつも友達から離れて学食の隅でこっそり弁当を食べなければならなかった。

なぜ弁当の中身が恥ずかしいのかというと母さんが作る弁当は普通の弁当ではなく、キャラ弁なのだ。幼稚園児じゃあるまいし、大学生がキャラ弁で喜ぶはずないのといつも思う。

母さんに学食で買って食べるから弁当はいらぬと言ったことがある。その時、母さんは「どうして?」「美味しくないの?」とクエスチョンマークを頭の上に浮かべて訊いてくる。

「いや、美味しいよ」と答えると、じゃあ、いいじゃないと言ってニコニコ顔を浮かべる。母さんの笑顔にはいつも勝てない。

確かに母さんは料理が上手だ。僕の健康のことを考えて、栄養バランスや添加物のことなども気にしてくれている。

一度、父さんに相談したことがある。その時、父さんは僕の気持ちを理解してくれた。父さんが母さんに、斗真も大学生なんだから、学食やコンビニで自分で買って食べさせればいいんじゃないかと言ってくれたが、母さんは頑としてきかない。

「斗真の健康のことを考えると、あたしの作るお弁当の方がいいのよね。それに斗真にお弁当を作るのがあたしの今の楽しみなのよね」

母さんはニコニコと笑って言う。

そう言われた父さんは母さんの意見に、「それもそうだな」とすぐに折れてしまう。

父さんは母さんの笑顔にメロメロだから期待した僕がバカだった。母さんに、とりあえずキャラ弁だけはやめてもらうように自分でお願いした。

「お弁当の蓋を開けた時に、斗真に明るい気持ちになってほしいのよねー」

母さんはまたニコニコと笑いながら、僕にそう言った。

母さんの作るキャラ弁は毎日同じ絵柄だ。弁当箱の蓋をあけると、いつもヒマワリの笑顔が僕を見ている。母さんの名前が向日葵だから、そうしているらしい。

同じヒマワリのキャラ弁でも中身は様々だ。ハンバーグやウインナーの周りにスライスチーズを切って花びらのようにしている日もあれば、おにぎりの周りに薄切り玉子を花びらのように並べた日もある。他にもウインナーを飾り切りしてヒマワリのようにし

たり、白いご飯の上に細く切ったタクアンをヒマワリの花びらのように並べて、その中に昆布の佃煮や漬物で笑顔を作ったりと、いつも母さんなりに工夫している。

母さんの言うように、お弁当箱の蓋を開けるとヒマワリのキャラ弁が僕の目に飛びこんできて、気持ちがパッと明るくなるのは確かだ。

「まあ、弁当箱を開けた瞬間は明るい気持ちになるけど」

「でしょ、じゃあ、いいじゃない」

「まあ、そうだね」

やはり、僕も折れた。父さんのことを偉そうには言えない。

今日はどんなヒマワリが出てくるだろうか。弁当箱の蓋をそっと開けると、目に飛び込んできたヒマワリはハンバーグバージョンだった。それを見て、僕は周りに気づかれないよう、こっそりと笑みを浮かべ、手を合わせてからお箸を手にした。

「ウワーッ、何それ」

「めっちゃおもろいやん」

僕の背後から大きな声が飛んできた。慌てて振り向いて見上げると、同じ学科の岡田大翔と園山美優の二人が立っていた。二人はニタニタと笑って僕の前に置いてあるキャラ弁を覗いていた。

大翔は「それ、すげえな」と言いながら僕の前に回ってきて、椅子に腰をおろしキャラ弁を覗きこんだ。僕は手で蓋をしたい気分だった。美優も物珍しそうにキャラ弁を見ながら、僕の前に座った。

「斗真はいつも一人で弁当食ってると思ってたけど、中身はこんなだったんだ。ハハハ」

「う、うん」

僕は顔が熱くなった。このまま弁当を食べずに片付けたかった。

「これ、お母さんが作ってくれてるの」

美優が弁当の具材を確認するようにキャラ弁に顔を近づけた。

「ま、まあ、そうだけど」

「まさか、いつも、こんな弁当なのか」

「そのまさかだけど」

「美味しいの」

「まあ、美味しいかな」

大翔と美優は、僕の前に座ってから、他にどんなキャラ弁があるのか等、次から次へと質問をかぶせてきた。

「お前の母ちゃんは、なんで、こんな弁当作ってんだ」

大翔が訊いてきたので、僕がいつまでも健康でいてほしいのと、毎日明るい気持ちでいてほしいから、母さんが作ってくれているんだと、正直に答えた。二人から、『ガキみたいだな』とか、『マザコンなの』といった言葉が返ってくる覚悟はした。

「へえー、そうなんだ。斗真が羨ましいな」

大翔から意外な答えが返ってきた。

「あたしも、子どもができたなら三浦くんのお母さんみたいに、子どものためにキャラ弁を毎日作ってあげたいわ」

美優が指を組んだ両手を胸の前で合わせ、宙に視線を向けた。

「お前、料理できねえじゃねえか」

大翔が美優に突っ込んだ。

「まっ、今はね。これからは大学の勉強だけじゃなくて、料理の勉強も頑張らなきゃね。あたし、三浦くんのお母さんに教えてもらおうかな」

僕は嬉しい気持ちになったが、恥ずかしくて下を向いた。

その日から、僕はみんなと一緒に弁当が食べられるようになった。弁当を開けた時のヒマワリのキャラ弁は、僕だけでなく、大翔や美優をはじめ、他の友達も笑顔にするようになった。母さんの他人を笑顔にする力はすごい。

「いただきます」

目の前に並ぶテーブルの上の夕食に手を合わせた。そしてこれらを作ってくれた母さんに感謝の笑みを向けた。

「これまで長い間、美味しいご飯を作ってくれてありがとう」

言葉に出すのが恥ずかしくて心の中で呟いた。

明日からしばらく母さんのご飯が食べられなくなると思うと寂しい気持ちになった。今日のメニューは豚の生姜焼きだ。母さんは今日のメニューを僕の好物にしてくれた。お皿に敷き詰められたキャベツの上に浮かぶ豚の生姜焼きを箸でつまんだ。母さんの豚の生姜焼きは、生姜がよくきいていて辛口だ。最近はコチジャンもいれている。その辛さが僕をやみつきにした。

「斗真、一人暮らししても、自炊しなさいよ。コンビニ弁当やファーストフードばかり食べてちゃダメだからね」

母さんが心配そうに言う。母さんは添加物は体に悪いからと言って、僕が小さい頃からファーストフードやコンビニ弁当をあまり食べさせてくれなかった。料理する食材も無添加にこだわっていた。亡くなった祖父が創業したスーパーミウラは無添加や無農薬の商品をたくさん扱っていて、僕が生まれてすぐの頃、祖父母から僕と父さんに安全な食品を食べさせてあげると、そうした食品をよくもらっていたそうだ。

父さんは、安全が確認されたものなんだから、添加物が入っても、農薬を使ってもいいじゃないか。コンビニ弁当やファーストフードは便利だし美味しいし、それに、そうした企業も最近は食の安全にも力を入れてるよ。無添加や無農薬にこだわると家計がきつくなるだけだろと言っているが、母さんは頑としてきかなかった。

「だって、ユキくんと斗真には、いつまでも健康で元気でいてほしいんだもん」

母さんがニコニコと笑顔で言うと、父さんはいつものように何も言えなくなる。父さんは母さんのことが大好きだからだ。

明日から僕は愛知県に本社がある食品スーパーを運営する会社にお世話になる。祖父が創業したスーパーミウラに就職するつもりだったが、祖父の後を継いだ叔父が、スーパーミウラに就職する前に、愛知県に本社があるスーパーで修業した方がいいと言ってきた。本当は僕の父さんが若い頃にそこで修業する予定だったらしいが、父さんは祖父の後を継ぐつもりがなくて、その話はなくなったらしい。

祖父は父さんにスーパーミウラを継がせるつもりだったが、父さんは後を継ぐ気はなかったらしい。叔父さんは詳しく教えてくれないが、父さんが後を継がなかったのは、僕が生まれてきたことも少し影響しているみたいなのを言っていた。

愛知県のスーパーで働くようになって五ヶ月が過ぎた夏の暑い日に父さんから電話がかかってきた。

「もしもし、斗真か、よく聞け。落ち着いてな」

父さんはすごく慌てている様子だった。

「僕は落ち着いてるよ。父さんこそ、落ち着いてよ」

「落ち着いてる場合じゃないんだ」

落ち着いてなと言ったのは父さんの方だと突っ込みたかったが、父さんの様子から、それを言っても無駄だとわかった。

「どうしたの」

「向日葵が、向日葵が倒れたー。入院しちゃったんだよー」

その時の父さんの声は涙声だった。

「母さん、どうしたの。なにがあったの」

ただならぬ父さんの様子に、スマホに向かって話す僕の声がつい大きくなった。

「癌だって。向日葵が癌だってー。ウォー」

スマホの向こうで父さんは大泣きした。

「父さん、今はどこ？」

「う、うー、びよ、病院だー。ウォー」

「どこの病院？」

「す、駿河総合病院だ。斗真、どうしよう。向日葵は大丈夫なのかよ」

「とりあえず、明日休みだから、すぐにそっちに向かうよ。今から病院行っても間に合わないから、今日は家に泊まるから」

「わかったー、ウォー」

父さんの泣く声を聞いてから電話を切った。母さんが癌と聞いて、さすがにショックだった。どれくらい進行しているのだろうか。父さんに訊きたかったけど、父さんは混乱しているようだし、訊くのが怖かったのでやめた。すぐに帰る準備をした。

新幹線から外の景色を眺めて、母さんの病状がどんなものか考えた。電話での父さんの様子からすると、不安しかない。母さんの笑顔を思い出す。僕たちの健康のことは気にしてたくせに、母さん、自分のことは、気にしてなかったのかよと外の景色に向かってぼやいた。

自宅についた時には夜十時を過ぎていた。部屋に入ると空気がムンとしていた。父さんはエアコンもつけずにポーッと座っていた。

「父さん、お医者さんはなんて言ったの」

まず、それを訊いておかなければならない。余命何日なんて言葉が父さんの口から出たらどうしようかと胸が苦しくなった。

「早期発見だから、ちゃんと治療すれば大丈夫だって」

父さんは項垂れていた。

「そうなんだ。お医者さんがそう言うなら父さん、大丈夫だよ」

少し安心したけど、本当はまだまだ不安だった。

「そうだけど。でも、癌だぞ。医者の方を信じてることを鵜呑みにはできねえよ」

「お医者さんを信用しないと、治るものも治らないよ」

母さんは乳癌だった。父さんが異変に気づいたらしい。今でも二人は仲良しなんだなど思った。とりあえず早期発見できて良かった。異変に気づいた父さんのファインプレーかもしれない。

次の日に朝から母さんの見舞いに行った。

「母さん、具合はどう」

さすがに母さんからは、いつものあの笑顔がなかった。顔色も暗く沈みがちだ。僕と目が合ったが、ぼんやりと僕の顔を見ていた。

「斗真、心配かけてごめんね」

母さんの声は掠れていた。

「本当だよ。母さんは僕と父さんの健康のことばかり心配してたけど、これからは母さん自身の体も大切にしてくれよな」

「わかった。これからは気をつける」

母さんは、ぼんやりと天井を見つめていた。

「あたしね、この病院で生まれたの」

「知ってるよ。父さんといっしょの日に生まれたんだろ。運命的だって言ってたもんな」

「昨日、あたしのお母さんの夢を見たのよね。会ったこともないお母さんの夢。この病院であたしを生んでから、すぐに死んじゃったお母さん。命懸けであたしを生んでくれたの。もしかして、お母さんがあたしに会いたくて、あたしを迎えに来たのかなって思った」

「何バカなこと言ってんだよ。お医者さんもしっかり治療すれば、すぐに治るって言うてくれたんだろ。母さんらしくないこと言うなよ。母さんは、僕と父さんが健康で元気でいてほしいと思ってるんだろうけど、僕と父さんは、母さんが健康で元気でいてほしいと思ってるんだから。そんな弱気なことは絶対言わないでよ」

僕の体が熱くなった。

「ごめんなさいね。あたし頑張るわ」

母さんが微妙な笑みを浮かべた。

明日は仕事があるので、後ろ髪をひかれる思いだが、今日中に愛知県へ戻ることにした。病院から駅まで少し距離はあるが歩いて帰りたい気分だった。

病院を出たら、ムツとした空気が体を包み、息苦しいくらいだった。ニュースでは真夏日が続いていると言っていた。歩き出すとすぐにどっと汗が吹き出した。やっぱり病院の送迎バスに乗った方がよかったかなと、額から流れる汗を拭いた。

短い影を見ながら田舎道を歩いた。田んぼや畑の緑が太陽の光を受けて輝いて見えた。背中に人の気配を感じ顔を向けると、そこには黄色く輝いて咲く向日葵が見えた。僕の背丈ほどある大きな向日葵がきれいな花を咲かせている。どの花もお陽様に向かって顔を上げて笑っているように見えた。母さんの笑顔とキャラ弁を思い出した。少し落ち込んでいた気持ちがパッと明るくなった。見るだけで、人を元気にしてくれる向日葵の力ってすごいなと思った。すぐにポケットからスマホを取り出し、目の前の向日葵を写真に収めた。落ち込んだ時はこの写真を見て元気をもらおうと思った。

そう言えば、僕が大学の時に母さんの作ってくれたキャラ弁は恥ずかしかったけど、いつもこんな気持ちにしてくれた。あのキャラ弁も食べる前に写真に収めておけばよかつ

た。そうだ、母さんが元気になったら、また、あのキャラ弁を作ってもらおう。そして、それを写真に収めることにしよう。

母さんは向日葵のような笑顔が似合う。だから、きっと病気を克服して元気になってくれる。僕は今撮った向日葵の写真とまたキャラ弁を作ってほしいとメッセージを書いて母さんにラインを送った。

母さんからすぐにオーケーと返ってきた。とびきりの笑顔と向日葵のスタンプが続けて届いた。

向日葵の秘密

著 まつだつま

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
